

# 高校から大学、 そして社会へとつながる 「学び」を育てる

～高校生・大学生のキャリア形成 発達の視点から～

第22回高大連携教育フォーラム 報告集

京都高大連携研究協議会

京都府教育委員会／京都市教育委員会／京都府私立中学高等学校連合会

京都商工会議所／公益財団法人 大学コンソーシアム京都

# 目 次

---

<b>開会挨拶</b>	01
小原 克博（京都高大連携研究協議会 会長／大学コンソーシアム京都 理事長／同志社大学 学長）	
<b>趣旨説明</b>	03
長谷川 豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）	
<b>発表資料</b>	06
<b>基調講演 1</b>	11
学びにおける "I" の価値 ～学校を、もっともっと「自由な場」にするために～ 寺田 拓真（広島県総務局付課長／元 文部科学省教育改革推進室専門調査官）	
<b>発表資料</b>	20
<b>基調講演 2</b>	29
「探究×キャリア教育」がつなぐ高校・大学の学び 酒井 淳平（立命館宇治中学校・高等学校 教諭）	
<b>発表資料</b>	40
<b>指定討論・質疑応答</b>	55
登壇者 寺田 拓真 酒井 淳平	
コーディネーター 乾 明紀 （大学コンソーシアム京都 高大連携推進室員/京都橘大学 経済学部 教授）	
<b>第 1 分科会</b>	75
高校での探究活動を、どのように高校生のキャリア形成・発達につなげるのか ～指導のあり方、校内体制、展望や苦悩の視点から～ 中井 裕彰（京都府立宮津天橋高等学校（宮津学舎）教諭） 戸田 智和（京都府立洛北高等学校 教諭） 乾 明紀（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室員/京都橘大学 経済学部 教授） 井上 実（京都府教育委員会 指導部 高校教育課 指導主事）	
<b>発表資料</b>	77
<b>第 2 分科会</b>	85
高大連携によるキャリア教育 －大学、高校双方にとって持続可能で有意義な連携のあり方とは？－ 宮越 敬記（京都市立塔南・開建高等学校 教頭） 東山加奈子（龍谷大学 高大連携推進室 課長） 上杉 まり（京都市教育委員会 指導部学校指導課 指導主事） 竹田 昌弘（京都市教育委員会 指導部学校指導課 参与）	
<b>発表資料</b>	87

<b>第3分科会</b>	91
高大における情報教育の課題と挑戦 ～受験指導、AI教育の行方～	
高畠 祐輔（東山中学高等学校 教諭）	
山田 修司（京都産業大学 理学部 教授）	
長谷川卓也（京都橘高等学校 教諭）	
<b>発表資料</b>	93
<b>特別分科会①</b>	105
大学入試におけるリスクマネジメント	
共催：JACUAP大学アドミッション専門職協会	
木村 拓也（九州大学 人間環境学研究院 教育学部門 教授）	
山本以和子（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室員/京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授）	
<b>特別分科会②</b>	107
総合的な探究の時間と教科における探究との往還をどのように取り組めばいいのか	
阪本 和則（京都府立南陽高等学校 教諭）	
清永 雄亮（京都府立山城高等学校 教諭）	
滋野 哲秀（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室員/日星高等学校 校長／元 龍谷大学文学部教授）	
<b>発表資料</b>	110
<b>2024年度京都高大連携研究協議会役員・委員一覧</b>	121

※各登壇者の職名は2024年11月16日時点のものです。

## 開会挨拶

小原 克博

(京都高大連携研究協議会 会長／大学コンソーシアム京都 理事長／同志社大学 学長)



ただいまご紹介にあずかりました、京都高大連携研究協議会会长、公益財団法人大学コンソーシアム京都理事長の小原でございます。第22回高大連携教育フォーラムの開催に当たり、主催者を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

本日は全国から、高等学校、大学の教職員、学生、教育関係者など、多くの方々にご参加いただきましたことを、この場を借りて厚く御礼申し上げます。本日のフォーラムが皆さまにとりまして新たな発見の場となり、これからのお活動に生かすことができる、実りある機会となればということを願っております。

本フォーラムは毎年、高等学校・大学間の接続教育における国内動向の情報共有と、京都における取り組みの情報発信、および事例研究を目的に開催しており、今回で第22回目となります。主催者であります京都高大連携研究協議会は、産官学という京都ならではの面と面との連携による人材育成を目指し、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所、大学コンソ-

シアム京都が連携して、2003年5月に発足をいたしました。本協議会が今日という日を迎られましたのは、ひとえに本日ご参加いただいている皆さまをはじめ、本協議会を構成する関係各位の並々ならぬご理解とご協力の賜物と理解しております。

現在、日本は生産年齢人口の急減や労働生産性の低迷、グローバル化など、激動の時代を迎えております。これからは労働、職業のあり方も大きく変わっていくことが予想されております。今ある仕事が、これから将来も長きにわたって存在するとは限りません。子どもたちが将来、社会に出るときには、今は存在していないような仕事に就く可能性も非常に高いと言われております。こうした非常に変化の激しい、いわゆるVUCAの時代を生きていくために必要な学習の1つが探究学習だというふうに言われております。探究学習とは生徒自らが課題を設定し、解決に向けて情報を収集、整理、分析したり、周りの人たちと意見交換、協働したりしながら進めていく学習活動のことです。

高等学校では学習指導要領の改定により、2022年度よりこれまで取り組んできた総合的な学習の時間を改め、生徒自身が主体的に課題を設定し探究する、総合的な探究の時間が始まり、今まで以上に自分自身のあり方や生き方をしっかりと見詰め直し、考えながら関連する課題を自らが発見し解決していく、キャリア教育につながる取り組みがなされています。こうした状況をしっかりと踏まえた上で、大学側

といたしましても、また大学コンソーシアム京都としても、高大連携事業にどのように関わっていくか、これから入ってくる入学者にどのように対応する必要があるのかということも大きな課題であると感じております。

本日のフォーラムは「高校から大学、そして社会へつながる『学び』を育てる～高校生・大学生のキャリア形成・発達の視点から～」をテーマに開催いたします。まさに高校での探究学習の取り組みの現状と、今後を学ぶには最適な内容であると思います。本日、参加された方々の、それぞれ立場は違えども生徒から学生、高校から大学、社会へと向かう一人一人のキャリア形成や発達の視点から共に理解を深めることで、今後の高校と大学との連携が一層深まっていくことを期待しております。

最後になりましたが、ご多用中にも関わらず、本フォーラムにご参加いただきました皆さん、また本日ご登壇をご快諾いただきました先生方に感謝を申し上げます。それと共に、皆さまのますますのご健勝と今後のご活躍を祈念いたしまして、開会の挨拶とさせていただきます。

## 趣旨説明

高校から大学、そして社会へとつながる「学び」を育てる  
～高校生・大学生のキャリア形成 発達の視点から～

長谷川 豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）



(スライド1)ただいまご紹介にあづかりました、京都府立大学の長谷川です。第22回を迎えます高大連携教育フォーラムの趣旨について、説明させていただきます。

先ほど、会長から今回のテーマについて丁寧に触れていただきました。なぜこのテーマにしたのかですが、本フォーラムも22回目を迎え、高大だけではなく高大社の連携の取り組みも、今後一層必要になってくるのではないかと考えました。次の展開にむけて皆さま方と共に考えていくといった趣旨で、このようなテーマを掲げました。

(スライド2,3)少し踏み込んでお話しします。高大接続改革の中央教育審議会答申が出て今年で10年目になります。新カリキュラムに基づく大学入学共通テストが今度の1月に実施されるなど、転換点を迎えてます。約10年の間に、非常に様々なことがあったのではないかでしょうか。急速に展開している中で、改めて高大接続改革について考えるとともに、さらにその次を見通すべく、本フォーラムでは足を踏み出すことにしました。

(スライド4)第4期教育振興基本計画では、持続可能な社会の作り手の育成、そして日本社会に根差したウェルビーイングの向上、の大きく2つのコンセプトを掲げています。

(スライド5)個人と社会、個人と高校、大学、そして社会へとつなげて考えていくことがより大事になってきています。個人のウェルビーイングだけではなく、学校や地域社会を含めウェルビーイングをどのように考え、向上させていくのかが基本計画の大きなコンセプトになっています。

(スライド6,7)基本計画の中では、日本社会に根差したウェルビーイングと銘打っています。さらに、主観的ウェルビーイングというキーワードも盛り込まれています。

個人がどのように、今ある環境や自分自身の今の到達点、これから学びを考えることができるのか、それを主観的に、ポジティブに捉えていくことができるかが重要なのでしょうか。

(スライド8)この基本計画の中では、子ども、若者、学校、家庭、地域、社会、また学校では教師を含めたウェルビーイングが強調されています。

(スライド9)では、子どもたちの状況は一体どうなのか。NHK放送文化研究所が長年にわたって子どもたちの生活と意識調査に取り組んでいますが、スライドはそれをグラフ化したものです。

「あなたは、今、自分を幸せだと思っています

か？」という質問で、高校生だけを取り出ると、それほど大きくは変わっていないように見えます。一方「あまり幸せではない」「まったく幸せではない」という高校生が以前に比べると多くなっています。同一人物ではないので単純比較はできませんが。

(スライド10,11)また、自身の「生き方」について「がんばるか楽しむか」では、最近は「人生を楽しむ」傾向が高いようです。

(スライド12)日本財団も18歳の青年に対し「夢を持っているか」などの意識調査を行い、国際比較をしています(2019年と2024年)。「将来の夢を持っている」か、「自分で国や社会を変えられると思う」かとの質問に対して、日本の青年は「はい」と回答した割合が他国に比べて低く、ニュースでも話題になりました。日本の18歳の意識は、全体的に肯定的ではないと受け止められています。

(スライド13)日本財団は今年も調査を実施しています。同じ調査ではないものの、いくつか共通する項目があります。その一つ「将来の夢を持っているか」という設問では、対象が違っているにも関わらず、前(2019年)の調査とまったく同じ数値となっています。

(スライド14)また、「自分で国や社会を変えられると思う」という設問では、日本は2019年よりは上がっているものの、(他国に比べて)低い数値です。

自分と社会との関係について、このような青年の意識をどのように受け止めるかを考えておく必要があります。

(スライド15)ウェルビーイングは幸福度と訳されたり、幸福感と言われたりします。日本の高校生の感覚としては、「どのような国になってほしいか」といった設問に対し、「国民の幸福度が高い国」という回答が「平和な国」に次いで高いようです。「平和な国」は多くの国で高い傾向です。

日本の18歳にとって、幸福な国であることを

求めているけれども「教育水準が高い国」があまり高くないのは、後者はもう達成できていると感じるものの、前者は達成できていないということなのかもしれません。

(スライド16)コロナ禍にあって、子どもたちが学校との関係をどう感じているか(「学校への所属感」という調査がOECD加盟国で行われました。OECDでは、「学校への所属感」が教育におけるウェルビーイングの指標の一つにされていますが、この数値が日本は大変上がりました。コロナ禍で、学校の存在が子どもたちにとって大きかった、日本の学校教育は大変努力をし他国に比べて成果を上げたと言われます。

とはいっても、すべての子どもがそういうふうになっているわけではありません。

(スライド17)日本の18歳の感覚では、「学校で勉強する意味」は「将来の所得が高くなる」という点は他国に比べて少し低いのですが、「勉強することが義務だから」という捉え方は他国よりも高くなっています。学校での勉強は義務的なものととらえらる傾向にあるようです。

そして、日本の18歳は仕事を選ぶ上で「楽しいかどうか」を重視するようです。仕事が「楽しいかどうか」は他国ではかなり下位の項目なのですが。

あと、「人生において大切にしたい」項目のトップは、他の国の18歳だと「家族」なのですが、日本の18歳は「自身の好きなことややりたいこと・趣味」です。

(スライド18)こうした青年の意識をどう見るのか。高校生自身が学んでいることと社会とのつながりをどのように考えているかを踏まえながら、キャリア教育も含めて高大社の連携に取り組んでいく必要があります。

(スライド19)高校生たち自身が今いる学校から大学へ、さらには社会とつながる見通しであったり、将来展望をしつかり持ち合わせるのかどうかを意識しながら、高校や大学での日々の教育が大事だと考えます。日々の取り組みの

中で、より良い学校づくりや社会づくりにつながっていくと、高校生たち、青年たちが経験する、体感することが重要になっているのではないでしょうか。

(スライド20～22)このような点を踏まえて、キャリア形成、キャリア発達と関連づけていければと考えます。この間の中教審答申で触れられている点、急ぎますがスライドを斜め見していただき、イメージを持っていただければと思います。

(スライド23～26)つい最近、大学関連の中教審答申の素案が出ましたが、その中に「高等学校段階までに培われた資質・能力を高等教育においてどのように伸ばしていくか」という高大接続の悦点から高等教育段階における学修の在り方を再構築していく必要があ」と記述されています。

この高大接続に留まらず、さらにその先を見通すことが、より大事になってきています。求める資質・能力については大学と社会とのずれ(相違)があることから、対話を通じて克服していくことも重要な課題になっています。

(スライド27～28)会長の挨拶にもございましたが、2040年、2050年を見通すと大幅な人口減という状況があり、高校、大学をどのようにつぐっていくのかが問われます。こうした社会状況を見通しながら、高大社の連携・接続を考えていきたいと思います。

今日は2つの基調講演と指定討論、2部では5つの分科会、夜には情報交換会を設けています。皆さん、今日一日お互いしっかりと学び合って、元気になって、来週からの取り組みにつなげていただければ幸いです。どうぞよろしくお願ひいたします。

スライド 1

第22回 高大連携教育フォーラム  
高校から大学、そして社会へつながる  
「学び」を育てる  
～高校生・大学生のキャリア形成・発達の視点から～  
趣旨説明

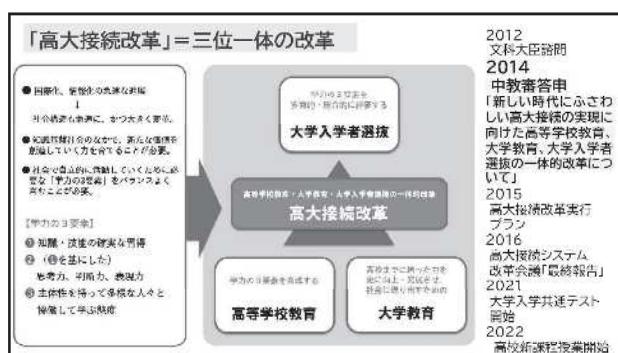
京都高大連携研究協議会  
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室  
長谷川 豊(京都府立大学)

スライド 2

本フォーラム趣旨①

●中央教育審議会のいわゆる「高大接続改革」答申から10年を迎える。この間、高校では改訂された学習指導要領に基づく授業が今年度からすべての学年で実施されている。2021年から開始した大学入学共通テストは、2025年からは新課程における「主体的・対話的で深い学び」をとおして身に付けた力を問うとされる。

スライド 3



スライド 4

本フォーラム趣旨②

●他方、コロナ・パンデミックや国際情勢の不安定化、生成AIの登場などにより未来予測がいっそう困難となり、少子化や格差拡大など課題が山積する下で、第4次教育振興基本計画は策定された。同計画は「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」をコンセプトとして掲げている。

スライド 5

「第4期教育振興基本計画」(2023~2027年度)の  
2つのコンセプト [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/](https://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/)

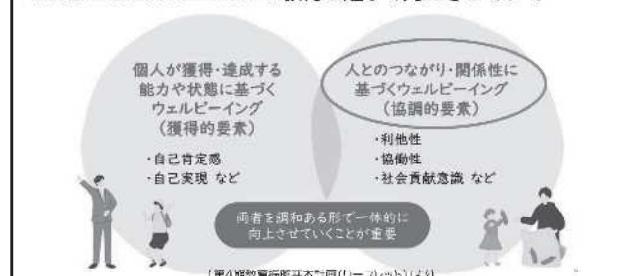
1.持続可能な社会の創り手の育成  
2.日本社会に根差したウェルビーイングの向上

- 多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるよう、教育を通じてウェルビーイングを向上
- 幸福感、学校や地域でのつながり、協働性、利他性、多様性への理解、社会貢献意識、自己肯定感、自己実現等を調和的・一体的に育む

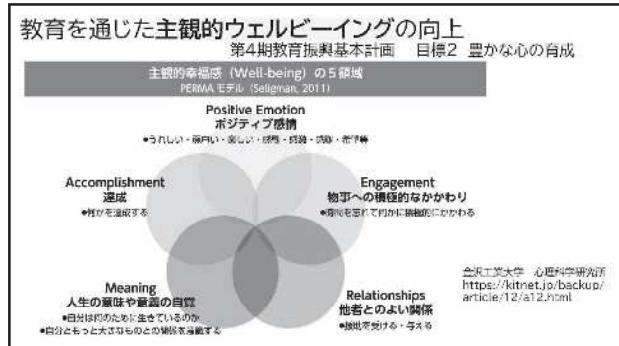
▶ ウェルビーイングとは身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。

スライド 6

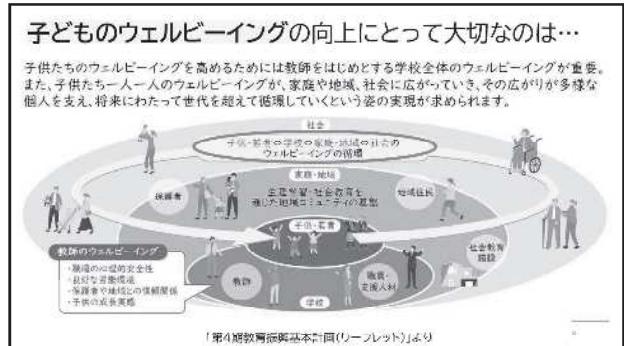
日本社会に根差した「調和と協調(Balance and Harmony)」に基づくウェルビーイングを教育を通じて向上させていく



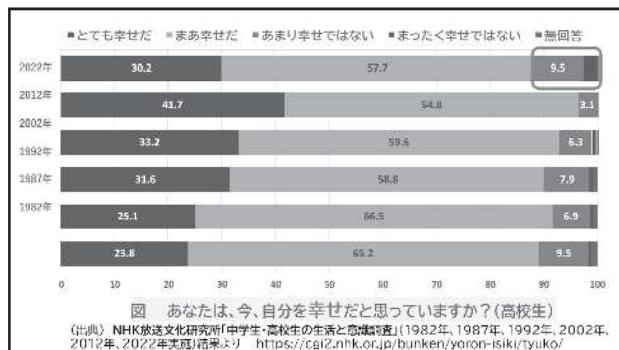
スライド 7



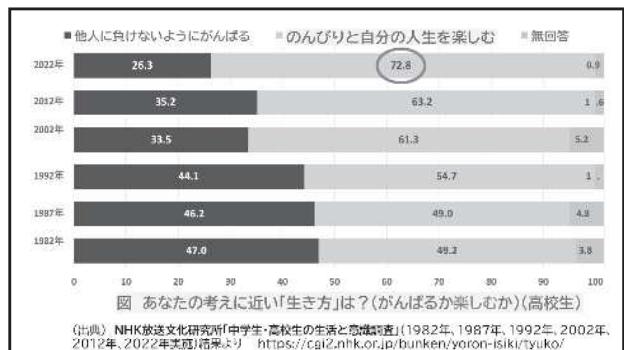
スライド 8



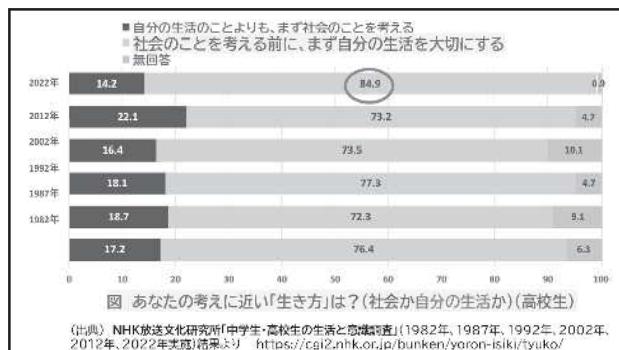
スライド 9



スライド 10



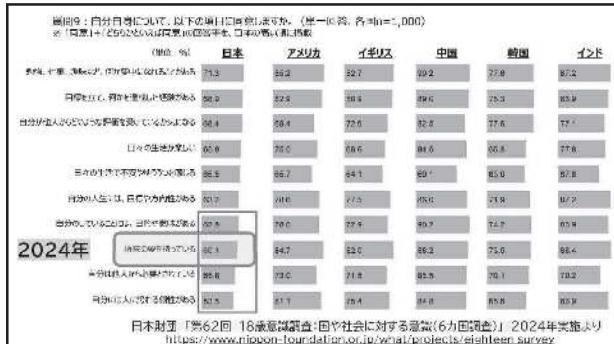
スライド 11



スライド 12

Q1. あなた自身について、お答えください。(各選択肢の合計が100%になります)		日本財團「第20回 16歳就職意識調査:社会や国に対する意識調査(9月開催実施)」2019年実施より					
年齢	性別	性別	性別	性別	性別	性別	性別
2019年	性別を教えてください	自分は性別をどちらか選ぶのが好き	性別が決まっている	自分は性別をどちらか選ぶのが好き	性別が決まっている	自分は性別をどちらか選ぶのが好き	性別が決まっている
10代	(n=1000)	50.0%	50.0%	50.0%	50.0%	50.0%	50.0%
~10代	(n=1000)	104.0%	92.0%	105.0%	92.0%	104.0%	92.0%
10代男子	(n=1000)	70.0%	68.0%	70.0%	68.0%	70.0%	68.0%
10代女子	(n=1000)	30.0%	32.0%	30.0%	32.0%	30.0%	32.0%
20代	(n=1000)	40.9%	37.6%	40.2%	39.6%	40.9%	37.6%
30代	(n=1000)	25.5%	24.3%	24.4%	24.3%	25.5%	24.3%
40代	(n=1000)	10.3%	9.2%	10.3%	9.2%	10.3%	9.2%
50代	(n=1000)	4.0%	3.6%	4.0%	3.6%	4.0%	3.6%
60代	(n=1000)	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%	1.0%
70代	(n=1000)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
80代	(n=1000)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
90代	(n=1000)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
100代	(n=1000)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

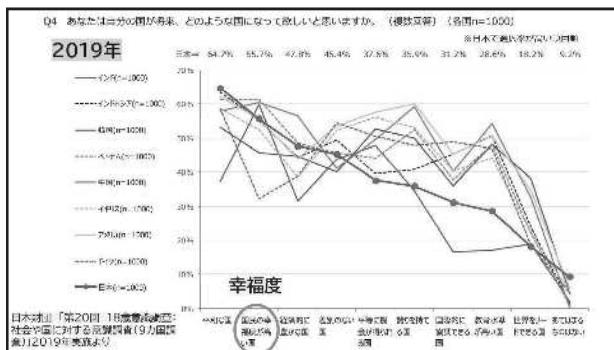
## スライド 13



## スライド 14



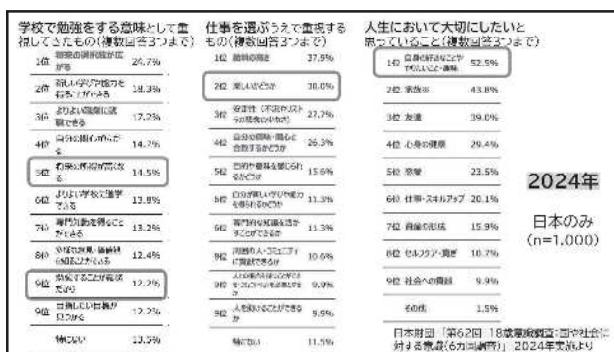
## スライド 15



## スライド 16



## スライド 17



## スライド 18

### 本フォーラム趣旨③

- いまここで学ぶことと自己と社会の将来とのつながりを意識しながら、生きる基盤となる資質・能力を身に付け、自分らしい生き方をよりよい社会づくりとともに実現していくという、子ども・若者のキャリア形成・発達が求められている。

## スライド 19

## 本フォーラム趣旨④

- 今回のフォーラムでは、探究をとおした「学び」が高等学校から大学、社会へと向かう一人一人のキャリア形成とどのようにつながるのか、加えてこの「学び」の経験の往還を通じたよりよい学校づくり・社会づくりのあり方を探る。

## スライド 20

## 子どもの学びの姿として。。。

- 幼稚教育から小学校、中学校、高等学校、大学・社会といった段階を通じ、一貫して、自らの将来を見通し、社会の変化を踏まながら、自己のキャリア形成と関連付けて学び続けている。

中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申) 2021年1月

3. 2020 年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿  
⑤各学校段階を通じた学び p.21

## スライド 21

## 第Ⅰ部 総論

3. 2020 年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿 pp.17-18

- ・全ての子供に基盤的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。
- ・基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、児童期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定・情報の収集・整理・分析・まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。
- ・以上の「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申) 2021年1月

## スライド 22

## 第Ⅱ部 各論

3. 新時代に対応した高等学校教育等の在り方について p.50

- さらに、高校教育を取り巻く状況をみると、産業構造や社会システムが「非連続的」とも言えるほどに急速に変化しており、少子化の進行によって、高等学校としての教育的機能の維持が困難となっている地域・学校も生じているなど社会経済の有り様を踏まえた、高等学校の在り方の検討が必要である。高等学校は初等中等教育段階最後の教育機関として、高等教育機関や実社会との接続機能を果たすことが求められており、また、選挙権年齢や成年年齢が18歳に引き下げられることなどを踏まえ、生徒が高等学校在学中に主権者の一人としての自覚を深めていくための学びが求められている。このため、高等学校においては、社会経済の変化を踏まながら、自己のキャリア形成と関連付けて生涯にわたって学び続けていくけるよう、2.(2)①で述べた義務教育段階での取組をより発展させる形で、学びに向かう力の育成やキャリア教育の充実を図ることが必要である。

中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申) 2021年1月

## スライド 23

## 大学と高校、産業界、地域社会との連携・接続。。。

⑥高等教育機関を取り巻く環境・組織との接続の強化

ア. 初等中等教育との接続の強化

- 初等中等教育段階においては、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の3つの柱をバランス良く育成することを目指すとともに、高等学校での総合的な探究の時間」や「理数探究」等における問題発見・課題解決的な学習活動の充実が図られるなどの教育内容の変化や、1人1台端末の導入による新たな教育手法の展開等、高等教育機関へ進学する生徒の学びに変化がみられる。

- そのような中、高等学校段階までに培われた資質・能力を高等教育においてどのように伸ばしていくかという高大接続の視点から高等学校段階における多様な学びに対応した大学入学者選抜の改善を促進するなど、初等中等教育と高等教育との接続の強化を図ることが重要である。

中央教育審議会「高等教育の在り方に関する特別部会「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について」」(答申【案】) 2024年1月7日

## スライド 24

- また、初等中等教育段階の学校と高等教育機関との連携の下、実際に高等教育機関で扱われている研究テーマについて、課題の発見や仮説の設定、それらを裏付ける実験や調査の組み立て方、一連の課題解決のプロセスをレポートにまとめ発表する方法等を大学教員等が児童生徒に指導するプログラムもあるが、こうした取組は、研究の魅力を伝え、より適切な進路選択に資するだけでなく、思考力・判断力・表現力等や学びに向かう力・人間性等を総合的に伸ばす観点からも有効である。

イ. 社会との接続及び連携の強化

- 大卒に求められる資質と技能の国際比較調査によれば、大学で取得することが期待されるコンピテンスの認識について、大学教員は、理論的思考や分析力、知識適用力や問題特定・解決力等の技能的コンピテンスが必要と考える一方で、企業は対人関係や自己管理力及び協調性等の資質的なコンピテンスを重視するという相違がある。…

中央教育審議会「高等教育の在り方に関する特別部会「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について」」(答申【案】) 2024年1月12日

## スライド 25

### ウ. 地域社会の持続的な発展への貢献

- …高等教育機関が**地域の中核的な拠点**となっていくためには、地域の発展のために貢献するとともに、地方公共団体、産業界、金融機関等、地域の様々なステークホルダーも一体となって 取組を進めていく両者の関係の構築が必要不可欠である。…
- …地域の高等教育機関を核とする**地域活性化や人材育成**を図ることは、我が国の多様な文化を生かした多様な教育研究の場を形成することにつながり、日本全国や世界各国から優秀な学生が集まることが期待される。多様な文化的背景を持つ学生がキャンパスで過ごす中で、その高等教育機関を育んだ地域の魅力を知るとともに、人的ネットワークを形成することで、その地域への愛着や誇りが醸成され、卒業後も地域に関わり続けるようになるという好循環が生まれることも考えられる。魅力ある地域の高等教育機関の存在が、地方に在住する進学希望者にとっての学びの場となっていくことが期待される。

中央教育審議会・高等教委の在り方に関する特別部会「急速な少子化が進行する中の将来社会を見据えた高等教育の在り方について」(答申[議案]) 2024年1月12日

## スライド 26

### キャリア形成にとって学ぶことの意義や価値の理解

- ・自分の将来における生き方や進路を模索し、大人の社会でどう生きていくかという課題に出会う時期である高等学校段階においては、**自らの将来のキャリア形成を自ら考えさせ、選択させること**が重要になる。また、高校生にとって、小学校・中学校での学びを基礎としながら、高等学校卒業以後の教育や職業、生涯にわたる学習とのつながりを見通すことは極めて重要であり、全ての教育活動を通して「学ぶことの意義」や「学ぶことの価値」を知らせることは不可欠であると言えよう。現在の学習と「大人の世界(=未来の私の世界)」との接点を発見する場でもある就業体験活動(インターンシップ)は、新たな学習課題や自分の未熟さ(=発展・成長の可能性)の気づきにもつながる貴重な機会となる。

文部科学省「中学校・高等学校キャリア教育の手引き―中学校・高等学校キャリア指導実践案(平成29年・30年公示資料一)」(2023年3月) p.88  
[https://www.mext.go.jp/e\\_menu/shoto/career/detail/nest\\_0019.html](https://www.mext.go.jp/e_menu/shoto/career/detail/nest_0019.html)

## スライド 27

### 本フォーラム趣旨⑤

- 高校生・大学生が自らの在り方生き方を考え、興味・関心のあることを見出し探究するなかで、そのキャリア形成・発達の促進、支援等における課題について、高校、大学、社会の当事者がともに考える機会とする。

### 《第22回 メインテーマ》

- 高校から大学、そして社会へとつながる「学び」を育てる  
～高校生・大学生のキャリア形成・発達の視点から～

## スライド 28

### 本日は、

第1部 2つの基調講演＆指定討論

第2部 5つの分科会

そして、、、情報交換会

ご清聴ありがとうございました

## 基調講演 1

### 学びにおける"1"の価値 ~学校を、もっともっと「自由な場」にするために~

[講師] 寺田 拓真（広島県総務局付課長／元 文部科学省教育改革推進室専門調査官）



皆さん、こんにちは、寺田と申します。今日は、皆さま方と一緒に学び合えることをすごく楽しみにしていました。実は、朝に間に合わないから1泊させてもらうために、昨日、京都に入らせていただいて、四条烏丸を少し散策したんですが、京都は外国人観光客の数がすごいですね。広島も割と外国人観光客が多いですが、欧米系の方ばかりです。京都はアジアの人もすごく多いなと思って、少しひっくりしました。ただ、先斗町の高いお店に外国人の人たちが次々に入っていくのを見ながら、少し離れたところにある、なか卯やすき家で若者が寂しくご飯を食べている姿を見て、日本は大丈夫かなと少し心配になりました。

広島の教育について、皆さんはどういうイメージがありますか。私は、もともと文部科学省の人間なのですが、文部科学省時代に「H<sub>2</sub>O」というある造語がありました。全国の都道府県の中で、教育上なかなか難しい地域のインシャルを取って「H<sub>2</sub>O」と言います。このHの1つが広島県です。今はそんなことないと思いますが、広島県というのは平成10年に文部科学

省、当時は文部省から是正指導を受けた日本で唯一の都道府県です。是正指導が入る前、広島県の学校現場では「子供たちに学力を付けさせてはいけない」と言われていた時代がありました。というのはなぜかというと、非常に苦しい困難な地域に住んでいる、困難な家庭に生まれた子どもたちがたくさんいる状況の中で、学校が学力を身に付けさせる対策をやり過ぎると格差が生まれるのでないかということで、学力を身に付けさせるのではなく多様な個性を認めていきます。運動会で50メートル走をやらせると、走っていって、みんなゴールの前で並んで待っています。全員来たといって、みんなで手をつないでゴールインすると、みんなが1等賞になれるという教育を、30年くらい前に広島県で実施していました。

教育改革をやってくれという知事からの依頼がありまして、私は広島で教育改革をやりましたが、そのときに中心に据えたのが探究でした。ただ、ある大学の先生に言われたのは「広島は向かないね。広島で探究を中心とした教育改革は失敗すると思うけどな」といった話をされました。なぜかというと、是正指導の後、非常に統制的で管理型の教育行政の仕組みを作り上げて、そして基礎学力の重視と進路実現の保証をすごくやってきたので、ともするとそれと探究がうまく相入れないのではないか、といった話があり、かなり試行錯誤をしてきた経緯があります。広島も全然完全なものではないという

か不完全だらけなんです。広島で何をやってきたのかというお話をさせていただいてもいいのですが、それだと「そんなこともあるのか」で終わってしまうと思いますので、今日はどちらかというとその根っこにあるもの、何を目指してやつてきているのか、広島の教育改革は一体どういうところを目指しているのかを紹介させていただきつつ、一部、個人的な見解を申し上げさせていただこうと思っております。

(スライド2~4)まず、最初に自己紹介ですけれども、先ほど、ご紹介していただいたように、もともとは文部科学省に入っていて、教育改革の仕事をやっていました。広島に籍を移しまして、学びの変革推進課長をやっておりました。普通は出向で文部科学省から県に行くと3年くらいで帰るのですが、文部科学省を辞めまして、そのまま広島に残っています。学びの変革という教育改革をやったり、広島歴智学園をつぐったりしました。高校生の海外留学もすごい人數で、私が着任した頃は70人くらいしかいなかつたんですけども、最終的には500人弱まで増やすこともやってきました。

立命館アジア太平洋大学にもご縁を頂いて、特別研究員をさせていただきました。ミシガン大学に留学をさせていただいて、今は県の課長もしながら、福山市という広島県内の第2の都市で教育改革の担当部長の仕事もさせてもらっています。

(スライド5)ミシガン大学はあまり知られていないかもしれません、アメリカではそこそこ有名な大学です。学習科学というものを勉強してきました。

(スライド6)学習科学はアメリカでは結構メジャーですが、日本ではありませんといふ感じです。教育学は何を教えるか、どう教えるか、といった学問ですが、学習科学は、認知心理学や脳科学とか教育学とかがくついたような学問で、人はどのように学ぶのかというところを中心に研究をしています。今日は学習

科学の関係の内容も少しご紹介させていただきながら、お話ができたらと思っております。

(スライド7)去年、新著『教育改革を「改革」する』という本も出させていただきました。

最初に、お手元にある冊子のレジュメの中に入っている資料は、このとおりになっていない部分がたくさんあるので、いちいちメモを取っていただくよりも、終わった後に言っていただければ送りますから、一生懸命メモを取っていただく必要はないということを念のために申し上げておきます。

(スライド8,9)先ほど、申し上げた、学びの変革という、これは教育改革のビジョンですが、2014年に始めました。今から10年前、つまり中央教育審議会でまだ現行の学習指導要領の諮問が始まったぐらいの頃に、広島は学びの変革と探究を立ち上げたわけです。この検討の有識者会議をやっていたときに、ある企業の方からこんな話を頂きました。

(スライド10)これは今の教育の課題というか問題点を如実に表していると思ったので、ご紹介させていただきます。

ある企業で新入社員向けの研修をやったそうです。そしたら、新入社員の人たちは人事課から与えられたプログラムをものすごくいい成績でクリアしていき、社内からは今年の新入社員は優秀と評判になりました。ですが、研修後、いざ現場に出ると、新入社員の上司たちから人事課に「今年の新入社員は主体性が全くない」という内容のクレームが相次ぎました。人事課は新入社員の人たちに「なぜ、そうなったの?」と聞くと「だって、主体的になれと指示されていないですもん」と彼らは言ったそうです。冗談みたいな話だと思うでしょう。でも、こういう要素があると思っています。つまり、彼らは主体性の意味は知っており、ペーパーテストで「主体性はどれか」「主体性の定義を書きなさい」と言ったら書くことができるのです。書くことができるけれども、実際に行動できないし、さらに言うと、

今、主体的にならなければいけない場面なのか、場面ではないのかを自分が判断できない状態になっています。もしかしたら知っているけれども使えない、知っているけれども行動できないという状態が生まれているのではないかというのが、学びの変革の1つの原動力になりました。

(スライド11) 学びの変革で何を目指したかというと、4つの観、ビジョンの転換をしましようということで、まず最初に授業観は教師中心ではなく学習者中心にしていきましょうという話です。そして、子ども観は受動的な聞き手ではなくて主体的な学び手として見ていきましょうということです。ゴールは、コンテンツ、教科書を端から端まで終わらせることではなくて、先ほどの話のように行動できるコンピテンシーを育成していきましょうという話です。そして4番目、これは学習科学的になりますが、行動主義的な学習観から社会構成主義的な学習観です。社会構成主義的な学習観というのは、下の※2つに書いていますが、知識やスキルを学習者自身が意味付け・価値付ける、活用、協働、対話、振り返りを重視した、実践的でダイナミックなカリキュラムを目指していきましょうというのが、この4つの転換を実現するのが学びの変革という形で10年間、取り組んできています。

(スライド12) 今日は、最初に「教育のこれから」と一緒に考える機会をつくりたいと思っています。最初に1つお願いがあるのですが、途中にペアワークが何回かあります。なので、この場でどなたとペアでやるのかを決めていただかないとい、残り40分くらい独りぼっちで過ごすことになる時間が多くなるので、今、決めていただけますでしょうか。いいですか。どうしても2人が難しければ、3人でやってもらってもいいです。

(スライド13,14) では、始めいきます。最初に、一緒に来られた方はご存じの方も多いと思いますが、パートナーの方を知らない人もいる

かもしれませんので、お知り合いになつてもらうのがいいかなと思っております。名前とお仕事と、どこから来たのか、最近はまつてることの4つを1分間で、お互に交流をしていただけますでしょうか。よろしくお願ひします。

#### <話し合い>

はい、ありがとうございました。自己紹介がすごく盛り上りますね。

(スライド15) 早速ですが、まず「教育のこれから」について、どういうふうに教育が進んでいくべきなのかと一緒に考えていきたいと思います。

(スライド16) 教育改革のトレンド、とりわけ初等中等教育の世界はこういう話が盛り上がっているというところで、一緒に考えてみたいなと思っています。3つ出します。まず1つ目、アクティブ・ラーニングです。これは、もともと高等教育の話ですから、ご存じの方はいらっしゃいますよね。まだ挙げておいてください。すみません、アクティブ・ラーニングを説明していただいまいですか。

会場1： 僕の理解は、仲間同士で頭の中をアクティブにすることです。

寺田： ありがとうございます。拍手をお願いします。では、2番目です。今のやつをやると手が挙がらなくなるんですけれども、最初の開会のごあいさつで会長からもございましたが、探究的な学び、探究的な学習をご存じの方はいらっしゃいますか。先生、お願ひします。

会場2： 生徒自らが課題を設定して学んでいく仕組みです。

寺田： はい、ありがとうございます。拍手をお願いします。

3番目をやると、もはや誰も挙がらなくなる気がするので、知らないという人はいらっしゃい

ますか。みんな知っているのですか。では、お願ひいたします。

会場3：すみません。わかりません。

寺田：では、皆さんそれぞれ定義してみてください。この3つについて、今から考えてみたいと思っています。

(スライド17,18)ということで、お手元のワークシートに、アクティブ・ラーニングと探究的な学習と個別最適な学びのベン図がありますが、もう1個、こんなものがあると思います。Qubenaとか『走れメロス』が書いてあり、10個の学習活動の定義が書いてあります。学習活動の定義というか、これが学習活動です、というものが書いてあります。やっていただきたいのは、この10個の学習活動をワークシート1の中のどこにはまるかを考えてほしいです。つまり、アクティブ・ラーニングでもあるし、探究的な学習でもあるし、個別最適な学びという場合は真ん中に来ます。アクティブ・ラーニングだけで、他の2つは違うかなというときは1番上に来ます。全部違うとなったら、他のところに来ます。1番はここ、2番はここというのを書き入れていただく作業をやってほしいです。2分30秒お待ちしますので、できるところまでやってみてください。どうぞお願いします。

<記入中>

(スライド19)はい、ありがとうございました。途中でも大丈夫ですので、せっかくなのでパートナーの方と、こんなふうに書きましたというのを共有してみましょうか。2分くらいお待ちしますので、よろしくお願ひします。

<話し合い>

はい、ありがとうございました。これは、なかなか難しいですよね。なかなか難しくて、今までいろいろな研修会とかでやらせてもらっていますが、以前、教育大学に呼んでいただいたいて、学生向けに授業をやらせていただいたときにこれを

やりました。大学生たちは「活動があって、グループワークを入れれば、全部アクティブ・ラーニングだと思っていました」みたいなことを言っている学生がすごく多かったです。そして、小・中学校の先生方向けにこれをやると「子どもによります」と言われます。ちなみに、大学の先生向けでやると「定義によります」と言われます。それぞれの色があるなと思いました。

(スライド20)この後、次のワークに行く前に、少し実験をしてみたいと思っています。先ほどの並んでいるやつがありますよね。その中の2番目『走れメロス』から私たちは何を学ぶことができるかを、少し聞いてみたいと思います。となったら、きっと会場の皆さまは構えると思いますが、会場には行かないで大丈夫です。誰に聞くかというと、この人に聞きます。チャットGPTです。しかも、無料版の安いほうで聞いてみます。

(スライド21)「『走れメロス』から私たちは何を学ぶことができますか」と聞くと、友情の力だ、信頼と約束の重みだ、自己犠牲の精神だ、のような感じで、これはそうだなと思うわけです。

だから、もう1個やってみようと思います。

(スライド22~24)「忘れられない出来事をテーマに、個人で作文を書きましょう」。忘れるも忘れないもチャットGPTにないのではないかと思いますよね。だって体験していないし、経験していないし、そんなものはできるわけがないと思いますよね。「忘れられない出来事をテーマに、小学生の作文を書いてください」と打ってみると、どうなるかというと「僕の忘れられない出来事」というものが出るわけです。

去年の夏休みに家族で海に行ったときのことです。その日はとても晴れていて、青い空と海がどこまでも広がっていました。波がきらきらと光っていて、とても奇麗でした。僕は妹と一緒に砂のお城をつくったり、貝殻を集めたりして遊びました。二人で力を合わせて、何度も波に

流されないようなお城をつくろうと頑張りました。大きなお城ができたときは、妹が笑顔で「やったね」と言ってくれて、とてもうれしかったです。その後、お父さんとお母さんも一緒に海に入りました。お父さんが「波を乗り越えよう」と声をかけてくれて、みんなで大きな波に立ち向かいました。僕は最初怖かったけれども、家族みんなで手をつないで乗り越えたときは楽しくて、何度も笑ってしまいました。その日の夕方、海の向こうに沈む夕日がとても美しくて、空が赤やオレンジ色に染まっていました。僕は、その景色を見ながら、この夏休みは一生忘れないだろうなと思いました。家族で一緒に過ごしたあの日は、僕にとって宝物のような思い出です。これからも家族と一緒に、色々な楽しい時間を過ごして、たくさんの思い出をつくりたいです。

これは、どうですか。小学生からこの作文が課題で出てきたらA評価を付けたくなりませんか。ちなみに、面白いのは、入れるたびに違う答えが出ます。色々なものが出来ます。というので、色々な人が「国語の勉強とかやらないでいいのではないか、作文も書いてくれるし」みたいなことを言います。ベンチャー企業の社長さんは「学校は、もう役割を終えたよね。オワコンだよね、学校なんてね」みたいなことを言ってきますよね。ということがあるので、少し聞いてみたんです。誰にか、というと、

(スライド25) この人です。

お手元に2枚の資料を入れているんです。縦の様式で右肩にAと書いてあるものとBと書いてあるものの2枚がありますよね。Aは何かといふと、チャットGPTに、人工知能が発達するんだから学校での教科の学習は要らなくなるのではないかということについて、そうだという立場から論じてもらった答えです。Bは、そんなことないと反対する立場から論じてもらったものです。やっていただきたいのは、もう1個のワークシート、ワークシート2を出していただいて、

(スライド26) そこの上に四角い箱が2つある

と思うんですけども、その2つの箱のところにこれを書いてほしいです。チャットGPTの答えを参考にしながら、未来を見据えて、学校はこう変わっていかなければいけないというところを、ご自身の考えを書いていただきたいです。右側は、ここは変わってはいけないというのを、チャットGPTの答えを参考にしながらご自身の考えを書いてください。これは読む時間も必要だと思うので、3分くらい待たせていただきますから、その間に読んで、ご自身の考えを書いてみていただけますでしょうか。

<記入中>

はい、ありがとうございました。せっかくなので、これもパートナーの方とちょっと共有してみていただけますか。少し短くなつて恐縮ですが、1分30秒くらいで、よろしくお願ひします。

<話し合い>



はい、ありがとうございました。一応、これでワークは一段落です。ここから私なりに考えていることを少しご紹介させていただいて、今、考えていただいたことのヒントというか参考になるようなことも含めて、申し上げさせていただこうと思っています。

(スライド27) いきなり、すごく大きな話に移ります。日本中だけではなくて、アメリカで世界の教育改革を色々勉強してきましたが、そのときに学校教育が抱える課題は2つに集約できると思いました。その2つが何かというと、動機付けと転移です。モチベーションとトランスマスターです。要するに、大きく言うと、勉強する気にならない、勉強したことが使えないというこ

の2つに集約できるかなと思っています。

(スライド28)動機付けと転移というのは、学びのプロセスでいうと入口と出口の問題です。学びに入る時の動機付けの問題と、学びが終わった後にそれが使えるようになるのかという転移の問題で、この入口と出口に大きな課題があります。入口の顕著な例でいうと、特に初等中等教育の世界においては不登校です。

(スライド29)ご存じのとおり、不登校生徒の割合はどんどん伸びていて、今は小学校だと60人に一人くらいで、中学校だと17人に一人ということで、1クラスに2人くらいいるような感じです。民間の調査では5人に1人が不登校、あるいは不登校傾向の状態になってしまっているという動機付けの問題があります。

(スライド30)そして、もう一つは転移の問題があります。転移の問題はすごく分かりやすい例で言うと、今はだいぶ改善していると祈りたいですが、(スライド31)平成19年度にやった全国学力学習状況調査の問題でいうと、左側の問題は単純に平行四辺形の面積を求める問題です。右側の問題は平行四辺形の面積を求めることと、長方形の面積を求めて、どちらが広いのかを書きます。平行四辺形も直接のところに線が書いていない、少しひねった問題です。でも、使う知識はそんなに変わらないわけです。この2つの問題を平成19年度の全国学力学習状況調査でやったところ、正答率は左側が96%で、ほとんどみんな答えられていますけれども、右側になった瞬間に18%になってしまいました。学んだ内容がなかなか使えるようにならない、これくらいのひねり方でも使えるようにならないという課題があるわけです。

(スライド32,33)そういう中で、今日、見て、一緒にやっていただいた、アクティブ・ラーニングや個別最適な学びなど、色々なものがあります。手法では、色々な議論や色々な手法の開発が進んでいますが、結局、この入口と出口は一言で言うと学びの価値付けに関する問題だと思っ

ています。つまり、子どもたちが、なぜこれを学ばなければいけないかをどれくらい分かっているのかというところだと思うのです。

(スライド34)学びを価値付けるにはどうしたらしいのか、これは世界中でこういう研究があります。いいことがあるとか、この知識はどんなときに役に立つとか、何が面白いか教えてあげるとか、説明するというのは、やらないよりはやったほうが圧倒的にいいと思います。ですが、これだけだと不十分だと言われています。当たり前ですが、子どもたちが自分で見つけなければいけない、自分たちで発見することがすごく大事なのではないかと思っています。

(スライド35)私は、これまでの教育とこれからの教育を比喩的な例で、これまでが電車型だったとしたら、これからは自動車型になっていかなければいけないという話を広島でも先生方によく言っていました。大きな違いは、電車型のときは運転手が基本的には先生で、子どもたちは乗っているだけで、基本的には一方で、1つの行き方しかないです。だから、時間配分さえ間違っていなければちゃんとゴールにはたどり着いたことになります。小学校が終わったら、駅で中学校の電車に乗り換える感じになって、高校を卒業して、あるいは大学を卒業した瞬間に「目的地です。皆さん、ご自由に好きなところへ行ってください」みたいな感じになります。そしたら、みんなはどこへ行ったらいいか分からなくなってしまいま

す。それに対して、これからは自動車型になって、運転手は子どもたちになっていかなければいけない、ゴールへの行き方も無限大だし、途中でゴールも変わっていく格好にしていかなければいけないということだと思います。こういう話をすると、初等中等教育の先生方は「分かりました。任せればいいんですね」となるわけです。そうすると、ドライバーは子どもたちになっていますが、先生は車のドアを閉めて「はい、

行ってらっしゃい」といった感じになりがちです。でも、どこに行けばいいのかも分かっていない、どうやって行けばいいのかも分かっていないわけだから、ちゃんと助手席か後ろに乗ってあげなければいけないです。同乗者になって「どこに行くの?」「どうやって行きたいの?」と話してあげるべきです。それが、まさにファシリテーターとしての先生の役割になるかと思います。

(スライド36)さらに言うと、学びの価値付けは文部科学省も当然意識はしていて、先ほど、やっていたいただいた個別最適な学びはその一環だと思います。日本の学校教育は、右側の画一的・同調的な学びだとよく言われてきました。集団が強調されていて、みんなで同じことをやることを強要されます。この画一的・同調的な学びを個別最適な学びプラス協働的な学びに持つていこうというのが、令和の日本型教育答申で言っていた内容です。しかし、初等中等教育の世界を見てみると、そうではなく、孤立的な学びの方にいっていることが結構あります。Qubenaを渡して、ギガを渡して「どうぞ、それぞれでやってください」みたいな感じでやっているケースがあって、それを個別最適な学びと呼んでいます。それぞれが端末でドリル学習をやっているケースが結構見て取れます。

何が大事かというと、個の意味においては一人一人の興味・関心と認知プロセスの尊重がすごく大事です。個別最適な学びは、指導の個別化と学習の個性化の二本柱に分かれますが、指導の個別化は結構やっています。でも、学習の個性化はなかなかできません。そういうところで、一人一人の興味・関心をしっかりと尊重していかないといけないです。集団を解体すればいいのかというと、そういうことではないと思います。集団は集団で、集団での一体感と相互のケアが必要です。これが良さだと思います。この2つをちゃんと的確に捉えずに「個別最適な学びを文部科学省がやれと言っているし、教

育委員会もやれと言っているから、やらないといけないよね」という感じでやり始めて、先ほどみたいにやったりしています。僕はワークシート1のワークには、あまり意味が無いと思っています。しかし、学校ではやりがちです。「先生の今日の授業は個別最適だったかな」「でも、ちょっと違うかな」みたいな議論をしがちなんですが、個別最適かどうかではなくて、個別最適な学び、協働的な学びで大事にしなければいけなかった、1人ひとりの興味・関心と、認知プロセスの尊重、集団での一体感と、相互のケアのこの部分があるか、なかったという視点で授業改善をやっていかなければいけないし、高校と大学がつながっていかなければいけないというふうに思っています。

(スライド37)そういう意味でいうと、子どもたちには、この2つの質問さえすれば大体分かると思っています。「何を学んでいるの?」と「何で学んでいるの?」という2つの質問です。これにどれくらいの子どもたちが答えられるかです。これは、大学生でも同じだと思います。「何を学んでいるの?」と聞いたときに、そのコンテンツの名前しか言えない、つまり「江戸時代です」とか、あるいは「平方根です」としか言えなかつたら、それはそこに止まってしまっていることになります。「何で学んでいるの?」と言われたときに、最初のお話にもあったように「勉強しなければいけないので」「義務なので」「教科書に載っているので」「先生が言うので」「お母さんが言うので」みたいな感じでしか言えない子は、何で学んでいるのかが全然腑に落ちていないです。そうなると、ちょっとしたきっかけで不登校になるし、ちょっとしたきっかけで勉強嫌いになると思います。

(スライド38)そういう視点で見てみると、自分の中での「核」がないと、意味をどんなに教えても、意義をどんなに教えても「これは大事だよ」「こんなところで役に立つよ」と言われても、自分の中での学びの価値は描けないと思います。

す。探究とかキャリア教育は、これをいろいろな人との対話を通じて探していく旅路だと思っています。先ほどの自動車型のように、同じところをぐるぐるしたり、いろいろなところへ行ったりして、時間がかかるってストレートに行かない。そういう状況の中で、手間も時間もかかるから、3年間で終わらせる、6年間で終わらせるではなくて、高校と大学がしっかりと連携して、この学びを高校の先生も大学の先生も、同乗者になって、支援をしてあげるプロセスがすごく大事なのではないかと思っています。

(スライド39)最後に、教育改革のお話をさせていただきます。今日の趣旨のところで「トップダウンの教育改革は、なぜうまくいかないのか」という話を書きました。これは実際にアメリカの教育大学院で、教育改革の授業を取っていたときに「よくデザインされた教育改革は失敗した、または狙った成果が得られなかつたという結果になることが多い。なぜ、そのような失敗が起こるのか説明してください」という問題が出たことがあります。これは、なかなか難しいですよね。一言では言えないです。本当にそうなのか、よくデザインされているのだからうまく行っているのではないかという見方もできなくもないです。でも、往々にして失敗したとか、思ったとおりにならなかつたとかというふうに言われたりします。

例でよく言われるのは、アメリカのNo Child Left Behind Actという、落ちこぼれ防止法というものがあります。学力調査で競わせれば、みんな伸びるでしょうという発想をしたときも、なかなかうまくいきませんでした。「なぜ、こういう失敗が起こるのか説明してください」というところで、答えは1つではないですが、大きなところで言っていたのは、トップダウンの改革は、先生一人一人の存在を軽視しないとできないということが基盤にあります。つまり、教育改革をトップダウンで下ろそうとしたときに、先ほどは子どもの目線で学びの価値付けと言いました

が、教育の価値付けを先生がするのではなくて、下ろしてくる人がすることになります。そうすると、説明責任が、教育改革をする人になるわけで、学校の先生に説明責任が行かなくなるわけです。でも、先生方は子どもたちに教育改革をやらなければいけないという難しさがあると思います。

(スライド40)そこで、当事者全員の“I”を大切にした改革はどういうふうにやればいいということになるわけです。ここでワークをやってもらおうと思っていたのですが、時間もないで飛ばします。



(スライド41)最後にこれだけ言いたかったのは、動機付けと転移の問題があります。動機付けと転移の問題というのは、学びの価値付けの問題で、学びの価値付けの旅をするのがキャリア教育と探究です。だから、高校と大学がつながっていかなければいけないです。そして教育改革というのは、先生が教育の価値付けをするのを阻害してしまう可能性があるから難しいです。それでは、どういうふうに教育改革を進めていけばいいのかというところで、私なりに答えが集約されたのが自己決定理論という、学習科学の世界では非常にポピュラーな理論です。これだけ頭の中の片隅においていただけたら、それだけで私はここに来て良かったなと思います。

このSelf-Determination Theoryでは、3つのことが大事だと言われています。1つ目が自律性。2つ目が関係性と協働性です。そして3つ目が自己有能感のこの三本柱です。これ

は、もともと動機付けの理論として開発されたものですが、いろいろなところに使えると思います。

(スライド42) もうちょっとだけ具体的に言うと、教育改革をデザインする上で、あるいは学校の教育のいろいろな部分を改善していくときに、教育活動が先生方の創意工夫の余地が豊富にあって、言われたことをやるというだけではなくて、教科書を端から端までやるだけではなくて、先生方の創意工夫の余地が豊富にあります。つまり自律性があって、ほかの教師や専門家や管理職や地域の人を含めて、いろいろな人たちとの協働性・関係性があります。つまり相談できるし、一緒にできるし、困ったときは一人ではないという関係性があり、そして教育プロセスの開発やカリキュラムのデザインが自分自身の成長として実感できるようになっていれば、先生方は主体的に改善し続けていくだろうという考え方です。こういう教育改革をどうデザインできるのかが、行政にとっては非常に大きなチャレンジになってきます。

私も行政の人間なので、十分にできているかというと、なかなか難しいです。なぜなら、基本的に教育改革は「ああすれば」「こうすれば」と言うから改革になるわけで、理論的に矛盾するわけです。「ああしないでください。でも……」みたいな感じの教育改革になるから、これは非常に難しいんですけれども。ただ、こういうところがすごく大事です。これが教育改革をデザインする上でのポイントになってくるのですが、ひるがえって考えてみると、子どもたちの視点から動機付けと転移の問題を考えるときにも同じことが言えるわけです。

(スライド43) つまり、学習活動が児童や生徒の創造や選択にあふれていて、ほかの児童や先生方たちの協働があって、自分自身の成長が実感できるものになっていれば、児童・生徒は主体的に学び続けるだろうと言えると思います。

これはアメリカでも言われていましたし、今はNITSも言っていますけれども、教育というものは関係性の中でできあがるものです。しかも、関係性というのは相似形なので、伝播します。つまり、教育委員会と学校の関係と、校長と教員の関係と、教員と子どもたちの関係は大体同じような感じになります。教育委員会が学校に、このスライドのような教育改革をデザインすることができれば、教員もスライドのような教育活動をデザインできるようになるかもしれないというか、できるようになる可能性が高いので、そのための支援をしっかりとやっていかなければいけないということになるのではないかと思っています。具体的にどうすればいいのかという話は、この後の午後の討論のところで皆さんと一緒に考えていければと思います。学校での実践の具体については、この後、酒井先生がご紹介してくれると思いますので、私のお話はここで終わらせていただこうと思います。

(スライド44) Facebookの友だちのリクエストは、そこにQRコードを張っていますから、送つていただければいくらでも承認いたします。今日は、どうもありがとうございました。

スライド 1

2024年11月16日  
第22回高大連携教育フォーラム  
※資料のうち、實際に係る内容は、所属機関や文部科学省の公式見解ではなく、個人としての意見です。

スライド 2

### 自己紹介

- 1981年、神奈川県秦野市出身
- 2004年、早稲田大学法學部卒業→文部科学省入省  
(文部科学省での主な仕事)
  - ・競技スポーツ課企画係長 『東京オリンピック招致』
  - ・内閣官房(総理大臣官邸)主査 『総理・官房長官のサポート』
  - ・教育改革推進室専門調査官 『教育改革の司令塔』

スライド 3

### 自己紹介

- 2014年、広島県教育委員会に出向(「学びの変革推進課長」  
(2017年、文部科学省を退職し、広島県に転籍)
  - ・「学びの変革」の立ち上げ
  - ・県立広島観智学園中高の創設(公立全寮制IBインターナショナルスクール)
  - ・高校生の海外留学促進(6年間で6倍→全国1位)
  - ・ふるさと納税を活用した寄附金制度の創設(これまで4億円を超える寄附)
  - ・高校入試制度改革(自己表現の導入、特色枠の設定、調査書の簡素化等)

スライド 4

### 自己紹介

- 2021年、立命館アジア太平洋大学(APU)特別研究員
- 2021年8月~2022年12月、ミシガン大学教育大学院修士課程  
(専攻: 学習科学)  
(Design and Technologies for Learning Across Culture and Contexts : DATL)
- 広島県総務局付課長・福山市教育委員会学校教育部参与(現在)

スライド 5

### ミシガン大学

■ アメリカで最も歴史のある公立(州立)大学。  
■ 教育大学院は、全米トップの評価。

1位 ミシガン大・コロンビア大(同率),  
3位 ノースウェスタン大・ベンジルバニア大・ウィスコンシン大,  
6位 ヴィンダービルト大, 7位 スタンフォード大,  
8位 UCLA, 9位 ハーバード大・ニューヨーク大  
(U.S. News '2023-2024 Best Graduate Schools in Education')

スライド 6

### 在籍プログラム

Design and Technologies for Learning Across Culture and Contexts (DATL)

教育 × イノベーション

(専攻)

- ・学習科学の理論と実践(「人はどのように学ぶのか?」)
- ・効果的なテクノロジー(ICT)の活用
- ・変革を実現する組織マネジメント
- ・カリキュラム・学習環境のデザイン

## スライド 7



## スライド 8

### 自己紹介

- 2014年、広島県教育委員会に出向（学びの変革推進課長）  
(2017年、文部科学省を退職し、広島県に転籍)
  - ・「学びの変革」の立ち上げ
  - ・公立広島県立高の創設（公立全寮制IBインターナショナルスクール）
  - ・高校生の海外留学促進（6年間で6倍→全国1位）
  - ・ふるさと納税を活用した寄附金制度の創設（これまで4億円を超える寄附）
  - ・高校入試制度改革（自己表現の導入、特色枠の設定、調査書の簡素化等）

## スライド 9

### 自己紹介

- 2014年、広島県教育委員会に出向（学びの変革推進課長）  
(2017年、文部科学省を退職し、広島県に転籍)
  - ・「学びの変革」の立ち上げ
  - ・公立広島県立高の創設（公立全寮制IBインターナショナルスクール）
  - ・高校生の海外留学促進（6年間で6倍→全国1位）
  - ・ふるさと納税を活用した寄附金制度の創設（これまで4億円を超える寄附）
  - ・高校入試制度改革（自己表現の導入、特色枠の設定、調査書の簡素化等）

## スライド 10

### ある企業での出来事

ある企業で、新入社員向けの研修を実施しました。

新入社員たちは、人事課から与えられたプログラムを素晴らしい成績でクリアしていき、社内からは、「今年の新入社員は、例年になく優秀だ」と評判になりました。

しかし、研修後、いざ現場に出ると、上司たちから人事課にクレームが相次ぎます。クレームの内容は、「今年の新入社員は、主体性がまったくない」。

人事課が新入社員たちを呼び出して問い合わせたところ、彼らはこう言いました。

「だって、『主体的になれ』って、指示されてません。」

## スライド 11

基本説明	実践的内容	導入実験	質の評議
<b>「学びの変革」が目指す、「4つの『観』」の転換</b>			
(①授業観)	教師中心	から	学習者中心
(②子供観)	受動的な聞き手	から	主体的な学び手
(③ゴール観)	コンテンツ（内容）の網羅	から	コンビテンシーの育成
(④学習観)	～教科書の復習完了（知っている）ではなく、生徒の「できる」「使える」に～		
行動主義的	から	社会構成主義的**	

～異なる知識の断片ではなく、個々との接觸や、社会の中での書き込みを通じて、学習者が知識を自ら構成～

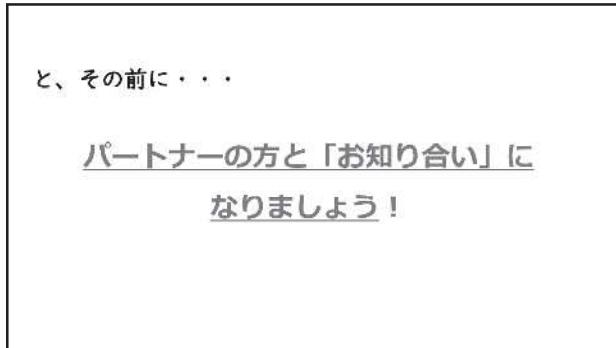
\* いわゆる「アリル学習」における学習観。情況中には、1つの基礎概念が存在、徐々に静か度が上がる直線的なカリキュラム。

\*\* 知識やスキルを習習せらが意味付け、整理、統合、対照、振り返り重複した実践的でダイナミックなカリキュラム。

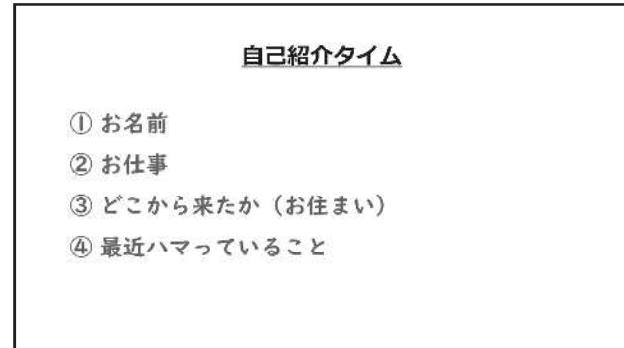
## スライド 12

まずは、「**教育のこれから**」について  
一緒に考えてみましょう！

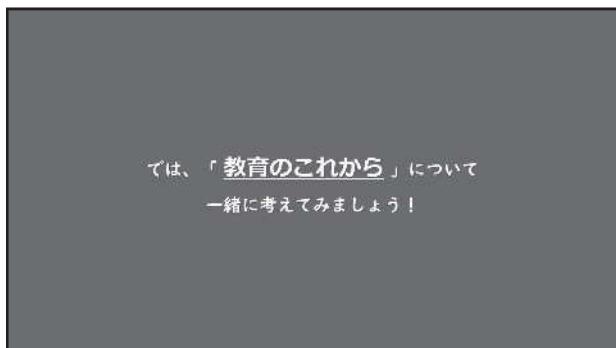
スライド 13



スライド 14



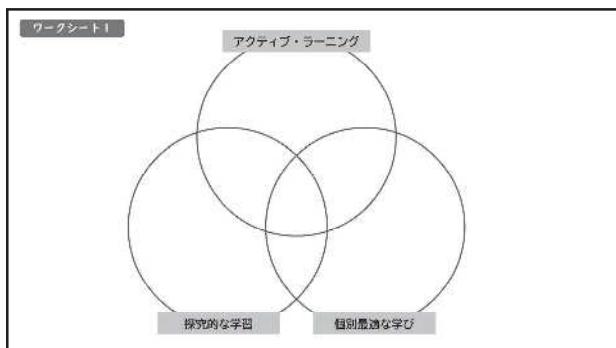
スライド 15



スライド 16



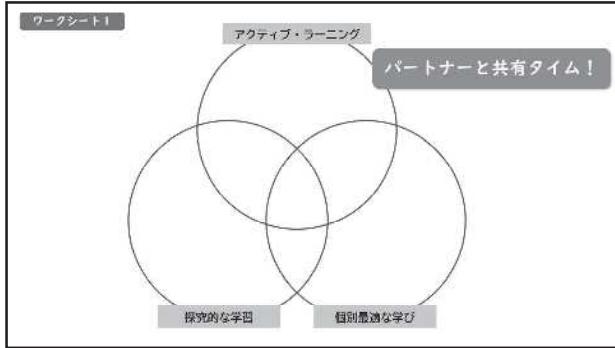
スライド 17



スライド 18

- 以下の学習活動は、「ワークシート！」の、どこに位置付くと思いますか？
- ① Qubena (ATドリル) を活用し、児童生徒の習熟度に応じた学習（自習）を行う
  - ② 「『走れメロス』から私たちは何を学ぶことができるか」について、個人で考えた後に、小グループで話し合う
  - ③ 小グループで理科の実験を行い、個人でレポートにまとめる
  - ④ タブレット端末を活用し、「明治維新は現在の日本社会にどのような影響を与えているのか」について、個人で調べる
  - ⑤ 興味のあるNHK for Schoolの動画を個人で選択して視聴し、感想を記入する
  - ⑥ 教師が設定したテーマについて、小グループで学習（研究）活動を行い、最後は全員の前で発表する
  - ⑦ 「忘れられない出来事」をテーマに個人で作文を書き、小グループで話し合う
  - ⑧ 「活性剤の環境への影響」について、タブレット端末を活用して個人で情報を収集・整理し、クラウド上にアップされた成果物を互いに参照しながら、小グループで話し合う
  - ⑨ 興味・関心に基づき、個人で学習（研究）活動を行い、最後はレポートにまとめる
  - ⑩ 地域の観光スポットに行き、来訪した外国人観光客に対して、英語で会話を尋ねる

スライド 19



スライド 20

以下の学習活動は、「ワークシート！」の、どこに位置付くと思いますか？

- ④ Qubeni (ATドリル) を活用し、児童生徒の熟習度に応じた学習(白習)を行う
  - ⑤ 「『走れメロス』から私たち何を学ぶことができるか」について、個人で考えた後に、小グループで話し合う
  - ⑥ 小グループで理科の実験を行い、個人でレポートにまとめる
  - ⑦ タブレット端末を活用し、「明治維新は現在の日本社会にどのような影響をもたらしているのか」について、個人で調べる
  - ⑧ 興味のあるNHK for Schoolの動画を個人で観察して複数し、感想を記入する
  - ⑨ 教師が設問したテーマについて、小グループで学習(研究)活動を行い、最後は全員の前で発表する
  - ⑩ 「忘れられない出来事」をテーマに個人で作文を書き、小グループで話し合う
  - ⑪ 「性急な環境への影響」をテーマにタブレット端末を活用して個人で情報を収集・整理し、クラウド上にアップされた感想物を互いに参照しながら、小グループで話し合う
  - ⑫ 興味・関心に基づき、個人で学習(研究)活動を行い、最後はレポートにまとめる
  - ⑬ 地域の観光スポットに行き、来訪した外国人観光客に対して、英語で感想を尋ねる

スライド 21

以下の学習活動は、「ワークシート！」の、どこに位置付くと思いますか？

- ① Qubenda (AIドリル) を活用し、児童生徒の習熟度に応じた学習（自習）を行う
  - ② 「『忘れメロス』から私たちは何を学ぶことができるか」について、個人で考えた後に、小グループで話し合う
  - ③ 小グループで理科の実験を行い、個人でレポートにまとめる
  - ④ タブレット端末を活用し、「明治維新は現在の日本社会にどのような影響を及ぼしているのか」について個人で調べる
  - ⑤ 奥様のあるNHK for Schoolの動画を個人で選択して視聴し、感想を記入する
  - ⑥ 教師が設定したテーマについて、小グループで学習（研究）活動を行い、最後は全員の前で発表する
  - ⑦ 「忘られない出来事」をテーマに個人で作文を書き、小グループで話し合う
  - ⑧ 「読書の環境への影響」について、タブレット端末を利用して電子書籍を収集・整理し、クラウド上にアップされた成果物を互いに参照しながら、小グループで話し合う
  - ⑨ 奥様・間にに基づき、個人で活動（研究）活動を行い、最後はレポートにまとめる
  - ⑩ 地域の観光スポットに行き、来訪した外国人観光客に対して、英語で感想を尋ねる

スライド 22

『走れメロス』から私たちは何を学ぶことができますか？

『走れメロス』がらみたちは、友情、愛情、そして自己倫理の大切さを学ぶことができます。この物語では、メロスが親友セリアンティソスとの約束を守るために、命を捨てて仲間を救おうとする姿が描かれています。

主な書籍に以下があります

1. 友情の力：  
メロスが過激な火災においてもセリタンティウスとの友情を見る姿勢は、眞の友情がどれほど偉大で強靭なものであるかを示していま  
す。特に火事で死んでしまった友人の死を悲しむセリタンティウスの心の内に、彼の友情の強さがうかがえます。

2. 価値と釣魚の鑑み：  
当店の中、メロスはセリヌンティウスに対するしんを最も切らかうよう、どんな危険にも耐えます。また、セリヌンティウスもメロスが持つと信じ抜けます。これにより、互いの信頼が非常に強く、危険を乗り越える力となることが示されます。

3. 自己犠牲の特徴：  
メロスの自己犠牲を画面に約束を果たそうとする姿は、自己犠牲がどれほど価値ある行為を示しています。私利私欲ではなく、他のために行動することの難しさが伝わってきます。

この考察は、現代の私たちにも共通するノーマを持っており、信頼や友情の重要性、そして時に他人のために自分を犠牲にすることの意義を考えさせてくれます。

スライド 23

以下の学習活動は、「ワークシート！」の、どこに位置付くと思いますか？

- ① Qubena（AIドリル）を活用し、児童生徒の習熟度に応じた学習（自習）を行う
  - ② 「『されメロス』から私たちは何を学ぶことができるか」について、個人で考えた後に、小グループで話し合う
  - ③ 小グループで理科の実験を行い、個人でレポートにまとめる
  - ④ タブレット端末を活用し、「明治維新は現在の日本社会にどのような影響を及ぼしているのか」について個人で調べる
  - ⑤ 別例のあるNHK for Schoolの動画を個人で選択して視聴し、感想を記入する
  - ⑥ 教師が既定したテーマについて、小グループで学習（研究）活動を行い、最後は全員の前で発表する
  - ⑦ 「忘られられない春事」をテーマに個人で作文を書き、小グループで話し合う
  - ⑧ 「被災地の環境への影響」について、タブレット端末を活用して個人で情報を収集・整理し、クラウド上にアップされた成果物を互いに参照しながら、小グループで話し合う
  - ⑨ 先端・核心に基づき、個人で学習（研究）活動を行い、結果はレポートにまとめる
  - ⑩ 地域の観光スポットに行き、来訪した外国人観光客に対する、英語で感想を尋ねる

スライド 24

「忘れられない出来事」をテーマに小学生の作文を書いてください。

これらの用例を参考にしてみてください。

ほんのこれまででない世界中は、30歳の僕が人生で海に行ったときのことです。その日はとても晴れていて、青い空と海がどこまでも広がっていました。僕は船から立ち上がって、そこで泳ぎました。

がんばりました。大きさが大きくてそこには、私が想像で「やつるだ！」と書いてくれて、とてもうれしかったです。  
その後、お父さんとお母さんと一緒に車で宿舎に入り来ました。お父さんは「お腹が空くよう！」と車を止めてくれて、みんなで大きめのパンをもらいました。私は結構、少し、おなかが痛いけど、みんなみんなでつながる「絆」を感じさせてもらいました。お母さんは、お風呂に入らせてもらいました。

その日の夕方、先づ向にうこはたる日がとても美しくて、庭が赤やオレンジ色であつていましたし、ぼくはこの黄色を好むから、「この草木は一生離れない」と誓いました。既成ニシキに説いた日は、ぼくにとって最高のよう気が出でます。

二、为什么说毛泽东思想是中国化的马克思主义而不能说毛泽东思想是马克思主义的中国化

スライド 25

A : 「人工知能が発達するのだから、学校での教科の学習は不要になる」という主張に賛成の立場から論じてください。

B : 「人工知能が発達するのだから、学校での教科の学習は不要になる」という主張に反対の立場から論じてください。

スライド 26

未来を見据えて、学校の変わるべき点を書いてください。

未来を見据えて、学校の変わるべきではない点を書いてください。

スライド 27

日本（世界中）の学校教育が抱える課題

① 動機付け (Motivation)

② 転移 (Transfer)

スライド 28

日本（世界中）の学校教育が抱える課題

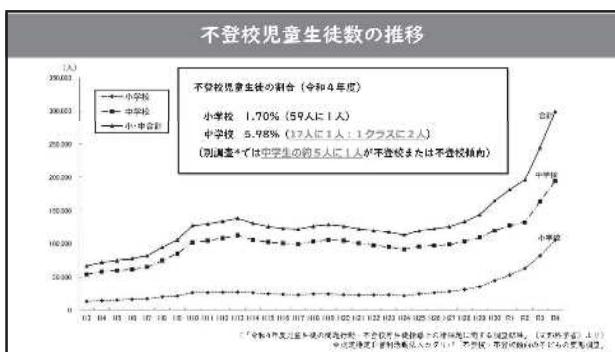
① 動機付け (Motivation)

入口

出口

② 転移 (Transfer)

スライド 29



スライド 30

日本（世界中）の学校教育が抱える課題

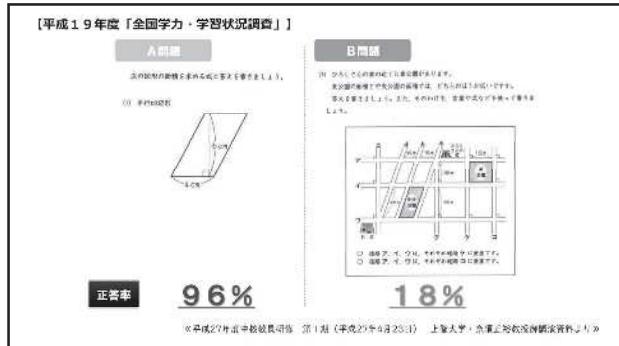
① 動機付け (Motivation)

入口

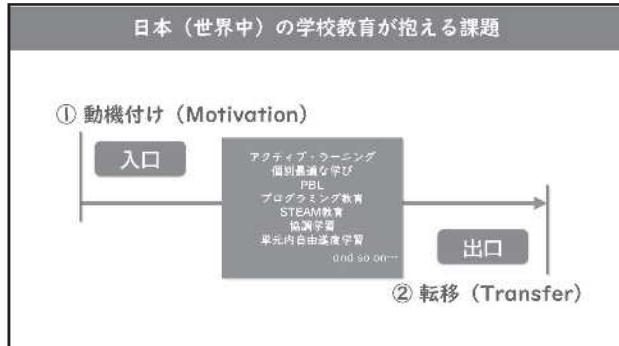
出口

② 転移 (Transfer)

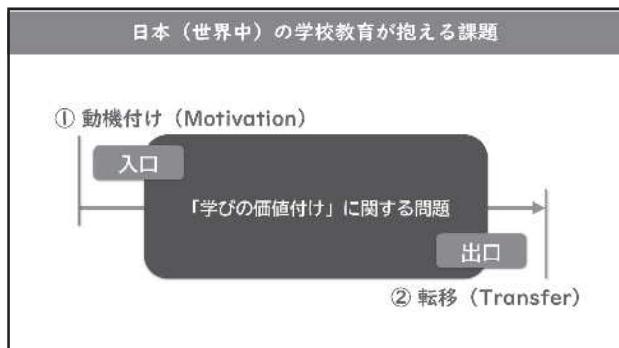
スライド 31



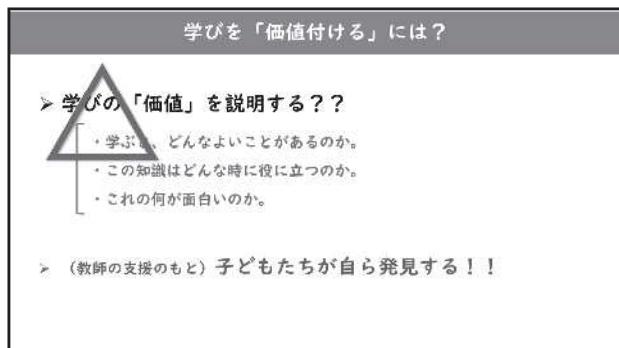
スライド 32



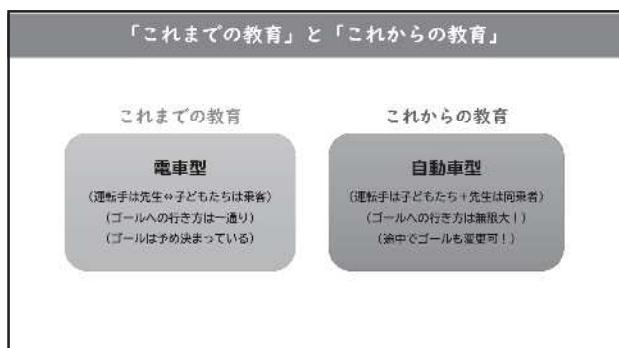
スライド 33



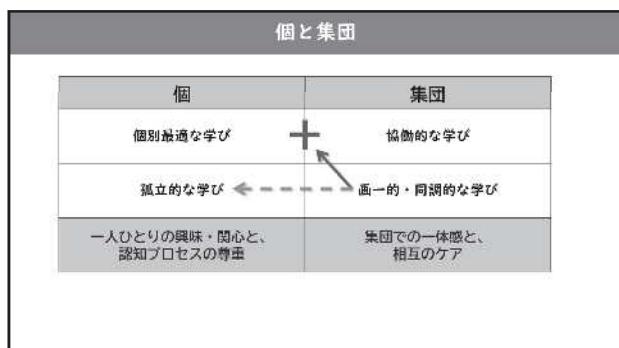
スライド 34



スライド 35



スライド 36



スライド 37

学びの「価値付け」に関する「2つの質問」

“何を学んでいる？”

“何で学んでいる？”

スライド 38

この「旅」は、時間と手間（試行錯誤）が必要  
だからこそ、高大の連携が不可欠

↑  
探究・キャリア教育は、  
(教師・仲間/自己/村との)対話を通じてこれを探す旅

↑  
自分の中の「核」が無いと、  
学びの「価値」は描けない

スライド 39

教育大学院でのテスト問題

よくデザインされた教育改革は、「失敗した」又は「狙った成果が得られなかつた」という結果に終わることが多い。  
なぜそのような「失敗」が起こるのか、説明してください。

In many instances, well-designed reforms 'fail' and are said 'not to work as planned.'  
Develop an explanation for why these 'failures' happen?

“I”の不存在

スライド 40

当事者全員(子どものみならず教職員も)の“I”  
を大切にした改革は、どうすれば可能か？

スライド 41

解決のヒント：「自己決定理論」

**Self-Determination Theory**

① 自律性  
Autonomy  
② 関係性・協働性  
Belonging  
③ 自己有能感  
Competence

Self-Determination Theory  
ROTHAUSSEN

スライド 42

解決のヒント：「自己決定理論」

教育活動が、

教師の創意工夫の余地が豊富にあり（自律性）、  
他の教師や専門家等との協働があり（関係性・協働性）、  
自身の成長を実感できるものであれば（自己有能感）、

教師は主体的に改革（改善）し続けるだろう。

## スライド 43

解決のヒント：「自己決定理論」

**学習活動が、**

児童生徒の創造や選択が溢れしており（自律性）、  
他の児童生徒や教師等との協働があり（関係性・協働性）、  
自身の成長を実感できるものであれば（自己有能感）、  
児童生徒は主体的に学び続けるだろう。

## スライド 44

～ご聴取ありがとうございました～



←Facebookの友達リクエスト、  
どうぞお気軽にお送りください！

## 基調講演2

### 「探究×キャリア教育」がつなぐ高校・大学の学び

[講師] 酒井 淳平（立命館宇治中学校・高等学校）



(スライド1,2)改めまして、皆さん、こんにちは。酒井と申します。よろしくお願ひいたします。今、自己紹介をしていただきましたが、私が一番紹介したいところは上の青字になっているところです。私自身は京都市立の養徳小学校、高野中学校、そして修学院中学校と育ち、京都府立北陵高校に行きました。大学も、京都の京都教育大学に行きました。ところが、当時は採用がない時代でして、拾ってくださったのが私学の立命館でしたので、今は私学に勤めています。ですので、このコンソーシアムを全て一人で制覇していると思い、それだけが私が登壇できる資格かなと思いながら、今日はお話しできればと思っております。

(スライド3)著書も過分な紹介を頂きましたけれども、本職が数学で、今はキャリア教育に取り組む中で探究にも関わらせてもらっています。

(スライド4,5)初めになんですかれども、私の話の内容に行く前に、チェックインだけしたいと思います。先ほどのチームで1分半くらいお話を頂きたいです。1つ目が、先ほどの講演の

感想です。2つ目が、この時間に聞きたいこと、期待することです。3つ目が、今の学習指導要領で、キャリア教育はどう位置付いているかです。特に、この3番について交流していただきたいところです。1分半ほど時間を取りますので、先ほどのペアでお願いいたします。では、よろしくお願ひいたします。

#### <話し合い>

時間が足りないのは重々承知の上ではあるのですが、次に行かせていただきます。

(スライド6)このスライドは、キャリア教育の前々調査官の藤田(晃之)先生がよく使われているスライドをお借りしてきたものです。上にあるとおりです。学習指導要領においては、小・中・高全ての学校種において、キャリア教育の充実と総則に明記されました。総則に書かれましたので、特定の教科・科目ではなく教育課程全体で取り組みを進めていくことになりました。ところが、ここには高等学校の先生方がいらっしゃると思うのですが、学校現場ではどうですか。藤田先生は、こうなったからキャリア教育が進んだと言われます。法的にはそうなのかもしれません、各学校でこの実感はありますでしょうか。私の個人的な実感でしかないのですが、本来はキャリア教育と総合的な探究の時間は不可分なものですから、総合的な探究の時間が進むことは、キャリア教育も進んでいるはずだし、話題になると思っています。ところが、どうも最近、本校に限らず、学校現場でキャリ

ア教育があまり言われなくなった、その危機感があります。

(スライド7) 例えば、この数字です。186という数字なんですけれども、これは学習指導要領の本文に「探究」が使われた数です。ここから本当に現在の指導要領が、探究が重視されていることは分かることと思っています。

(スライド8) 本日なんですけれども、大きく3つ用意させてもらいました。探究、キャリア教育についてです。そして2つ目が、本校の事例がメインになるのですが、生徒の学びから考える高大のことです。そして最後に、高大の学びをつなぐために、生徒を見ながら大事だらうと思っていること。以上についてお話しできればと思っています。

(スライド9) まず初めに、これは本当に個人的な疑問です。皆さんに「なんで?」と聞きたいんですけども、探究的な学びは自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考えという学びですよね。私は数学の教員として、なぜ話題になるのかが分からぬのです。数学の先生でしたら共感していただけると思うんですけども、数学は誰かがつくってきた学問です。教科書なんて、みんなの探究してきた結果が、先人の探究の成果が置いてあるだけですので、数学を学ぶというのは探究することだと思いませんか。私は他教科のことはあまり分からぬですが、多分、他教科でも同じだと思います。もしかしたら、数学は学ぶことが探究なんだけれども、空気の存在に気付かない感じで、当たり前過ぎて分からぬのかなと、そんなふうに思ったりもします。そうは言いながら、本校でも他教科の先生に話を聞きますと、数学イコール解き方を教え込むみたいな印象があるのかなと思ったりもします。本来、探究は話題にするべきでもないとか、学ぶことは探究なんだけれども、話題にせざるを得ない現状があるのかなと思ったりはします。ここは、本当に他教科の話を聞きたいと思っているところです。

(スライド10) これは、今、横浜創英というところで校長をされている本間(朋弘)先生のスライドです。今の高等学校において、ゴールが18歳になつていなかということです。本間先生は、もともとはずっと進学校で教員をされていて、大学受験の文脈ですごい成果を残されていて、その実績で私学にヘッドハンティングされる形で異動されて現在に至る方です。本間先生が言われているのが、大学進学がニーズとしてもあるし、生徒の希望もあるから、それを叶える責任が学校にあることはすごく分かります。だけど、18歳の頂点学力ばかり構築していたことをすごく反省していると言われていました。横浜創英はまさに、現在、新しい教育課程の実施、学びの転換に挑戦されていますが、もし、この現状があるとすれば、まだまだ今から改善の余地はあるかなと思ったりします。

(スライド11) 話を戻しますが、先ほど、私は本来、探究なんか話題になることでもないと思ってはいたのですが、もしかしたらそうなっていない現状もあるのではないかと思ったりします。かく言う私自身、私の授業を振り返ってみると「生徒が探究しているか。丸暗記しているだけじゃないかな」と思うときも正直あります。まだまだ自分の無力さを感じています。本来、話題にすべきではないかも知れないけれども、現状としてはまだまだ改善すべき余地があるとは思っています。

(スライド12) キャリア教育についてですが、そもそも学校は生徒の将来のためのものですから、キャリア教育の要素は自然と含むと思います。さらに社会に開かれた教育課程とは言いますけれども、学校は社会の中で存在しているものですから、本来的にその存在が社会に開かれていると思うんです。

(スライド13) さらに、3つの資質能力にしても、私も数学で加法定理を教えたりはしますけれども、咲いたコスモスを覚えてほしいわけでもないですから、知識・技能だけを教えた

くはないのです。数学を通して育てたい力もあれば、そこで思考力とかも付けてほしいし、困難なことに乗り越えていく力や分からることを分かっていく力も付けてほしいと思います。恐らく、これはみんながやっていることだと思います。ただ、これがあえて話題になることは、そうなっていない現状があることの裏返しかと思います。また、この3つの資質能力においては、上のオレンジ、「学びに向かう力、人間性」が本丸な気がします。思えば思うほど、ここはまさにキャリア教育の領域ですから、キャリア教育が学習指導要領の核であることは間違いないのではないかとは思っています。

(スライド14～16)先ほど、長谷川先生から出してもらったスライドにあるとおり、日本の教育にはまだまだ課題があって、でも伸びしろもありますよね。テストはとても良いんですよね。でも、これは理科を例にしたものです。学ぶ意味を感じているか、ですが、とても低いです。

(スライド17)ざっくり言いますと、日本の教育の課題としては、テストの点数は世界トップレベルなのに、夢がないとか、責任ある社会の一員と思えていないとか、自分で国や社会を変えられると思っていない、この辺のかなとは思っています。もちろん、これに対して対策は必要だとは思うんですけども、

(スライド18)そこが本当に○○教育でいいのかなと思います。例えば、将来の夢がないからキャリア教育とか、責任ある社会の一員と思えていないから成人を18歳に下げようとか、そういうことが行われているかもしれません。しかし、本当にこれで解決するのだろうかという思いはすごくあります。

(スライド19)今、我々が問われていることは、生徒観ではないかなと思います。小・中・高・大、それぞれ学校種による差はあるのかもしれません、生徒や学生はどんな存在ですか。サービスを受ける受益者なのでしょうか、社会の担い手なのでしょうか。そして、生徒や学生は管理指導さ

れることで学ぶ存在なのか、自ら学ぶ存在なのか、ここが問われている気がしてならないです。もちろん、ゼロヒャクはないと思います。例えば、100%自ら学ぶから放っておいてもいい、そんなことはないと思います。ただ、1つ言えることとしては、左側はサービスの受益者であり、管理指導されることで学ぶという、その生徒観が現状をつくっている気がするのです。

(スライド20)重ねてみました。仮に生徒をサービスの受益者と置いて、生徒は管理指導されることで学ぶ存在であるというふうに考えたときに、どんなことが起こるかというと、当然、サービスの受益者ですから自分で国や社会を変えようなんてなかなか思えないと思います。そして、管理指導されているわけですから、学ぶ意味はなかなか見出しがにくいです。受益者ですから、責任ある社会の一員とはなかなか思いにくいです。今の課題が、まさにこの生徒観から来ているのではないかと思うときがあります。

ですので、今、大事なこととしては、社会の担い手になって自ら学んでいく生徒に必要な取り組みはなんだろうかと思ったときに、キャリア教育とか探究、ここに一番解があるといいますか、これこそが大事だろうと思っています。

(スライド21, 22)ただ、キャリア教育をやってきた立場として思うんですけれども、キャリア教育もバージョンアップが要ると思います。皆さんはキャリア教育というと、特に小・中・高ではどんな言葉が出てくると思いますか。例えば、大学生に対して「キャリア教育何をやってきた?」と聞いたら、何が出てくると思われますか。おそらく多くの学生は職場体験ですよね。これはキッザニアの写真です。職場体験が悪いとか、キッザニアが悪いとか、そんなことは全くないです。もちろん、大事な体験なんですが、今、問いたいことは、我々は職場体験という機会でさえも、生徒が失敗しないように、苦情が来ないようにしていないかということです。そしてキッザニアはお金を払っているから、働くことを楽しませてく

れます。同じようにして生徒をお客さまにしていないだろうかということです。ここは、今、問うべきところかなと個人的には思っています。

(スライド23) ただ、OECDのEducation 2030からもあるとおり、世界的にも、今、学びに向かう力や人間性にフォーカスが当てられてきています。自ら成長しようとする火をいかに灯し続けていけるかどうか、ここに焦点が当たっていることは間違ひありません。

(スライド24) そして、AIの時代だからこそ、好奇心と言語力、これしかないかなと個人的には思っています。結局、AIは問い合わせを入れるから答えが返ってくるわけであって、問い合わせは人間しか入れられません。道具を使いこなすのも人間です。さらに、好奇心がなければ入れる言葉だって思い付くわけがありません。こう思えば思うほど、今こそキャリア教育、そして探究の出番だらうし、出会いとか原体験の場としての学校の価値はますます高まるのではないかと思っています。

(スライド25) 学校では総合的な探究の時間の開発として文部科学省の指定を受けてやってきました。そこで総合的な探究の時間はキャリア教育だと言ってしまうと誤解が生じるのです。そうではなくて、総合的な探究の時間はキャリア教育の視点を持って取り組むことが大事であると思っています。このスライドにあるとおりですが、総合的な探究の時間の目標は、キャリア教育を目指していることと本当に重なりますので、その視点を持つことができるかどうかが重要だらうと思っています。



(スライド26) ここから次に行こうと思うのですが、少しだけここまで整理をしたいと思います。また1分半の時間を取りますので、ここまで感想を少し共有していただいてもよろしいでしょうか。よろしくお願ひします。

<話し合い>

(スライド27) では、そろそろよろしいでしょうか。次の生徒の学びからのところに行きたいと思いますので、よろしくお願ひします。ここから15枚ほどは、本校の取り組みの紹介となりますので、来てくださったことがある方については、重なる部分もありますが、ご容赦ください。

(スライド28) 本校、立命館宇治中学高等学校ですが、30年ほど前に学校法人立命館と合併してできた学校になります。そして現在のカリキュラムは、学習指導要領改訂前の2018年度から始まったカリキュラムで、探究とキャリア教育を核としたカリキュラムになっています。そして、このカリキュラムですが、2017年1月にカリキュラム委員会がスタートしまして、私もその一員であったのですが、そこに集まった当時で30代から40代の中堅教員が議論したものが核となってつくられたものになります。今から、これについて少し紹介させてください。

(スライド29) まず本校としての今の結論であり、生徒に何度も言っていることなのですが、なぜ探究なのかということです。本校では特に、総合的な探究の時間においては、お客様から生産者へということを言っており、このスライドはいつも生徒に示しています。お客様というのは、ディズニーランドに行ったときのイメージでいいかなと思います。お金を払っていますけれども、入った瞬間夢の世界で、めちゃくちゃ楽しいではないですか。でも、あれは価値を提供してもらっていますよね。ディズニーランドが悪いわけでは全くないですが、与えてもらって、受け身に取り組んで、さらに依存していくサイクルがお客様です。一方、生産者は価値を提供する側です。生産者は自らの発見、気

付きから動いて、自ら取り組んで、より動くという、そんなサイクルを回します。もちろん、両面あってこそ人生ではあるのですが、特に自立して社会の一員として働くことにおいては、価値を提供する側に回るわけですから、生産者になることがすごく大事です。そして、探究的な学びは生徒自らの課題設定から始まることから、生産者に育てるにはいいのではないか、こんなことを思ってカリキュラムをつくりました。

(スライド30) そして、なぜ探究とキャリア教育を核としたカリキュラムにしたかですが、我々当時の教員の共通した思いがありました。それは、この図です。7年前の議論ですけれども、多分、今も同じ結論になると思います。「生徒は、どう?」という議論をしたときに、最近の生徒は、皆さんの学校ではどうですかね。私は世代的に、ちょっと上がめちゃくちゃ荒れていた時代でした。今は、そんな学校はほぼないですよね。内にこもるとかですよね。最近の生徒は真面目で素直という議論になったのです。真面目で素直だけれども、がつがつ来ないです。そんな生徒に、より多くのものを与えたら、真面目で素直ですので、おそらくやるんです。でも、それってより受け身にするだけではないかという議論になりました。今、我々がやるべきであり、やりたいことは、より多くのものを与えて、より受け身にするのではなくて、生徒が自ら動いていけるような核となる何か、それがマインドやスキルとかいろいろなものがあると思うんですけれども、核となる何かを育てたい。おそらく、それは今の学習指導要領を見ると総合的な探究の時間で実現できるのではないか、そんなふうな仮説から今のカリキュラムはつくれました。

ただ、同時に思ったことがあります。それは教員の状態でした。我々教員は、みんな一生懸命やっているんです。ただ、一生懸命やっているんですけども、年々横のつながりが薄くなったり、多忙化していく中で、我々もいっぱいいいっぱいなのではないかと思いました。生

徒の核を育てるのであれば、我々教員も一緒に取り組むことによって力を付けて、より生徒を支えることができるよう力量を上げたらいいいだろう、そんなふうなカリキュラムにしたいと思いました。そんなふうな思いから総合的な探究の時間、本校ではコア探究と読んでいますが、そのようなカリキュラムがつくられていきました。

(スライド31, 32) アンケートも取りました。カリキュラム委員だけの生徒実態は本当に当たっているかどうか不安もありましたので、全先生方に生徒の現状と育てたい生徒像を聞いてみました。やはり、思いは一緒でした。でも、お客さまから生産者にどう育てるかだろうということで意を強くして、改めてカリキュラム開発を進めてきました。文部科学省に出す書類等もこんな形で整えてはいったのですが、現在我々がつくっているカリキュラムとしては、3年間で探究を6サイクル回すカリキュラムと言っています。

(スライド33) こだわっているのは、右上のところです。学びのプロセスを経ながら、生徒のマイテーマにこだわって大学以降につなぎたい、この思いをカリキュラムにはすごく入れています。それは、もちろん、本校の生徒は、ほぼ大学に行くこともあります。本校は立命館の附属校ですから、立命館大学に行く生徒が多いです。ただ大学に行く、行かないに關係なくマイテーマにこだわること、これはすごく大事なことだと思っています。

(スライド34) 高校2年生の例を紹介します。高校2年生は1年間かけてマイテーマを設定しようということで、課題設定のみに焦点を絞って授業をしています。ただ、「テーマを探せ」では授業になりませんので、カリキュラムとしては、初めは興味・関心からマンダラチャートを作ったりしながら、リサーチクエスチョンもどきを立てて、ミニ論文を書くことをします。そこでテーマを1個決めます。次は進路探究もして、もし学問を探究するならどんなものがいいだろうということで、志望理由書みたいなものも書き

ます。さらに社会課題に目を向けて、プロジェクトをつくるとしたらどんなプロジェクトがいいだろうということを考えて、2年では実装までは行けていないケースが多いんですけれども、プロジェクトからテーマを考えます。このようにいろいろなテーマ設定をしていく中で、改めてそれらの学習を振り返って、自分はこれだというものを決めます。そして、高校3年生では1年かけてそのテーマを追求していく、そんなふうなカリキュラムにしています。

(スライド35)ですので、高校3年生はこんな感じで1年間、徹底的にマイテーマを探究していきます。これは本校が大学の附属校ですからこうしています。もし私が、一般受験の多い学校に行ったら、半年から9ヶ月前倒ししていると思います。高校の先生方は推薦で決まった子がだれてしまう現状は苦慮されたことがあると思います。あの現象が起こりやすいです。ですので、意図的に後ろに倒して高校3年生最後まで思いっきり探究することで学習は進めております。

(スライド36,37)これも紹介させてもらっていいですか。これは「マイラーニングストーリー」と呼んでいます。本来は特別活動すべきことですが、特別活動だけではなくて一部、探究の時間を使って作成しています。これは、ある生徒の図になります。高校3年間の振り返りを、ワークをした後で、このポスター作成に入ります。ポスターでは、自分の高校生活の振り返りをグラフにして、上がったり下がったところは理由を書いて、高校で成長したことベスト5、残された課題、大学で頑張りたいこと、挑戦したいことベスト3、そして、その後どうなりたいかを書きます。上が将来付きたい職業や、なりたい自分像を書き、結果的に、この1枚を見れば過去・現在・未来の自分が少し見えるものを感じしたものになっています。キャリアパスポートは小・中・高をつないでいくものですから、これはキャリアパスポートとは言えませんが、少な

くとも高等学校3年間に絞ればこれでキャリアパスポートになるのではないかと思ってています。

(スライド38)生徒の探究例を1つ紹介させてください。野球部にいた生徒が「低身長でも140キロプロジェクトは成功するのか」というものをやりました。これは2年前ですかね、事例紹介をさせてもらったときに紹介させてもらったものです。この生徒は野球がしたくてうちに来た生徒です。背が低い生徒でしたが、「俺でも140キロ出るのか」という疑問を持ち、徹底的に頑張って調べました。彼には申し訳ないですが、高校3年生卒業時の彼の作品は調べ学習に毛が生えた程度で、探究の成果として高いか低いか、そこだけを見れば決して高いとは言えないものでした。

でも、彼はそこで野球との関わり方を見つけ、結果的に立命館大学のスポーツ健康科学部に進学しました。そして、大学でめちゃくちゃ勉強したんです。今は4回生になりましたが、成績も結構良くて、学ぶことが楽しいと語ってくれます。そんな姿を見ると、もちろん、我々は高校教師ですから高校のときに頑張ってほしいと思います。でも、高校でまいた種が大学で開いてくれることも、我々としてはすごく大事なことかなと思ったりもします。

(スライド39)大きな賞をもらったりする生徒もいました。

(スライド40)これは、ベネッセのVIEW next ONLINEで本校と仙台第三高校とのコラボ授業を取材してもらった事例です。これは、国語の教員が取り上げてもらいました。若い教員なのですが、彼女は最初、探究が大嫌いでした。探究が嫌いだったのに、私の学年に入ってしまった、やらざるを得なくなったという教員です。教員は教材研究が好きですし、自分の仕事が好きなんですよね。探究という名前が付いたときに、好きとか嫌いではなくて、生徒の様子を見て、これいいなと思ったら、頑張れるのが教員だと

思います。彼女は、生徒の様子を見ながら、自分の授業を変えていくことにもとてもめり込んでくれて、結果的に取材もしてもらいました。教員が成長することは、すごく大事なことではないかと思ったりしています。



(スライド41) ところで、ここからが今日の本題かもしれません、探究とキャリアと大学の学びはどうつながるのだろうかということです。これは我々も、今、どうなんだろうと思っているところですので、ここはあくまでも今の段階での意見ということで、お聞きいただいた上で、皆さんのご意見をお聞きしながらブラッシュアップできたらと思っています。

(スライド42) 確かに、本校は探究を始めてからは、キャリア教育は確実に前進したと思います。溝上慎一先生がいつもされていました、将来の見通しがあるかないか、見通しがあるなら行動すべきことが分かっているかどうか、という4件法の質問です。探究をやる前の生徒で、高校3年生の卒業時に行動すべきことまで分かっている子どもは大体6割を切るくらいでした。探究を始めてからは安定して7割を超えていました。15%ほど上昇していますので、おそらく確実に前進はしています。

(スライド43～45) また、こんな生徒もいました。この生徒は中学校から本校に来た生徒ですが、マイクロプラスチックにすごく興味があつたらしくて、現代社会の授業ではこんな形で、化粧品にマイクロプラスチックが含まれていて、それは良くないからオーガニックな化粧品をつくりたいと、私たち高校生が資生堂とコラボし

たらできるのではないかという提案をしました。もちろん、当時の現代社会の授業、今は公共ですから、提案としてはそれで十分かなと思います。でも、これ以上は進まないですよね。

(スライド46) 彼女が3年生になったら、コア探究でもっと深めることができます。彼女はこのテーマが好きだったので、うじラボプロジェクトと名付けて、実際に企業を見つけてきました。残念ながら化粧品は薬事法の関係で無理でしたが、オーガニックなマスクスプレーを開発し、文化祭で販売等をしてくれました。

(スライド47) 赤いところだけ見てもらったらいいのですが、彼女のプロジェクト報告書がこれです。1年生のときには提案しかできなかつたけれども、3年生でできたから良かったです。つまり、我々が学んだことは、総合的な探究の時間があったおかげで、生徒の課題意識がより具体的なアクションになったということです。

(スライド48) でも、教科も大事なんです。彼女はSDGsという学校設定科目や現代社会の知識があったからできたということも言っていました。そして、その後、彼女は経営学部に行つたんですけども、私は経営学を学ぶからすごく良かったということを言って卒業してくれました。我々としては、探究の時間は学びをつなぐし、生徒の学びを豊かにするのではないかということを彼女の姿から改めて思っています。

(スライド49) その彼女が1年3ヵ月後、オープンキャンパスに来てくれました。マスクスプレーが売れ残っていました「先生、売れ残ったスプレーを取りに行きたいです」と彼女が言ってくれました。連絡があった次の日に入試部長から「酒井先生、卒業生で探究をしゃべってくれる人は誰かいですか」という連絡が来たので「ちょうどいいや」と思って「取りに来るついでに、オープンキャンパスに来て、プレゼンもしてくれたら、めっちゃうれしい」と言つたら「はい」と言ってプレゼンをしてくれた、そんなことがありました。

(スライド50) 彼女はオープンキャンパスで「プロジェクトを通して私たちはこんなことを学んで、結果的に興味を持って、夢を持って経営学部に行った」ということを言っていました。

(スライド51, 52) さらに言ったのは、経営学部では、当然、初年次に基礎科目としてマーケティングや価格設定などの経営学などの基礎を学ぶらしいです。私は基礎を学んだときに「価格設定というのは、スプレーをいくらにするかの、あの話だ」とか「消費者ニーズって、私たちが売れると思ったスプレーがなかなか難しかったという、あの話だ」とか、やってきたことがこれと思えたから、学びが本物になったと言っています。結果的に、彼女は成績もすごくいいんですけれども、それは学んでいることが単なる文字ではなくて実体験としてあったからということも大きいと思います。彼女は自分なりに生産者になれたし、それが大学にもつながったということを言ってくれました。

(スライド53) 他にもこんな例は幾つもありましたが、私なりに、今、思っているのが、学びがつながる条件はあるのかなと思っていて、この辺かなと思っているのが、このスライドになります。もちろん、高等学校での総合的な探究の時間がちゃんと機能しているという前提はあるのですが、その中で生徒がマイテーマを考えて、深めたり、そのテーマに本気で取り組むことです。できれば、学校の中にとどまらずに、人と出会うこともあったほうがいいと思います。そして、経験を振り返ることです。原体験、舞台、過保護過ぎないこと、与え過ぎないこと、こういったことがあると、もしかしたら学びはつながっていると思っているところです。特に、この原体験、舞台をもうちょっと補足させてください。

(スライド54) この生徒ですが、高校の探究で大豆ミートに興味を持ちました。環境問題から始まったんですけども、それをなんとか広げたいということで、探究テーマで取り組みました。高校では実際にハンバーガーをつくって、

売ったりしましたが、大学に行ってからは、こんな形で実際に起業してやっていました。

(スライド55) 彼、彼女の例を改めて考えると、高校の時から起業に多少興味がありました。文化祭で代替肉のハンバーガーを販売しました。起業にも興味を持ちながら立命館宇治高校に入学し、高校2年生のときにマイテーマを設定する総合的な探究時間があったんです。このときに、上の学年の生徒が起業コンテストでいい結果を残してくれたおかげで、本校の生徒が招待してもらえて、出雲(充)さんに会えるチャンスがありました。彼は、そこに応募してきました。応募てきて、行つきました。あの出会いは大きかったです。

さらに高校3年生に上がりますと、総合的な探究の時間がありますので、思いつきり探究ができる、いろいろな偶然の出会いがあつたりしながら文化祭に出しました。立命館大学でも起業家教育は進んでいますので、そのイベントも紹介したりしました。彼の軌跡をたどればたどるほど、原体験となる出会いですとか、実際に販売できる舞台があることはすごく大事と思いました。

(スライド56) 二人は、大学のホームページを見ますと、こんなふうに紹介されています。立命館大学に入学してからは、奨学金等も活用しながら本当に事業化して、今も彼は頑張っています。このようなことが条件としてはあるのかなと、今、仮説として思っているところです。

(スライド57) 今、個別最適とか協働と言われますけれども、協働的な学びで個別の学びが深まるこども事実だろうと思っています。

(スライド58) これはお茶をテーマにしたまちづくりということで岡山県の倉敷翠松高校と本校とで、1年間コラボして、取り組んだポスターになります。彼らは3人チームで取り組んで、1回向こうに行ったり、向こうからも来てもらうことをやりました。そのプロジェクトの中身は置いておきまして、彼らの動機を見てみました。A君

は、お父さんが茶農家だったんです。Bさんは、農業に興味がありました。Cさんは、食に興味がありました。みんな興味・関心は微妙に違います。でも、その3人が一緒にになってプロジェクトを進めることで、学びは深まり、進みました。

(スライド59) プロジェクトの感想を見ても個別でした。A君は、自分から行動することが大事だとすごく感じていたようです。一方Bさんは、自分に自信が持てたらしいです。Cさんは、国際経営を学びたい、海外の方にも需要がある商品の販売方法を研究したいというふうに、キャリアやアカデミックに興味を持ったみたいです。いずれにしても、プロジェクトそのものが生徒の人生にも大きな影響を与えたことは間違いないのですが、その背景としては協働的な学びによって個別の学びが深まったことが大きかったのではないかと思っています。

(スライド60, 61) この辺のことを推理すると、探究とキャリア、大学のつながりは、高校生が高校卒業時にマイテーマを持つことがすごく重要です。総合的な探究の時間は自己のあり方、生き方と不可分な課題を探究するんです。とすれば、総合的な探究の時間にちゃんと取り組めば、生徒は自己のあり方、生き方と不可分な課題を探究しますので、それは結果としてキャリア教育が充実することになるのではないかと思います。その結果、生徒は探究とキャリア、大学での学びをつないでいくのではないかと思っています。

(スライド62) ここは高等学校として大事なことだと思うんですけども、高校はマイテーマ設定のすごく大事な時期だと思います。と言いますのは、進路だけ考えても、小学校は絶対に義務教育で中学校へ行けるんです。中学校は高校へ行くときに受験がありますけれども、大多数は普通科に行きますよね。確かに高校の特色はありますし、その選択はありますが、高校から大学に行くほどの選択肢はなくて、やはり普通科が多いです。ところが高校に行くと、

進路がすごく多様なんです。それは大学に行く、行かないとか、そういうことだけではなくて、仮に大学に行く、もっと言えば京都大学に行くと決めて、学部があります。もし就職するなら、どこの会社かを決める必要がありますし、専門学校へ行くなら自分の専門分野を決める必要があります。大学は学部を決めることが必要です。これを言い換えれば、今後、深めたいテーマや深めたいアプローチを決める必要があるということなんです。つまり、どの進路に進むにしても、高校卒業時に自分がどんなことに興味があるのか、どんなことで社会貢献できるのか、このことをちゃんと考えることが必要である、これは私たちが忘れてはいけないことだろうと思います。ここは先生方が多いと思うんですけども、我々教員は昔に学んだことで生活していくことができる特殊な業界かもしれません、どこかで教育をマイテーマと定めて、教員と決めて今があると思います。ですので、高等学校でのマイテーマの設定は、どういう進路であれ大事です。こう思ったときに総合的な探究の時間はすごく可能性があると思います。

(スライド63) でも、課題設定は難しくないですか。生徒は、どこかで偶然の出来事や出会いがあって生徒は決めていきます。仮でもいいから、決めて、次に進めて、変更していきますよね。結局、我々はどれかヒットしたらいいなと思って、いろいろなボールを投げていると思います。仮でいいから決める機会を決めて、そこで指導していっているのではないかと思います。ですので、私は自ら課題を設定する探究は、難しい課題設定を練習するチャンスでもあると思っています。

(スライド64, 65) ですので、本校では、課題設定において生徒が決めたら「浅いから、失敗しないテーマに指導する」とか「生徒がテーマを決められないから、こちらで決める」とか「どうしていいか分からないから、こうしておこう」とか、そういうことはしません。伴走は重要です

けれども、丁寧な指導をすればするほど教員の仕事が終わらないし生徒は教員の答えを待つ気がします。むしろ浅いテーマだったと生徒が気付く場をつくろうということを意識しています。

生徒がテーマを決められないから与えるというのは、分からなくもないですが、そう思ったら本当に決められない気がします。何より、これでこちらが与えたら生徒は与えられて終わってしまうのではないかと思います。放っておくというのも、伴走するからこそ深まると思います。

(スライド66)ですので、本校の場合は、問い合わせて「高校生活の集大成として来年1年間かけて取り組むなら、何にする?」ということを示した後で、今まで自分がやってきたテーマ設定を、探究の授業だけではなくて、中学校の授業とか、社会科の授業とか、小学校の自由研究とか、クラブとか、そんなことも振り返りながら1回、自分の根っこを探ることを授業でしたりしています。

(スライド67)本校としては、すごく大事にしているのは、この4つです。1つ目が、課題設定も練習なので何度か練習すること。2つ目が、これは仮のテーマだから、仮だけど、いったん決めて進むこと。別に駄目だったとしても戻ったらいいから、まず決めてみようということです。3つ目が、いろいろな経験はマイテーマに出会う確率を高めるに過ぎないと思っています。こうやったら100%行けるものがあればいいんですけれども、多分、ないです。私は数学だから思うんですけども、サイコロを投げて1を出したかったら、さいころをどう投げるかを研究するより、いっぱい投げたらいいと思うのです。(スライド68)ですので、確率を高める指導をすることです。そして、ポイントは振り返りで、テーマ設定が悪かったことに生徒が気付くことを大事に指導しているつもりです。

(スライド69,70)振り返りにおいては、こんな形で生徒が自己評価をした後に対話をし、もう

1回、自分で振り返るというプロセスで振り返りをしています。

(スライド71)次のプロセスに行くのは、振り返りがあるからではないかと思っています。

(スライド72,73)生徒の声です。これは、スライドにもあります。今まで出てこなかった生徒の例ですが、キャリア教育は大事だなと思わせてくれる生徒はいっぱいいます。その1例が彼女です。自分の内側の質問をされたとか、答えを外に探す必要が多いけれども、実は自分の中に見つけていたとか、こういうことはすごく大事だと思います。この子は、文部科学省の私のアントレプレナーシップに偶然載っていたんです。こんなふうに大学でも頑張ってくれています。

(スライド74,75)私個人としては、キャリア教育に取り組んできたときに生徒の差に悩んでいました。時間もなかったんです。生徒が面白そうな大学、学部からカタログギフトなどで選ぶような感覚がすごくあったんです。これは総合的な探究の時間で100%解決していませんが、指導の機会は増えていますし、チャンスは増えています。つまり、確率は高まったと思っています。おそらく探究×キャリア教育で、高大連携もより良くなるのではないかと思っています。

(スライド76~78)最後、これだけお話しして終わらせてください。高大接続もバージョンアップが必要ではないかというのが私の仮説です。ぜひ、またご意見を聞かせてください。高大接続は、生徒が次の世界に行くチャンスだと思うんです。でも、そこで生徒をお客さまにしてしまうと全然いいことがないのではないかと思います。

(スライド79,80)誰が学びをつなぐかなんですけれども、小学校はカリキュラムマップがすごく大事にされていて、教員がある程度つなぎます。これはすごく大事だと思います。高校は、先ほどの本校の生徒の例ではありませんが、教育課程なり、学校としてマップらしきものを持って

おくのはいいですけれども、そこを生徒が自分でつないでいくことが大事なのではないかと思っています。

(スライド81)昔から言われていることわざです。無理やり水を飲ませてはいけないというところで、生徒をどう見るかではないかと思っています。

(スライド84)高大接続です。おそらく昔は入試イコール高大接続でした。1999年の答申から変わってきました。少子化、探究の広がり、大学入試改革、今は本当にいろいろなことが広がってきています。でも、気になるのは、現場の先生の取り組みが増えて疲弊しているのではないか、とか、より生徒がお客さまになっているのではないか、ということです。そろそろ次のフェーズではないかと思っています。何が次のフェーズかは、私もまだ分かつてないです。

(スライド85,86)これは川合(宏之)先生の論文からですけれども、入試の接続だけではなく、そろそろ教育接続に行く時期だらうと思っています。さらに、もしかしたら入試で育てることもあるのかもしれません。これは、文部科学省の好事例集からですが、産業能率大学さんの入試です。これは生徒がオープンキャンパスへ行ったり、セミナーを受けたりして、その大学で本当にいいのかどうかを確かめながら、つまり入試のプロセスを経て、より入学動機を高めながら選抜されていく入試です。もしかしたら、これからはこんなこともありかもしれません。

(スライド87,88)ただ、結局は一緒に高校生のWillをどう育てるかではないと思っています。高校生は大学に行くときにマイテーマの設定が大事です。そのポイントは大学での学びを生徒が知って、Willを持って進学をすることだと思います。そのときにお客さまにするのではなくて、負の部分も見せて、それでも生徒がちゃんと選べるかとか、win-winになれるかです。イベントだけやっていたら、多分、しんどいので、どうwin-winをつくるかだらうと思っています。

ただ、やり方はともかくとして、いかにWillを育てることができるか、それが本当に高大で連携してできるのかどうか、これは次のフェーズだろうし、私もこれは考えていくべきテーマだらうと思っています。

以上で時間となりました。ご清聴、ありがとうございました。

スライド 1

高大連携フォーラム  
2024.11.16

## 探究×キャリアがつなぐ 高大の学び

立命館宇治中学校・高等学校 教諭 酒井淳平

スライド 2

**自己紹介**

酒井淳平（さかいじゅんぺい）  
立命館宇治中高 キャリア教育部長・研究主任

(略歴など) 養徳小→高野中・修学院中→北陵高校→京都教育大→立命  
1997年4月～1999年3月 京都食品衛生専門学校 非常勤講師  
(小学校からつまづいた生徒たちに高校の単位として数学1を教える)  
1999年4月～2008年3月 立命館中学校・高等学校 教諭  
(9年間ずっと担任：中1～中3、中1～高3)  
2008年4月～現在 立命館宇治中学校・高等学校 教諭  
(2008年～2013年3月 初代キャリア教育部長)

2013年度～2015年度 文部科学省 研究指定 貢任者  
「高等学校普通科におけるキャリア教育の実践に関する調査研究」(全課5校)

2018年度～2020年度 文部科学省指定 (探究) 研究主任+高校学年主任  
(研究開発学校、WWL 指定)

2021年度～ キャリア教育部長+研究主任

・科研費研究協力者  
・啓蒙館、新編教科書著者  
・文部科学省の仕事(各種委員など)

スライド 3

よろしければ一度ご覧ください！

数学授業づくり  
新CS-e  
2023年3月に実施

探究的な  
学びデザイン  
探究が進む  
学校のつくり方

スライド 4

### 今日の内容

- チェックイン
- 探究やキャリア教育の重要性
- 生徒の学びから考える
- 高大の学びをつなぐために大切なこと

スライド 5

### チェックイン

3人グループで以下の質問について交流してください

- ①先ほどの講演の感想
- ②この時間に聞きたいこと、期待すること
- ③今の学習指導要領でキャリア教育はどのように位置づいている？

スライド 6

学習指導要領では小・中・高すべての学校種において「キャリア教育の充実」と総則に明記されました。  
総則に書かれたということは、特定の教科・科目等ではなく教育課程全体で取り組みを進めていくということです。

2.平成29年版学習指導要領に基づくキャリア教育 実践の在り方  
総則が示すキャリア教育実践の在り方

児童・生徒が、

- 学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、
- 社会的・職業的自立に向けて必要な基礎となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、  
※各学校が、自分の子供の実情に即して検討する
- 特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図る。

なるほど、今やっていることは、自分にとって重要ななんかなあ  
なんか、この学びを通して、何がほしいのかが身につくのかから

特別活動を要としつつ、すべての教育活動を通して実践する

スライド 7

問題です！

この数字は何？（学習指導要領に関わる数字）

1 8 6

スライド 8

今日の内容

- 1、チェックイン
- 2、探究やキャリア教育の重要性
- 3、生徒の学びから考える
- 4、高大の学びをつなぐために大切なこと

スライド 9

**探究的な学び：**  
自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決するような学び

なぜ探究が話題になるのだろう？

数学の現在地は探究の成果そのもの。  
⇒数学を学ぶことは探究することなのでは？  
(これはどの教科も同じはず)

数学にとって当たり前すぎるから、逆に難しい？

実は数学は詰込みだと思われている？  
数学=解き方を教え込むという現状がある？

みなさんはどう思われますか？

スライド 10

ゴールが18歳になっている現状がある？

「自分がそれまでの教員生活で行ってきたのは、『18歳の頂点学力』の構築でした。希望する大学に合格するということは、生徒にとって夢の実現だから、それを支える責任全学校は負っている。

しかし、大学進学のための学力育成ばかりに重きを置いて、自分が教えた生徒が大学に入ってどうなっているのか、社会で活躍しているのか、そういうことにほとんど関心を持ってこなかったことに気づいたのです」

横浜創英中学・高等学校  
本間朋弘校長

⇒現在、新しい教育課程の実施・学びの転換に挑戦中  
(個を軸に、社会とつながる実学を軸に、探究型を軸に)  
<https://tookeizai.net/articles/-/747693>

スライド 11

**探究的な学び：**  
自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決するような学び

なぜ探究が話題になるのだろう？

数学の現在地は探究の成果そのもの。  
⇒数学を学ぶことは探究することなのでは？  
(これはどの教科も同じはず)

数学にとって当たり前すぎるから、逆に難しい？

実は数学は詰込みだと思われている？  
数学=解き方を教え込むという現状がある？

⇒教科を学ぶことは「探究」そのものだが、  
そうなっていない現状もあるのかもしれない

スライド 12

素朴な疑問①

そもそも学校は生徒の将来のためのもの

➡ なぜキャリア教育の必要性が言われる？  
(言われるまでもなく実践されているのでは?)

なぜ社会に開かれたが強調される？  
(自然と開かれているのでは?)

## スライド 13

**素朴な疑問②**

なぜ3つを強調する必要がある？  
(図から、キャリア教育が今回の学習指導要領の本丸であることはわかる)

→これらを育成することは当然ではないのか？

**「学力の定義」が変わる  
3つの資質・能力**

学びを人生や社会に活かそうとする  
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く  
知識・技能の習得

未だの状況にも  
対応できる  
思考力・判断力・  
表現力等の育成

参考文献：「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016.12.22）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chokyo0/toushin/1380731.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chokyo0/toushin/1380731.htm)

## スライド 14

**教育の現状に課題があるのも事実**

Q1 あなた自身について、お答えください。（各国n=1000）  
(※各設問「いい」回答割合)

設問	日本	米国	中国	韓国	イギリス	オーストラリア	フランス	ドイツ	イタリア
「自己実現」	35.8%	55.8%	60.1%	51.7%	36.4%	37.3%	40.4%	39.4%	37.3%
「自己実現+自己尊重」	44.1%	64.1%	62.0%	55.6%	43.6%	43.1%	49.0%	43.4%	43.4%
「自己尊重」	49.4%	66.0%	67.0%	60.2%	54.8%	54.1%	59.1%	54.1%	54.1%
「自己尊重+自己実現」	54.1%	74.8%	72.2%	69.6%	57.8%	57.8%	65.8%	57.8%	57.8%
「自己尊重+自己実現+自己成長」	58.3%	78.4%	78.4%	75.7%	65.7%	65.7%	72.4%	68.4%	68.4%
「自己尊重+自己成長」	62.0%	83.4%	82.4%	75.9%	66.2%	66.2%	73.1%	67.1%	67.1%

日本 THE NIPPON FOUNDATION

## スライド 15

**日本の生徒たち①（点数は高い！）**

**国際的な学力調査**

数学的ソリューション力  
キャリア教育の提案  
科学的リテラシー

2000 2003 2006 2009 2012

480 500 520 540 560 580 600 620 640 660 680 700 720 740 760 780 800 820 840 860

## スライド 16

**日本の生徒たち②（意欲は低い！）**

**Exhibit II.3: Students Value Science (理科全般について一括して質問し、国際比較可能な26カ国・地域における調査)**

General Integrated Science	Value	Summarized Total		On My Value	Average Score
		Country	Period		
China	0.01	221.1	34.93	330.00	114.00
China	0.01	441.0	34.93	330.00	112.00
America	0.01	460.0	25.00	417.00	105.0
America	0.01	469.0	25.00	420.00	104.00
Australia	0.01	437.0	25.00	406.00	113.00
Australia	0.01	437.0	25.00	413.00	103.00
United States	0.01	454.0	25.00	416.00	112.00
United Arab Emirates	0.01	424.0	36.00	419.00	110.00
Singapore	0.01	454.0	36.00	440.00	114.00
South Korea	0.01	429.0	36.00	419.00	114.00
Iran Islamic Rep. of	0.01	429.0	36.00	419.00	114.00
Malaysia	0.01	455.0	36.00	440.00	114.00
Malaysia	0.01	455.0	36.00	440.00	113.00
England	0.01	427.0	37.00	418.00	113.00
England	0.01	427.0	37.00	418.00	112.00
Thailand	0.01	395.0	38.00	395.00	112.00
Thailand	0.01	395.0	38.00	395.00	111.00
China	0.01	466.0	38.00	459.00	111.00
China	0.01	466.0	38.00	460.00	110.00
China	0.01	466.0	38.00	460.00	109.00
United States	0.01	446.0	38.00	438.00	109.00
United States	0.01	446.0	38.00	438.00	108.00
Hong Kong SAR	0.01	398.0	39.00	395.00	110.00
Hong Kong SAR	0.01	398.0	39.00	395.00	109.00
Japan	0.01	421.0	39.00	414.00	110.00
Japan	0.01	421.0	39.00	414.00	109.00
Japan	0.01	421.0	39.00	414.00	108.00
Korea, Rep. of	0.01	467.0	40.00	459.00	111.00
Korea, Rep. of	0.01	467.0	40.00	459.00	110.00
China	0.01	457.0	40.00	450.00	110.00
China	0.01	457.0	40.00	450.00	109.00
China	0.01	457.0	40.00	450.00	108.00
China	0.01	457.0	40.00	450.00	107.00
International Avg.	0.01	457.0	40.00	450.00	107.00

IEA, TIMSS 2011 International Results in Science.

## スライド 17

**日本の教育の課題**

**テストの点数は世界トップレベル！**

なのに、  
将来の夢がない  
自分は責任ある社会の一員だと思えてない  
自分で国や社会を変えられると思えていない  
解決したい社会課題がない  
学ぶ意味を見いだしてない

## スライド 18

**○○教育でいいのか？**

将来の夢がない  
⇒キャリア教育でいいのか？

自分は責任ある社会の一員だと思えてない  
⇒18歳成人教育でいいのか？

自分で国や社会を変えられると思えてない  
⇒主権者教育でいいのか？

## スライド 19

今、問われている生徒観

生徒はどのような存在ですか？

- 生徒はサービスの受益者？社会の担い手？
- 生徒は管理・指導されることで学ぶ？自ら学ぶ？

左側の生徒観が現状につながっているのでは？

## スライド 20

**生徒観**

- ・生徒はサービスの受益者（ $\leftrightarrow$ 社会の担い手）
- ・生徒は管理・指導されることで学ぶ（ $\leftrightarrow$ 自ら学ぶ）

**日本の課題**

- ・自分で国や社会を変えられると思えていない
- ・学ぶ意味を見いだしてない
- ・責任ある社会の一員と思えていない
- ・解決したい社会課題がない・将来の夢がない

生徒観がそのまま今の課題につながっている！  
今大切なのは、生徒観の変化（左から右へ）

→ 社会の担い手になり、自ら学んでいく生徒に  
必要な取り組みは何？と考えると、  
キャリア教育や探究の重要性は明らか

## スライド 21

キャリア教育はバージョンアップが必要

キャリア教育と言えば、これでは？

↓

今、変わるべきはこのイメージ！

## スライド 22

生徒をお客さま扱いせずに、  
社会の担い手を育てるキャリア教育を！

×職業教育  
○人間教育

必ず実践している！

↓

対生徒：指導の視点は生徒の未来  
対自分：自分の役割を果たす

自分の指導をキャリア教育の視点で見直すと、  
より意味づけができる（目線を少し先に）。  
意外と難しい！

## スライド 23

OECD・Education2030

世界的な学びの潮流のなかでも、「学びに向かう力・人間性等」が重要だと考えられている

大人になっても、自分が成長しようとする火を灯し続けていくことが、これから時代、どうに必要。土台をつくるのが、中高生の時期。

文科省板倉さんの記事 (2020.6)  
<https://www.edai.co.jp/study/interview/200623-masabi/>

## スライド 24

AIの時代だからこそ好奇心と言語力が重要！

AIに問い合わせを入力するのは人間！  
道具を使いこなすのも人間。  
言葉で入力するが、その根っこは好奇心

キャリア教育（+探究）の出番！

学校は「出会い」「原体験」の場！

スライド 25

総合的な探究の時間はキャリア教育の視点を持って取り組むことが重要！

(総合的な探究の時間の目標) (特に新規のところ)

- 自己の在り方・生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していく
- 新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う

キャリア教育=キャリア発達を促す  
→社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現していく過程

自分の役割を果たすことを考える際に重要な問いは  
「自分はどのような課題を発見・解決したいのか？」  
「自分はどんな生き方をし、どんな社会を創りたいのか？」

=これは総合的な探究の時間の目標そのもの！！  
(これはキャリア教育の手引きにも記載。轟話あり)

スライド 26

ここまで感想など  
少し共有してください

スライド 27

今日の内容

- 1、チェックイン
- 2、探究やキャリア教育の重要性
- 3、生徒の学びから考える
- 4、高大の学びをつなぐために大切なこと

スライド 28

本校の軌跡 (探究に関わることを中心に)

1994年度 学校法人立命館と合併  
→学校大改革、先進的な取組多数  
(挑戦するという文化がある！)

①2013年度 C S L (キャリア教育授業)開始  
(文科省研究指定を受けての取り組み)  
⇒生徒の成長+多くの学校に広がるという予想外の成果あり！

②2017年1月 カリキュラム委員会スタート  
(若手～中堅教員がチームとなって次の学校作りを考える)  
⇒似たような問題意識！コアの必要性が共通認識になる！

③2018年度 新カリキュラムスタート  
(文科省の研究開発指定校として総合的な探究の時間のモデル作り)

スライド 29

本校の今結論

なぜ探究なのか？

探究

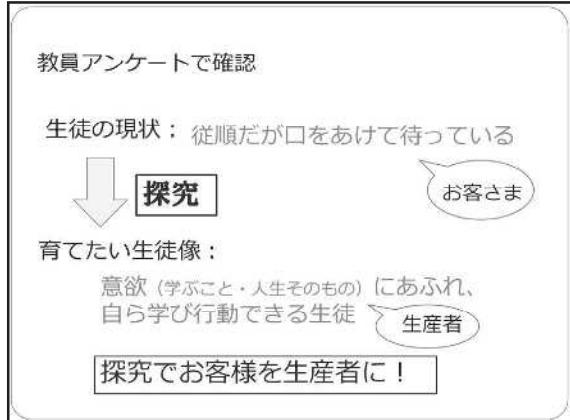
もしかしたら今の社会の風潮も、教員の努力も、結果的に生徒をよりお客様にしているのかもしれない。この点で、イベント的なキャリア教育もバージョンアップが必要！

スライド 30

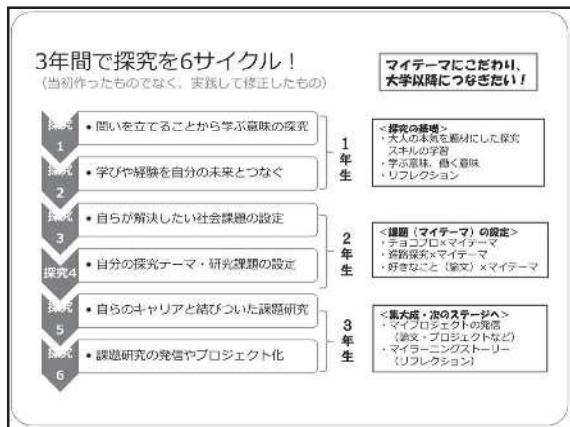
カリキュラム委員会での議論  
(クラブや教科固有の課題ではなくすべてに共通したものがある！)

教員：コアが教科を越えた教員の繋がりの場に  
→教員集団の力量UP!!

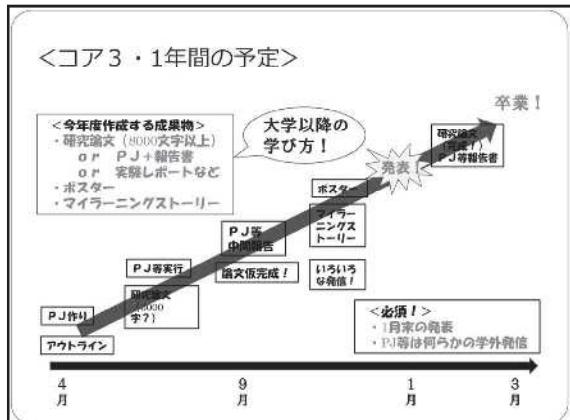
スライド 31



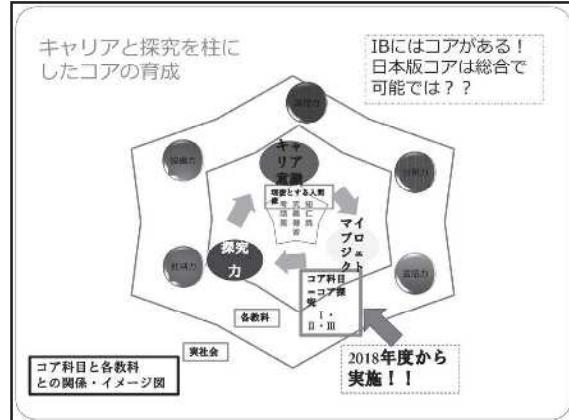
スライド 33



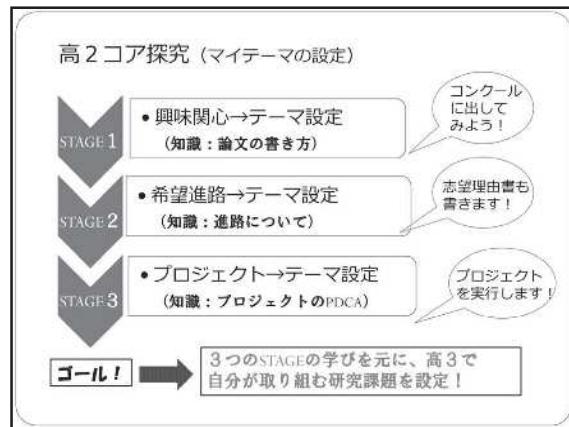
スライド 35



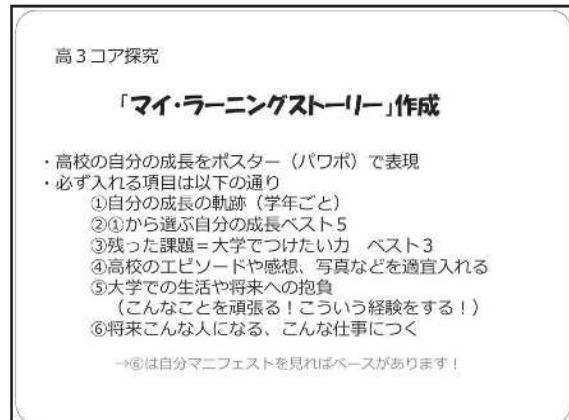
スライド 32



スライド 34



スライド 36



## スライド 37

**生徒の作品例**

振り返ることで成長の実感と将来への目標を立てるように

キャリアパスポートになると思っています！

## スライド 38

**生徒の作品例**

キャリアと結びついたマイテーマ

この生徒は立命館大のスポーツ健康科学部へ

**低身長でも140cmプロジェクトは成功するのか**

この生徒は立命館大のスポーツ健康科学部へ

この生徒は立命館大のスポーツ健康科学部へ

## スライド 39

**生徒の作品例**

マイテーマを起業プランに！  
+報告書

Japan Challenge Gate 2022  
経済産業大臣賞  
受賞！！

## スライド 40

(おまけ) 教員も成長しました！  
(例: 探索×教科で授業を作り、他校と協働)

VIEWnext ONLINE

"現場発"の教育イノベーション 国語×探究学習で、2校合同授業を実施。その成果と課題を担当教員が語り合いました！(立命館宇治高校・仙台第三高校)

宮城県仙台第三高等学校と立命館宇治中学校・高等学校（附属校）は、生徒の質、能力の面を目標に、2021年度から合併授業を実施しています。2022年度は、国語の教諭と文学の専任教諭で、オンラインによる合併授業が行われました。本記事では、合併授業を始めたばかり、合併授業を通じた生徒の成長などについて、2校の先生方に伺いました。

<https://view-next.henesc.jp/innovation/page/article13814/>

## スライド 41

探究とキャリア・大学の学びはどうつながるのだろうか？

## スライド 42

コア探究の実施で  
キャリア教育は確実に前進した！

行動するべきことがわかつて  
いる生徒の割合

年	割合
2015・2016年度	52%
2020年度	68%

高3・卒業時の数字

## スライド 43

探究がつなぐ学びのストーリー

Aさん（女子・中学校から立命館宇治、内部進学希望、文系）

高1現代社会「SDGsアイデア報告会とリフレクション」

グループごとに考えたアイデアを報告

## スライド 44

Aさん作成のスライド (1枚目)

マイクロプラスチックのない海に

Aさん、Bさん

## スライド 45

Aさん作成のスライド (ラスト)

提案  
コラボさせた商品を  
日本でブランド化されている資生堂で  
physicians formulaの  
技術  
を広める  
これが売れると他の化粧品会社も  
環境にいいものを作らざるを得なくなる  
・高校生のアイデアから作られた"という  
キャッチコピーで同世代にSDGsを広められる

## スライド 46

2年後 Aさんは3年生になりました

（探究テーマ）  
「うじラボプロジェクト」  
企業とコラボし、オーガニックな  
マスクスプレーを開発  
→文化祭で限定販売

"高校生のアイデアから作られた"という  
キャッチコピーで同世代にSDGsを  
広めてるのでは？

## スライド 47

Aさんのプロジェクト報告書

「私は高校一年生時の現代社会の課題で、オーガニックな会社とコラボして環境や人体に良い化粧品や日用品を作る」ということを考えましたが、その時は行動に移すことができませんでした。

しかし、今年（高3）のコア探究で、そのプロジェクトを進めることができました。一年生の時はただ頭に思い描いていただけのプロジェクトを実際に形にするということがすごく大きなモチベーションになりました。

総合的な探究の時間があることで、Aさんの課題意識はより具体的なアクションにつながる！！

## スライド 48

各教科の学びも重要

「（プロジェクトを進めるにあたって）現代社会の授業で詳しく調べていたため知識も多く、このプロジェクトの大きな力になれたと思います。また、私はSDGs（本校の学校設定科目）の授業で環境について学んでいるので、そこで学んだこともこのプロジェクトで生かすことができました。」

学びが将来につながる  
「私は大学で経営学を学ぶので、すごくためになる経験をさせていただけたなと思います」

総合的な探究の時間は、学びをつなぎ、生徒の学びを豊かにする！生徒は学校を出ると大きく育つ！！  
(本校がようやく気づいたこと)

スライド 49

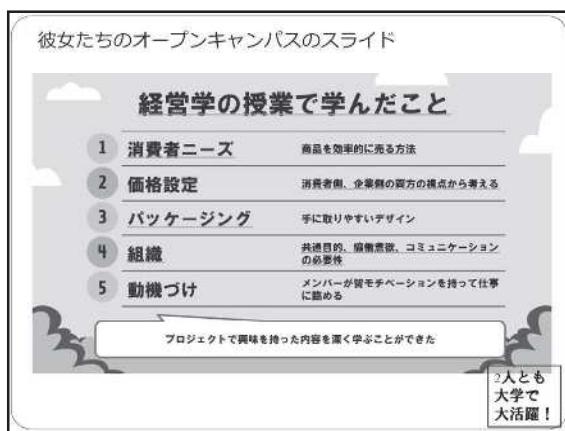


1年3か月後  
オープンキャンパスに

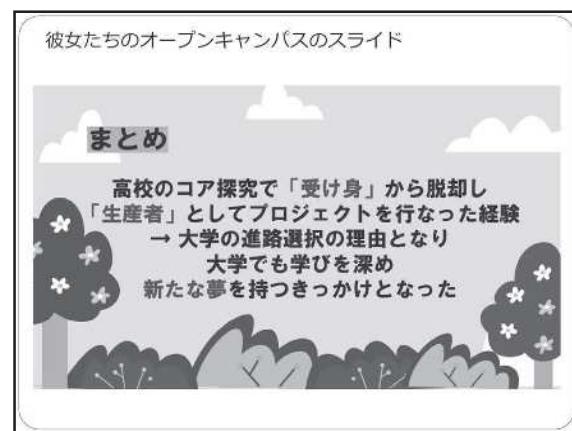
スライド 50



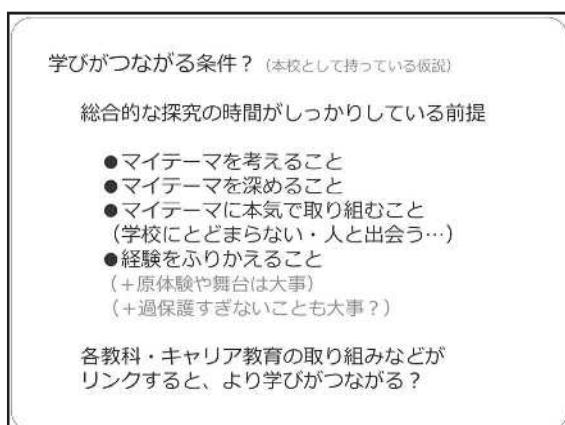
スライド 51



スライド 52



スライド 53



スライド 54



## スライド 55

菅原くん（経営2）・大西さん（総合心理2）

高校時代から起業に興味を持ち、文化祭で代替肉のハンバーガーを販売するなどしてきました。

- 起業にも興味を持って立命館宇治高校に入学
- 高校2年次にマイテーマを設定する総合的な探究の時間
  - ・ユーチューバーの出雲社長と会えるイベントに参加できるチャンスをつかむ！
- 高校3年次の総合的な探究の時間でテーマを深める
  - ・その中で偶然の出会いもあり、文化祭出店
  - ・大学も起業家教育を進めており、そちらのイベントも紹介

原体験（出雲さん）と舞台（文化祭など）が重要！

## スライド 56

大学での2人



立命館大入学後は、大学が学生を支援するための奖学金を活用し、代替肉を仕入れて食のイベントに出店するといった活動を続け、同級生とともに1月に事業化にこぎつけた。

<https://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=1674>にも詳しい記事があります

## スライド 57

協働的な学びで、個別の学びも深まる

## スライド 58

生徒の例（現在1回生）

お茶による街づくりをテーマにした協働プロジェクト  
倉敷翠松高校×立命館宇治

Aくん「父が茶農家」  
Bさん「農業に興味があった」  
Cさん「食に興味がある」

→「お茶で地域活性をしたい」という思いは共通だが、興味関心は少しずつ違う。



## スライド 59

生徒の例（現在1回生）

プロジェクトを終えての感想から

Aくん「自ら行動していかなければ、人とも会えないし、物語が始まらない。  
これからも行動したい！」

Bさん「自分にいいように自信が持てた。  
プロジェクトの一員に慣れたのは私の誇り」

Cさん「国際経営学について学びたい。  
海外の方にも需要がある商品の販売方法を研究したい」

プロジェクトは生徒の人生にも大きな影響を与えた。その背景には協働的な学びで、個別の学びも深まっていることがある。



## スライド 60

探究とキャリア・大学のつながり

・そもそも高校卒業時に生徒がマイテーマを持つことが必要。

・総合的な探究の時間は、自己の在り方・生き方と不可分な課題を探究する。

→ キャリア教育は総合的な探究の時間でより充実するのが当然。その結果、生徒は探究とキャリア・大学での学びをつないでいくのでは？

## スライド 61

総合的な探究の時間はキャリア教育の視点を持って取り組むことが重要！

(総合的な探究の時間の目標) (特に新規のところ)

- 自己の在り方・生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していく
- 新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う

キャリア教育＝キャリア発達を促す  
→社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現していく過程

自分の役割を果たすことを考える際に重要な問いは  
「自分はどのような課題を発見・解決したいのか？」  
「自分はどんな生き方をし、どんな社会を創りたいのか」

=これは総合的な探究の時間の目標そのもの！！  
(これはキャリア教育の手引きにも記載。裏話あり)

## スライド 62

自分のテーマを設定することは高校でこそ重要なこと

(進路)  
小学校→中学校に進学する。中学は学科などはない。  
中学校→多少の選択はあるが、大多数は普通科。  
高校→進路は多様。大学に行くとしても学部を決めて進学する。

<高校の進路決定>  
・就職の場合→何を売ってる会社で、何をしたいのか決める  
・専門学校→自分の専門分野を決める  
・大学→学部を決める=今後深めたいテーマや方法を決める

=いざれの進路に進むにしても高校卒業時に、自分がどんなことに興味があるのか、どんなことで社会に貢献できるのかを考える必要がある。  
(私たち教員も(特殊な業界だが)どこかで教育・教科と決めて今がある)

## スライド 63

課題設定において大切なこと

マイテーマの設定・課題設定は難しい

- どこかで自分に影響ある出来事や出会いがあり、それに影響される。
- 仮に決めることで次に進める。決めてもその後変更できる。  
⇒私たちは、生徒にヒットすればいいなと思って、いろんな企画をする。  
⇒仮にでも“決める機会”を設定し、そこで指導する。

自ら課題を設定する探究はチャンス！絶好の指導機会！

## スライド 64

課題設定どうしますか？  
(次のような指導どう思いますか?)

- 生徒の決めるテーマは浅い場合が多いので、丁寧に指導する
- 生徒はテーマを決めないので、こちらで与える
- どうしていいかわからないので、とりあえず放置

## スライド 65

本校は生徒が決めることにこだわってます

- 生徒の決めるテーマは浅い場合が多いので、丁寧に指導する  
→伴走は重要だが、この方法だと教員の仕事が増えるだけでは？  
→生徒が教員の答え待ちになるのでは？
- 生徒はテーマを決めないので、こちらで与える  
→与えられたものという意識を持つのでは？
- どうしていいかわからないので、とりあえず放置  
→伴走しないと、深まらないのでは？

## スライド 66

探究×キャリア 実践例

授業スライド(例) 今日の問い合わせ

1年かけて高校生活の集大成として  
自分は何をテーマにするだろうか?  
=あなたのマイテーマは何?

マイプロジェクトの3つの軸

<マイテーマ・マイプロの種を探す!>

(今までコア探究で取り組んできたこと)  
・高1コア探究での学び  
・高2コア(1000文字チャレンジ、進路探究、チョコプロ)  
(他に取り組んできただろうこと)  
・中学校までに取り組んだ何か  
・現代社会、政治経済やSDGsの授業での経験  
・その他課外での経験(クラブ、学校以外でのことなど)

スライド 67

本校が大切にしていること

- \* 課題設定も練習なので、何度も練習する。  
(だから3つのステージ)
- \* 仮のテーマなので決めるのが大事と強調する。  
(決めて情報収集することで次に進めるのも事実)
- \* いろいろな経験がマイテーマに出会う確率を高める(100%これ!というものはない)  
(進路指導などの関連を持たせるなどの工夫も重要)
- \* ポイントはふりかえり。テーマ設定が悪かったことに生徒が気づくことを大切にする。

スライド 68

ポイントはふりかえり

たとえば2学期のチョコipro、1回目のプロジェクト終了時の授業。

スライド 69

自己評価→他者との対話→自分と対話でふりかえる

1) 自己評価  
以下の点について5点満点で評価しましょう。可能なら簡単に理由を書きましょう。  
 ①テーマの入り入り度(あっちゃんやりたい!=5、あまりやりたくない=1)  
 ( )  
 ②テーマについての情報収集(かなりよくできた=5、ダメ=1)  
 ( )  
 ③アクションに向けて課題を明確にできたか?(かなりよくできた=5、ダメ=1)  
 ( )  
 ④アクションの具体性や実現可能性(かなり良い=5、ダメ=1)  
 ( )  
 ⑤自分の取り組み方(積極的=5、消極的=1)  
 ( )  
 →上の①~⑤に1~5の評価を各1つ付けるとしたら  
 ・・・5を付けるのは( )、1を付けるのは( )  
 理由:

スライド 70

2) 対話  
プロジェクトについての説明と自己評価を話して、もらったコメント

3) もう少し深く振り返る  
 ・今回のプロジェクトが上記のようになった理由は?  
 ・どうすればもっといいプロジェクトになった?  
 ・他の人や先輩のプロジェクトを見て、自分も取り入れたいことは?

4) 今回の経験を踏まえて次はこうしたい!と思うこと

5) 次のテーマは?(思いつく限り書くこと)  
(自分で書いた後で、他の人に提案してもらうこと)

スライド 71

ふりかえりで探究サイクルを次のステージへ

探究的な学習

ふりかえり!

■日常生活や社会に目を向け、生徒が自ら課題を設定する。  
 ■探究の過程を経由する。  
 ①課題の設定  
 ②情報の収集  
 ③整理・分析  
 ④まとめ・表現

■自らの考え方や課題が新たに更新され、探究の過程が繰り返される。

スライド 72

生徒の声(卒業生・4回生)

自分は今も明確な夢はない「夢を持たないといけない」と言われることには違和感を持っていた。そんな自分だからこそ、自分の内側に対する質問をされたのが今につながっているように思う。

たとえば探究の授業でプリントに、好きなこと(もの)と、嫌いなこと(もの)5分書く時間があった。そのように少しずつ自分について聞かれることが多かった。正直面倒だったし、気恥ずかしい思いもあった。

でも「そんなんわからない」と言いたくなるところを、ちょっとずつ小さな針で突いてもらったり、その躊躇なりに漠然とでも人生について「こんなことしたいな」とか思えた。

まわりを見ていて、就職活動の時に答えを外側に探しに行く人が多いけど、自分はそうではなく、「こんな風に育ってきて、こういうことを大切にしたい」って自分の中に答えを見つけていた。高校では「自分の中を見ろ」って3年間言われてた気がする。

スライド 73

大学でもがんばっています！

自分の未来を  
自分で作る

私のアントレプレナーラップ

SDGsの教育  
解決策  
SDGsのアントレプレナーラップ

INTERVIEW ACTIVITY LEARNING TEACHING REPORT

大学の特徴  
SDGs  
SDGsのアントレプレナーラップ

ユニバーサルな社会の実現を目指して

Interview

スライド 74

### キャリア教育に取り組んだときの悩み

- ・生徒による差が大きい。生徒が決めれない。
- ・取り組む時間がない。講演は単発になりがち
- ・生徒がカタログギフトから選ぶような感覚を持つ

⇒探究で100%解決するわけがないが、  
指導機会は増える！チャンスが増える！！  
(生徒がマイテーマに出会う確率が上がる)

⇒探究×キャリア教育で、よりよい高大接続が  
実現しそうな気がする。

スライド 75

### 卒業生の声（大学3回生）

プロジェクトという選択をした自分をほめたい  
やりたいことが明確だと生きているのが楽しい！  
探究は自分がやって楽しいことを見つけるためにある！

課題設定・マイテーマの設定はすごく重要！

<https://www.youtube.com/watch?v=S3a6-SNjO4>

スライド 76

### 今日の内容

- 1、チェックイン
- 2、探究やキャリア教育の重要性
- 3、生徒の学びから考える
- 4、高大の学びをつなぐために大切なこと

スライド 77

### 高大接続もバージョンアップの時期？

高大接続の名のもとにこうしていない？

今、変わるべきはこのイメージ！

↓

スライド 78

### 生徒観

- ・生徒はサービスの受益者（⇒社会の担い手）
- ・生徒は管理・指導されることで学ぶ（⇒自ら学ぶ）

### 日本の課題

- ・自分で国や社会を変えられると思えていない
- ・学ぶ意味を見いだしていない
- ・責任ある社会の一員と思えていない
- ・解決したい社会課題がない
- ・将来の夢がない

生徒観がそのまま今の課題につながっている！  
今大切なのは、生徒観の変化（左から右へ）

→ 高大接続というチャンスは、生徒を受益者  
にするとお互いにとってプラスにならない！

## スライド 79

学びをつなぐのは誰？

小学校：先生（カリキュラムマップ）  
⇒先生が学びをつないでいく

高校は生徒がつないでいく！  
(それができるカリキュラムが前提)

## スライド 80

実戦するときに、少しのマインドの違いが大きな差になる

学びをつながらなければいけない  
(徹底指導)

つながればいいなあ  
(つながる確率を高める？)

こちら（大人）が無理につなげようとする  
そのマインドが生徒をお客様にする

## スライド 81

馬を水辺に  
つれていっても  
水を飲ませることは  
できない

水飲みなよー

水辺に連れていくことはできる！  
(そのための工夫をする)

## スライド 82

マインドセットは大切かもしれない

教員のマインドセットには、星の王子さまの「実業家」のような生真面目さがあります。

実業家：真面目で数字にだけ興味。いつも星の数を数えている。  
数えた星を管理するために、その数を書いた紙を引き出しにしまっている（誰かの役には立たない）。集めることが自己目的化している

「探究が進む学校の作り方」梨子田先生の文章から

## スライド 83

このマインドで取り組みますか？

- ①全員が同じようなことを、同じように取り組んで、同じような到達度にならないといけない
- ②先生が全員の学びを管理し、アドバイスのようなものを生徒に伝えないといけない
- ③生徒にはきちんと成果を出させ、成果が出ない生徒には指導を加えないといけない
- ④公平公正客観的に全員を評価すべき

実業家：真面目で数字にだけ興味。  
いつも星の数を数えている。  
集めることが自己目的化している

## スライド 84

高大接続は転換点を迎えている

入試＝高大接続だった時代  
(そもそも大学進学率も高くない)

↓

1999年12月の中央教育審議会答申  
『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』  
高校生のうちに大学教員の授業を受ける生徒増加  
SSHの取り組み、入試広報イベントなど増加

↓

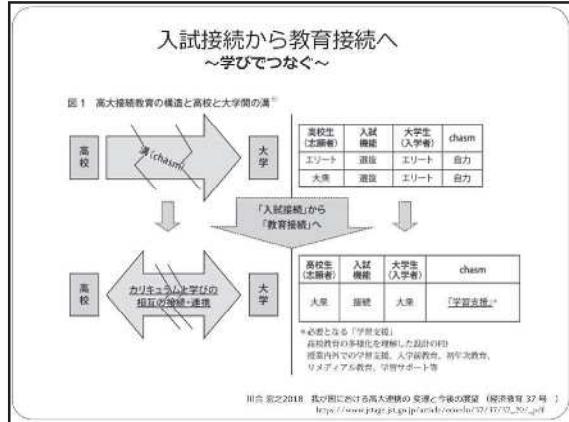
少子化、探究の広がり、大学入試改革で  
取り組みは加速度的に増える

↓

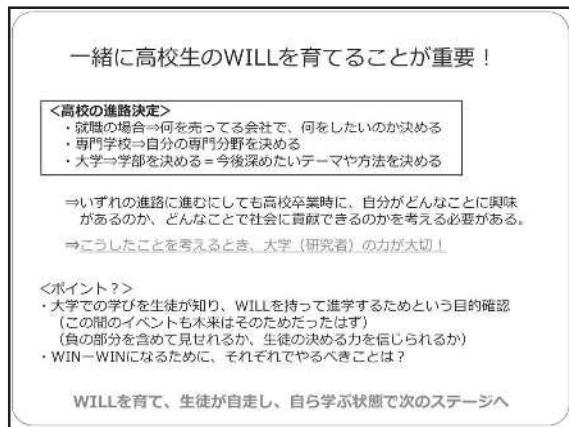
次のフェーズは？  
生徒の数は減る！

→一方で現場の心ある先生の疲弊や  
生徒のお客様意識助長という実態。  
…本当に育っている？

スライド 85



スライド 87



スライド 86

- ・どうすれば高校と大学でより生徒のWILLを育てることができるのか？
  - ・どうすれば高校と大学でWIN-WINな連携が実現するのか？

## 指定討論・質疑応答

[討論者] 寺田 拓真（広島県総務局付課長／元 文部科学省教育改革推進室専門調査官）

[討論者] 酒井 淳平（立命館宇治中学校・高等学校）

[コーディネーター] 乾 明紀（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室員／京都橘大学 経済学部教授）



乾：よろしくお願ひいたします。

それでは、今から1時間ほど、指定討論という形で進めさせていただきたいと思います。指定討論というのは、私も大学院に行くまではあまり聞かなかつたんですけども、指定討論者、つまりコーディネーターである私がお二人のお話を簡単にまとめて少し質問を投げかける、そういう討論だというふうに思っていただけたらと思っております。私だけ独り占めするわけではなくて、皆さまから頂いた質問も、この場でお二人に投げたいと思っております。

(スライド2)先ほど、私の肩書きだけが紹介されたんですけども、私は京都橘大学の経済学科に所属していますが、専門はキャリア心理学で、ここに書いてあるようなことを研究しております。これは、ちょっと前にテレビで、若者の早期離職についてコメントしろということでお放送に出ていて、緊張している私の顔ですが、今日とどちらが緊張していますでしょうか。同じくらい緊張しているかもしれません、テレビはなかなか緊張いたしました。あとは、主な委員として、このような委員ですとか、高校の学

校運営協議会の役職などに就いて、高校での活動や、それに関連するような活動をやっております。

私自身は22年前に、このフォーラムの1回目を事務局側として担当しておりました。当時は、私は大学の職員でした。大学コンソーシアム京都は大学の出向者が京都市の職員の方と共に事務局になって、いろいろな仕事していますが、当時は職員側として、裏方でこれを企画したりしておりました。そこから22年たって、まさか教員側で、このような形でこの上に立つとは思っておりませんでした。感慨深いものがありますが、それは置きながら、今日は指定討論者の大役をなんとかまとうできたらと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

(スライド3) それでは、前置きが長くなりましたが、指定討論の流れになりますが、このような流れで進めていきたいと思っております。フォーラムの趣旨を、簡単に確認をして、ご発表の整理、そして指定討論者の私がこんなことを気付きましたということ、それを基に私のほうからお二人に2つほど問い合わせさせていただきます。その後、参加者の皆さまから頂いた質問を投げかけるという流れでございます。

(スライド4)さて、まずフォーラムの趣旨確認です。お手元の今回のフォーラムの資料にもあるかと思いますし、チラシにも書かせていただきましたけれども、今回のフォーラムは探究を通して学びが高等学校から大学、社会へと向か

う一人一人のキャリア形成がどのようにつながるのか、あるいはつなげるのかというところです。加えて、学びの経験のほか、キャリア教育を通じた、より良い学校づくり、社会づくりのあり方を皆さんと一緒に探っていこう、これが今回のフォーラムの趣旨でございます。その背景につきましては、冒頭に長谷川先生からいろいろと詳しく説明があったと思います。こういった趣旨に基づいて、寺田先生と酒井先生のお二人に、ご講演をお願いしました。

(スライド5) まず寺田先生のご講演はどんな内容だったかというと、私なりにポイントをまとめさせていただくと次のようにでした。まず最初は、日本を含めて世界に共通する教育の課題は動機付けの入口部分と転移の出口の部分、この2つであるというお話がありました。これらに共通するものは、全て学びの価値付けの問題ではないかということです。生徒自らが発見して、価値付けができるないことが問題であって、それをいかに価値付けしていくように教育で支援したり、指導することが大事だというお話でした。本日のテーマであります、探究的な学び、あるいはキャリア教育も、対話を通じて学びの価値を探す旅ではないかというお話がありました。そして、この旅は時間と手間が非常にかかります。だからこそ高大が集まる、あるいは高大社も入れてもいいかもしれません、連携が大切であるというお話がございました。

そして、次に、教育改革や主体的な学習、学修を実現するためには自己決定理論の3要因が大事だというお話がございました。1つは自律性、それから2つ目が関係性と協働性、そして3つ目が自己有能感、この3つが非常に大事だと思いました。デシの理論を基に、このようなことを講演で発表していただきました。また補足があれば後ほど、これ以外にこれを押さえてほしいというものがありましたら、ぜひ言っていただきたいと思いますが、このような内容でございました。

(スライド6) そして、一方、酒井先生からは、日本はテストの成績は世界トップレベルです。しかし、長谷川先生の冒頭の説明にもありましたけれども、将来の夢がないとか、自らを社会の作り手と思っていないというようなデータを挙げながら、このような課題を示されました。そして、その要因は何かというと、お客さま、サービス受益者という認識が生徒にあり、さらに管理、指導による学習モデル、これが生徒の頭の中にあります。つまり、生徒観があります。これが将来の夢を描けなくしているとか、社会の作り手にさせていない原因ではないかというお話がございました。

そして、この生徒観を変えるには、学校での出会いや原体験が大事だと、これを実際の事例にも触れながらお話を頂きました。そして、さらに加えてキャリア教育が大事だというお話がございました。また、総合的な探究の時間は、キャリア教育の視点を持って取り組むことが大切であるというお話がありました。そして、キャリア教育を含む総合的な探究の時間、それにおける課題設定は生徒自らがマイテーマを見出すチャンスではないか、こういう内容のお話がありました。一方で、ちょっとかわいらしい子どものお写真もありましたけれども、お客さま的なキャリア教育です。完全に準備され過ぎた、インターナシップ的なというか職業体験的なキャリア教育はNGではないかというお話がありました。

時間がなくて、少し駆け足になってしまったところもあるのですが、マイテーマづくりについては、振り返りと対話が非常に重要であるというお話がございました。そして、高大連携は少子化や人口的な変化もあったりして、選抜から育てるに変えていかなければいけないということにも触れていただきました。そして、My Learning StoryやWillを共につくっていくことが大事ではないか、こういうようなお話があつたように思います。この辺は大丈夫でしょうか。

何か補足、もっとここが言いたいとか、言い残したことなどは大丈夫ですか。こういったお話が1部、冒頭の基調講演でございました。

(スライド7)それを受け、私なりの気付きですが、皆さんもさまざまな気付きを得られたと思うのですが、私的には、まず酒井先生の振り返りの対話、少し駆け足になりましたが、マイテーマやMy Learning Storyづくりは寺田先生の学びの価値付け、転移、それから動機付けの実戦ではないかというふうに感じました。

(スライド8)有名な探究学習サイクルをどれだけ回すかが大事とか、それから最近ではOECDの提言の中でも出てくるAARサイクルも大事であると言われております。いずれにいたしましても、このようなサイクルが大事な中で、探究の学びを価値付けしたり、さらなる学びやキャリアの見通しにつなげることが課題になっているのではないかと改めて気付きました。

(スライド9)講演の中でも触れていただいているだけれども、お二人に改めて探究の学びはどうすれば価値付けされるのか、これは生徒や教員も含めてですけれども、言い足りないこともあるかもしれませんので、これについてもう1回、聞いてみたいと思います。どちらからでも結構でございます。



寺田：これが分かればノーベル賞です。教育界のノーベル賞だと思います。すごく深いテーマで、これをやればできますとか、これをやればうまく行きますというのがあるわけではないと思います。なぜなら、先ほどの、広島の実践は社会構成主義に転換していきましょうとい

うお話ですけれども、当然、子どもたちの興味・関心も違えば、バックグラウンドもアイデンティティも何もかもが違うわけですよね。ですから、どれが引っかかるかというのは、先ほどの確率ではないですけれども、その子に応じて、はまることもあります、はまらないこともあるし、うまく行くこともあります、うまく行かないこともありますという連続なんだと思います。ただ、それを一般化して考えてみると、私はとにかく自己決定理論なんです。だから、自律性と関係性、協働性と自己有能感というものを活動の中にどれくらいデザインできるかというところが、すごくポイントになってくるのではないかというふうに思っています。

1個、事例をご紹介します。これも万能ではないです。全然万能ではないですけれども、広島で私たちがやってきた事例を1個、ご紹介します。2015年から2017年にかけてOECDや東京大学と組んで、広島創生イノベーションスクールというプロジェクト学習を実施したものです。丸2年かけてやりました。それは学校がやるのではなくて教育委員会直轄で、高校生向けのプロジェクト学習会をやっていました。1ヶ月に1回くらいみんなが集まって、2年かけて議論したり、実装したりしながら、テーマとして2030年の広島と世界がより良くなるためのプロジェクトを企画して、動かしてというものをやりました。これは、高校生だけではなくて、大学生、社会人、さらに学校の先生、NPOの方にもセンターで入ってもらい、マルチセクターみたいな感じで、いろいろな人たちに入ってもらって、広島の学びの変革の1つのモデルプロジェクトとして、そういうことを2年間やってきましたことがあります。

そのときも私たちの頭の中には、自律性と協働性と自己有能感だったんですけれども、1つポイントにしたのは、先ほどの話のように、振り返りと対話です。振り返りと対話を通じて自己有能感をどれくらい感じてもらえるかで

す。自己有能感から活動を結び付けることができれば、つまり、あのとき自分は成長したと、なぜ成長したのかと考えたときに「ああ、あれがあつたかだ」となつたら、価値づくりではないですか。そういう活動をどれくらい入れられるかということで、振り返りを大事にしようという議論をみんなしました。

振り返りというと、定性的か定量的か、大体この2つのどちらかにしたがります。定的になると、自由記述で「今日の学びはなんですか」とか「今日、分かったことは何ですか」みたいなことを書かせるやり方をすると思います。定量的になると、ループリックをつくって、コミュニケーション能力、1、2、3、4、5の定義はこれと言って、3とか2とか4と書きます。そういった形で定量的に実感してもらうやり方と、2つがあります。われわれが考えたのは、どちらも不十分ではないかということで、いいとこ取れないかといってやつたものをちょっとご紹介します。スライドを出します。

いいですか。ちょっと待ってくださいね。

(スライド10～13) 毎回、活動が終わるたびにリフレクションをしてもらっていたんですけども、そこで使ったシートは、こういうものを使いました。もし欲しければ、後でご提供します。広島創生イノベーションスクールというプロジェクト学習で、生徒の皆さんに身に付けてもらいたい資質能力はこういうものですというものを配っています。創造性とイノベーションでいたら、1から10まであります。1が1番下、10が1番上です。1と10だけ定義を書いてあります。選んでもらった上で、なぜそう思ったのを書いてもらいます。こちらがループリックを一方的に示して、当てはめて評価しなさいとやっているのではなくて、自分でループリックをつくるわけです。他者評価もあり自己評価もある過程の中に自分自身が関わっていて、これを自分でつくってもらった後に4～5人のグループで対話してもらう

ことをやりました。そうすると「なんとかちゃん、4ではないよ。今日は、ああいう発言してたじやん。6だよ」というフィードバックがあつたり、他の人の発表を聞いていて「7だと思ったけど、2かな」というケースが生まれていきます。対話を使って、振り返りをして、自己有能感を高めていってもらうやり方をしています。

これをやってどうなったかというと、これが面白いんですけども、2年やってみて、上がつて、下がって、また上がるというプロセスになりました。なぜ下がるというと、質的に変化します。例えば、コミュニケーション、コラボレーションみたいな項目があるんですけども、そこで言うと、最初のうちは「自分の役割がちゃんとできませんでした」の2から始まります。そこから「できました」の7になるんですけども、あるときを境にして「それはコラボレーションではないと思う」という話になって、他の子たちの良さを引き出すとか、自分にしかできないことは何かとか、他の人たちと協働するためにどういうことをやればいいのかを考えるようになって、そういう視点で見ると自分は7どころか3だといって、戻っていって、最後にもう1回伸びるみたいなプロセスをしていきます。それは、まさに活動の価値付けというか、学習の価値付けというか、自分たちの中での目指すところと学習の意味合いが形成されていく形になったと思っています。こういうような振り返りをうまく対話を組み合わせて、そして自己成長、自己有能感につなげていくような仕組みを入れていきつつ、学習活動の中に自己決定の中身を入れていくのがすごく大事かと私は思っています。

乾： ありがとうございます。ちょっとだけ言いますと、ループリックが1と10だけ決められるのがすごくいいですね。ループリックをつくるときは、各段階が、どう違うのかっていうのをあえてつくらないといけない。これがしんどくて、結局、ループリックづくりが嫌になって、ループリックづくりが疲弊するというのがあります。

ルーブリック批判するわけではないですけれども、今のような形も1つあります。そして、振り返りとA A Rでいう、もう一つのAnticipationの、見通しづくりになっているところもあるかと思いました。

酒井先生、先ほども、振り返りをやらされているではなくて、仲間と一緒に和気あいあいとやるとおっしゃっていました。最近では、学生に何か言うと、すぐに駄目出しと言うんです。良かれと思って言うのも駄目出しと思ってしまうところがありますので、否定ではなくて前向きな見通しを立てる、どうすればサポートを感じてもらえるか、そのために今のような仕組みがあるのが大事かなと思います。寺田先生、ありがとうございました。酒井先生、行きましょうか。



酒井： 今のご質問が価値付けだったんですけども、寺田さんが振り返りのことを紹介されたので、先に振り返りからしたいと思います。似ていて、びっくりしたんですけども。

(スライド14) 先ほど、本校で課題設定という話をさせてもらったんですけども、チョコプロと言いまして、1週間だけプロジェクトする授業があります。それは、他人を喜ばせるプロジェクトをするということを自分で決めて、1週間やります。本当にいろいろなプロジェクトが出てくるんですけども、われわれが大事にしているのが振り返りです。1回目のプロジェクト終了後の授業では、こういう振り返りをします。

(スライド15) いろいろなプロジェクトがあって、さまざまなんです。玉石混交なんですけれども、生徒にまず自己評価として、そのプロジェ

クトをやってみてどのくらい気になったとか、情報収集がどれくらいできたかとか、アクションの具体性はどうだったか、そもそも取り組み方はどうだったかみたいな形で、1回、生徒が自己評価をします。

(スライド16) 自己評価した上で、次にチームを組んで、プロジェクトについて、こんなことをしたという説明と、今、書いた自己評価をしゃべります。それに対してフィードバックをもらって、もらった後、もう1回、個人で振り返るという作業をします。やりたいことは、別にプロジェクトの評価をしたいわけではなくて、自分なりに1回プロジェクトをつくってみました。それが結果どうだったのかを確認してほしいんです。授業ではこれを踏まえて改めて2回目のプロジェクトをしますので、もちろん1回目が良かった子はそれをプラスアップしますし、がらっと変える子もいます。

(スライド17) 我々としては、まとめ表現をした後に次の課題設定に行く、ここは振り返りがポイントではないかと思いながらやっています。

余談なんですけれども、チョコプロを授業でやるとなつたときに、定年直前のある先生が「酒井君、俺もやってみる」と言われました。お子さんが大きくなつて奥さんと二人だったので、「1週間みそ汁プロジェクト、妻にみそ汁をおいしいと言わせる」ということで、本当にそれをされました。そしたら、そのクラスは生徒の振り返りが良かつたです。多分、その先生が何か声かけをされていたと思うんです。詳しくは分かっていないんですけども、プロジェクトされたのはすごいなと思ったのと、何かあるのだろうと思いました。

(スライド18) そして、話を戻させてください。今のものが振り返りなんですけれども、プロジェクトの価値付けについては私も本当に分かってはいないんですけども、学校現場の感触だけで言いますと、これはある生徒の例です。今、3回生の生徒で、中学校からうちに来て

いたんですけども、なかなか打ち込めるものが見つけられずにずっと来ていた子でしたが、廃棄苗に注目したプロジェクトに取り組むことになって、それがはまったみたいです。結果的に、これをテレビ東京で長く取り上げていただきまして、賞ももらいました。振り返りってみると、プロジェクトという選択をした自分を褒めたいとか、やりたいことが明確だと生きていて楽しいとか、探究は自分がやって楽しいことを見つけるためにあることだと振り返っていました。多分、この生徒にとっては、探究の学びの価値は位置付けられていると思うんですけども、我々は学校にいますので、こういう生徒を見る上で、我々教員の意義を確認できる場面はすごく多いと思っています。ですので、結局、我々教師ですから、生徒の姿こそが一番価値付けされるのかなと思ったりします。

この点で1個だけ私なりに思っていることがあるんですけども、探究となると、やる気のない先生がいるみたいな、温度差の課題感を話されている方がいて、それは本当によく分かるんです。学校は、みんなでそろえてこれをしましようみたいな、マイナスをなくしてゼロにしようとという動きがすごく強い気がしています。せめて探究くらいは、やる気がなくても50分ちゃんと教室にいたら、それでいいではないですか。むしろ、やりたい先生がゼロからプラスしていくことを認める職場のほうが、結果的に価値付けられるのではないかと思ったりしています。

乾： 寺田先生が思いつきりうなづいておられましたが、今のことについて何か補足なりコメントがありましたらお願ひします。

寺田： 先ほどのイノベーションスクールで言うと、学校の先生は、最初はやりたくなくて来ている先生がいっぱいいたわけです。しかも高校生たちが深遠なテーマを設定したりする中で、教育委員会事務局からのメッセージとして「これは子どものプロジェクトなので、子どもに決めさ

せてください。先生が決めては駄目です。引っ張っては駄目です」と言ったら、どうなったかというと「ほったらかしにしておけばいいでしょう」みたいな感じで、先生方が教室の後ろのほうで文庫本を読み始めるわけです。これはまずいと思って「関わってください」と言ったら、関わった瞬間に「こんなものでは駄目だ。これではプロジェクトとは呼べない」みたいな話が始まってしまって、こっちに行ったり、あっちに行ったりという状況をちょっとずつ補正して、落ち着けていくという作業をしていました。

どういう先生が一番変わったかというと、実は最初に否定的だった先生が一番変わりました。否定的に見ている先生は、熱意があるんです。反対するのは結構大変だから。自分にはこういうポリシーがあるんだというところを、それをガラポンで全部変えてくださいと思わせてしまったところがあったのではないかと思っています。生徒の姿が変わったときに、生徒がプロジェクトを進める中で「先生、これ、数学をやらないとできないわ」と言い始めたりして、その中で、数学の先生が「来たぞ！」みたいな感じになったりします。そういう生徒の変容を通じて、別に自分自身の今までのものが否定されるわけではないことが分かります。価値付けることは、先生にとっても、自分自身の今までの人生の学びの軌跡というか、教育の軌跡を価値付けてあげるプロセスと一緒にと思っています。教育行政の立場からすると、それをどれくらい仕組んで上げられるかがすごく大事な気がします。

乾： ありがとうございます。生徒だけではなくて、先生の価値付けも非常に大事なところだと思います。やる気のないところで言いますと、この間、探究の中間報告に対するコメントをするために、ある高校に行きました。なぜ探究をするのかをテーマに発表する生徒がいて、その生徒の顔が全然やる気がなかったのです。「なぜ探究をテーマにしたの？」と聞くと「だるいか

ら」と言いました。「なるほど。だるいからテーマにしたのね。学校へ行っていて、ほかに同じようにだることある?」と聞くと、「宿題がだるい」と言われて「そうだろう」と思いました。僕は最初「なぜだるいのか」をテーマに探究をしたいと思ったんですけれども「逆に、だるくないものは何がある?」と聞いたら「文化祭はだるくない。楽しい」と言ったのです。探究と文化祭は似ていることをしているのに、方やだるいという価値付けが行われて、方や楽しいという価値付けが行われている。似ているのになんだろうなと思いました、後で先生と結構そこの話をしました。

一方で、私のコメントとしては、だるいというのが本音なので、そこを変にいい子ちゃんというか大人が思うような答えを結論にせずに、なぜだるいのかという高校生の魂の叫びを発表に盛り込んだほうが、先生も楽しいし、意義があるものになるし、ぜひ共同研究しましょうという落ちを付けて終わりました。価値付けの問題は、ちょっとしたことで分水嶺があると思うので、それをどのようにやるのかが大事かと思いました。

(スライド19)次の気付きと質問に行きたいと思います。お話を聞いてちょっと思ったのは、お話以外のことも含めてなんですかけれども、探究学習は中間報告とか、成果報告とか、発表会を全国規模で実施することが増えていると思っています。そういうものに呼ばれたりする機会も増えました。こんな探究をやりましたというのは多いんですけども、一方で生徒が自己のあり方と生き方、キャリアの探究プロセスをまとめて報告する機会はあまり目にしないと思います。大々的に「私は、こんな生き方です」「あり方です」と言うのは難しいのかもしれないけれども、振り返るといいますかまとめる機会があってもいいのかなと思うのに、探究ほど盛り上がっていな気がしています。

(スライド20)キャリア教育は扇の要というふ

うに言われています。これは学習指導要領で「生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科、科目等の特質に応じてキャリア教育の充実を図ること」と書かれています、それを図式化したらこのようになるのかなと思い、扇を使って図式化してみました。特別活動というのは狭義のキャリア教育と思いました。いろいろな科目での学びをまとめて、その振り返りをして、そして見通しを持っていくことが大事だというふうに学習指導要領で言っているのではないかと思っています。酒井先生のお話にもありましたけれども、キャリア教育というのは探究と比べて、オワコンではないですかけれども、新しい探究に上書きされてしまったみたいで、最近、注目度が落ちているのではないかと思います。

(スライド21)そんな中で、私からの2つ目のご質問なんですけれども、学校でのさまざまな学びの成果、文化祭でもいいですかけれども、いろいろなものがある中で、それをまとめて自己的なあり方、あるいはキャリア、あるいは学びの見通し、機会としてのキャリア教育はなぜ探究学習ほど盛り上がらないのか、どうしたら盛り上げることができるのか、これについて少しお答えいただけますでしょうか。



寺田：なかなか簡単ではないと思いますが、3つのことを申し上げたいと思っています。1つ目は、この間、あるNPOの人と話をしていました。その人はキャリア教育の専門家ではなく

て、命の教育の専門家の方です。私の本の中で、子どもの自殺をゼロにしたいということを強調して書かせてもらったんですけれども。自殺予防の教育をやっておられるNPOの人です。その命の教育の方は「命の教育は近過ぎるし、遠過ぎるんです」とおっしゃっていました。何も起こってない状態での命の教育は遠過ぎるし、切羽詰まった状態になると近過ぎてしまって、その時点で命の教育をやっても効かないケースが結構あります。キャリア教育も、近過ぎて、遠過ぎる気がしませんか。つまり、キャリア教育が近過ぎる状態になったら、キャリア教育ではなくて、もはや職業教育になってしまいます。だから、インターンシップみたいな話になったり、職業体験になってしまします。遠過ぎる状態だと、実感が持てないから、いくらキャリアだ、生き方だ、あり方だ、と言われても、なかなか実感が持てないという、キャリア教育のある種の特性みたいものがあるという気がしているのが1つ目です。

2つ目は、酒井先生以外で、学校の先生でキャリア教育が得意だと言っている人に僕は会ったことがないです。とりわけストレートに学校の先生になってこられた方は、6歳から二十九年、三十何年、ずっと学校の中で過ごしているわけです。キャリアと言われても、これしかやっていないし、ここでしか生きていないみたいな状態です。しかも「学校の常識は社会の非常識だ」と言われるわけです。そこで「何を教えればいいのか。俺のキャリアを教えて」という話になるので、得意な分野ではないと思っています。そこら辺を外注で誰かに投げてしまえばいいという発想も、もしかしたらあり得るかもしれないですが、投げてしまうと、扇の要にならなくなって、独立してしまうんです。偉い人が来て「夢を持って」みたいな講演が始まったり、NPOの人が体系的なプログラムをやってくれたりしますけれども、それでも日頃の先生の授業とはつながっていないことになるか

ら、そういう意味でも先生の役割が大事なんですかけれども「俺が、私が、言ってはいけないよね」みたいな感じがあるのではないかというのが2つ目です。

3つ目は、それを解消できるかどうかは分からぬというか、やり方の話ではないんですけれども、最近、感動したことをご紹介して、希望を感じていただけたらいいかなと思います。先ほど、ご紹介をしましたが、広島叡智学園という中高一貫の学校をつくりました。全寮制で、留学生がいっぱいいる、バカロレアの学校です。広島県の大崎上島という離島にある公立の学校です。この学校はバカロレアが目立っていますけれども、創設当時にみんなで「探究とキャリアをしっかりとやるぞ」と話していました。私はこの学校が開校した後、しばらくして離れてしまったので、今はどうなっているか分からぬですが、ただ、当時の理念が仮に生きていれば、という前提でお話をします。この学校は中学校1年生から高校3年生までそろっていて、今年度、卒業生が出ます。1学年40人しかいない、すごく少人数の学校です。こんな事例がありました。

(スライド22, 23) この子は「Forbes JAPAN」に載りました。叡智学園の高校1年生の女の子が、鹿児島県の廃校の小学校を復活させて、普通の学校をつくりたいと言っていました。先ほどの酒井先生の話の、生産者側になる、学びの作り手になる1つの事例だと思っています。

高校1年生で、教育を受けるわけではなくて教育をつくる側に回ろうとしているんです。何が効いたかを考えたときに、いろいろあると思うんですけども、叡智学園の中学校の入試は2泊3日の合宿なんです。一次にはペーパーテストもありますが、二次試験は100人が40人に絞られる2泊3日の合宿で、グループワークで答えのない問い合わせみたいなものを、みんなでパネルディスカッションや、ダイアログをかなりやります。

その中で、私たちの予期せぬ展開が起こりました。全寮制の中では、コミュニケーション、コラボレーションがかなり重視されるから、そういう入試にしようと言ってつくったものの、1期生の子はいろいろなところを受けているだろうし、実績のある学校ではないので、辞退する子が出るだろうと思っていたんですが、帰り際に合宿所のけた箱を見ていたら、みんなが「みんなでこの学校に受かって、入って、一緒に社会を変えようね」みたいなことを言っているわけです。そこで仲間を見つけて、みんなで変えていくという事例がこれです。言ってしまうと、入学者選抜のときからキャリア教育をやっていたということだと思います。

そういう意味で言うと、中学校でもキャリア教育を重視した選抜ができるのだから、高校と大学ではもっとできるのではないかという気がしています。そういう接続とメッセージ性をどうつくりていけるのかが、1つポイントになるかなという気がします。

乾： はい、ありがとうございます。そうですよね、私も昨日、一昨日と入試の面接をしてきたんですけども、今、半分以上は推薦入試で取る中で、2泊3日ではやっていきません。設営や準備はそれくらい時間がかかるかもしれないですが、実際の面接時間はなかなかそうはいかないです。AO入試といつても、アメリカのようにアドミッションオフィスが時間をかけて、何回も面接などでコミュニケーションを取るわけではなく、一芸に秀でたら、みたいなところがあります。だから、コスパ、タイプのいいことをやっているのかもしれません。コスパ、タイプがいいからみたいなことだと、ちょっと、と思ってしまいます。人生ほどコスパ、タイプが悪くないものはないですから、コスパやタイプが良くないものをいかに意味付けていくかがキャリア形成だと思います。時間をかけてやればやるほど連帯が生まれて、変えていこうというモチベーションが上がります。いいですね。

では、酒井先生、他にございますでしょうか。



酒井： キャリア教育の話になるんですけれども、私が思っていることで言いますと、先ほどの扇の要の話で言いますと、本来的にはキャリアパスポートがその役割を果たしていたはずだろうと思います。ただ、それがなかなかうまく行っていない学校が多い気がします。その理由は、自分の中で仮説が1個あります。何かと言いますと、我々教員が振り返って対話することの大事が腹落ちしていないのではないかと思います。

私ごとになりますが、10年ほど前に、CDA・キャリアコンサルタントの資格を取りに学校に通わせてもらって、勉強をしたことがあります。そのとき職業人生だけではなくて、これまでの人生を振り返って、棚卸して、対話してという時間が多くて、振り返ることの大事を実感できた瞬間でもありました。それまでの自分だって教員を10年以上していたわけですから、そのタイミングはあったはずですし、振り返りが大事と言ってきていたはずなのに、腹落ちできませんでした。もし先生方がもっと腹落ちできたら、振り返りはもっとできるのではないかと思っています。

私が学年主任をしていたときに、担任会議というものをやっていました。学期の終わりや節目では15分、20分、1学期に経験したことや学んだことを5～6分で書いて、3人くらいのチームになってシェアするくらいのことをやったりしました。那をするだけでも、1学期の経験が学びに変わる瞬間だった気がします。独立行政

法人の教職員支援機構も、今は教員の学び方を変えると言われています。振り返りから学ぶことを意識されています。そういったことが同時に進んでいく中で、キャリアパスポートが今の形でいいかどうか分かっていないんですけれども、ああいうものが定着していけばちょっとずつ変わっていくかなとは思っています。

乾： ありがとうございます。寺田先生のお話で、社会構成主義的な学びになっているというお話をありました。社会構成主義というのは対話を通じて、自分の頭の中に世界を構成していくという考え方のことです。それはチョコプロでもそうかもしれないですが、小さな振り返りを何回もやる中でうまくなっていくと思います。大学生とかでも、それをやらない今まで、いきなり自己分析をさせたりするんです。対話と振り返りをして、それまでの間に、自分を整理するトレーニングを高校のときにもいっぱいやっていただくと、自己決定ができるようになりますよね。その時間は大切にしてほしいなと思いますが、先生方は忙しいので、なかなかこれができないことがあります。そして、キャリアパスポートの批判的なものだけが先行して出てしまうところは残念なところかと思います。

(スライド24) それでは、ここからは会場から頂いているご質問に対して答えていただこうかなと思っております。会場の皆さん、お待たせいたしました。まずは酒井先生ということで「マイテーマの設定について、私は本校の2年次の探究において人文ゼミを担当しています。そこでは設定するテーマが社会課題の解決や自分のキャリアにつながらないものが多く、毎年、着地点が難しいという問題が残っています」。この問題は、私もよく聞きます。「個人的には生徒の興味・関心を大切にしたいですし、全てを社会につなげる必要ないと考えているのですが、このような人文系のテーマ設定について、どのように選出されているのかお伺いしたいです」。

数学の酒井先生に人文系のテーマは酷かもしれません、逆にそうだからこそ出てくるものがあるかもしれません。いかがでしょうか。

酒井： そうですね、私は数学なので、本当に答えにくいご質問ではあるんですけども。大きな課題です。SSHがずっと浸透していく中で、アカデミックな観点において、理系の課題研究は研究の入り口で比較的指導もできます。文社系はどうなのか、アカデミックなレディネスという点ではどうだろうということはあります。

この点について、私が思っていることなので個人的な意見にはなりますが、まず、難しいという以前に、そもそもアウトプットをどうするかという学校課題があると思います。例えば、生徒がプロジェクト的なことをやることであれば、生徒がやってみたプロジェクト、学問の中でいえば地域課題とかであれば、自分たちのやったアクションは学問ならどういうことにつながるかということをちゃんと振り返る時間がなければ、最近は教材でもそんなものがいっぱいありますので多少つながると思います。生徒のリサーチクエスチョンから始まる、ミニ論文でも何でもいいのですが、稚拙でもいいので、いったんまとめた後で、もしくはまとめる前や、テーマを立てた時くらいに、何かのテーマに対していろいろな学問があるわけですから、どういう切り口で切るかが学問の特徴だと思います。そこで大学のパンフレットを見るでもいいと思うんですけども、このテーマについて、この学部の先生だったらこんな研究をしているくらいであれば、今の生徒は簡単に調べることができます。どの学問の切り口で切るかみたいなことを考えさせるだけでも、全員がそれで行けるかはともかくとして、全体の平均値は上がるのではないかと思います。

乾： ありがとうございます。寺田先生から補足のコメント、何かプラスであればお願ひします。

寺田： 難しいですよね。こうしたらいというのはあるわけではないんですけども、先ほど、ご紹介したイノベーションスクールでも、最初は小さいテーマから始まりました。みんなに挨拶するとか、自転車が倒れたら直すとか「2年かけて、それをやるの？」みたいな話をしていました。それはそれで彼らなりに問題意識はあります。「そんなのでは駄目だ、もっと大きいものをやれ」と言ったら、広島空港を三原市から広島市に移すとか、どうやってやるんだというケースが出てきました。でも、1回やってみたら広がったりつながったりするから、やってみることがすごく大事なのかなという気はしています。

今、福山市で働いていて、福山中学校という市立の学校があるんですけども、そこはマイ探究をやってまして、この間、文部科学省からインタビューをしてもらいました。中学校の探究はグループやクラスでやっていると思うんですけども、マイ探究は一人1個なんです。一人1個で探究をやっているところはあまりなくて、中学校の教頭先生や関係の先生方に話を聞きに行って「どうですか？」と言ったら、死にそうな目をしながら「めちゃくちゃ大変なんです」と言っていました。

何が難しいかというと、プロジェクトは「project」で前に行くから、どこに行くか分からないという状態です。自然科学系だろうが、人文社会系だろうが、プロジェクト学習は基本的にシームレスでボーダーレスだと思います。ここまでというものがないから難しいと思います。自然科学系は実験が使えるので、ボーダーレス、シームレスなプロジェクトが学校の中で実験的に体験できるのが強みです。社会科学になると、ここで考えていても社会課題は解決されていかないから、外に出るしかなくなってしまいます。そうすると、シームレスなので、土曜日だろうが、日曜日だろうが、放課後だろうが、自分のプライベートの時間も使って学ぼうとしていくよう

な状態に、理想的にはなってほしいし、實際になることが多いです。そうすると先生方的には、どこまで見ればいいんだとなります。

イノベーションスクールをやったときに、ある先生が子どもたちに言っていたのは「先生、今度の土曜日にこういうシンポジウムがあるので、行ってもいいですか」と子どもが聞いた際「いや、いや、その日は、先生は部活があるから駄目、駄目。勝手に学ぶなよ」みたいな話がありました。「勝手に学ぶな」とは何なんだという話ですけれども。そこら辺が、シームレスでボーダーレスだから学校の中で解決しないんです。そう割り切るしかないと思います。面倒を見られるのはここまで、学校で見られる部分ここまでだけ、学校で見られる部分だけで勝負しようとすると人文社会科学系のテーマは面白くなくなるので、外に出ます。実際に土曜日や日曜日にもやるという前提で、学校でできる部分はここまでやるというスタンスでやらないと、いいテーマは書けない気がします。

乾： はい、ありがとうございました。私の質問ではないのですが、私からちょっとだけコメントさせていただきます。マイテーマの設定の前に、チョコプロみたいなものをどれだけやるかも結構重要なかなと思います。そこで慣れたらちょっと変わってくるような気がします。

もう1個、人文社会系に関することです。大学で社会学や心理学をやっておられた方は、社会調査士という資格を勉強された方もおられると思います。アンケートの採り方や調査の仕方を体系的な形で学べる資格です。社会調査のやり方をちょっと知っておくと、アンケートの指事がしやすくなるのではないかと思います。高校生の探究活動を見てますと、適当なアンケートとか倫理的なことに全く配慮されていないアンケートに出会うことがあります。自然科学に比べアカデミックにできていないとか、這いまわる経験主義みたいなものは嫌という方は、アン

ケートにこだわってやってみるのもありかと思ったりします。なので、社会調査士のことも調べてみられるのもいいかと思います。

(スライド25) 次は酒井先生です。「高大間で教育の接続を行う場合、大学側にどのような体制があればいいですか。大学の研究教育の情報発信、高大連携センター等の組織の設立などがありますが、先生が一番重要なことは何でしょうか。加えて、私が個人的に大学と高校との間に人間的な関係性に基づくネットワークの構築の必要性を感じていますが、ご多忙な高校の先生方にはどのような感覚がおありでしょうか」。これは大学の方ですかね。酒井先生、いかがでしょうか。

酒井： 私は大学の組織があまり分かっていませんので、おそらくアメリカのアドミッションのようなものがあったらいいのかと思ったりします。正直、一番大事だと思っていることは、高校・大学が連携するにあたって、連携すると何をやっても仕事の隙間はできますので、間に組織があることはもちろん大事なのでしょうが、むしろそこに信頼できる人間関係があるほうが連携、ポストは一気に下げると思っています。

立命館の例で言いますと、一貫教育部という組織がありまして、そこが附属と大学とをつないでくれるんです。そこはもちろん公の組織ですから、公の組織があるおかげで、われわれ現場の教員が大学の先生と出会う可能性があります。たとえば、以前、総合心理学部の先生が来てくださったときに、飲みに行こうという話になりました。飲みに行ったら、話がとても盛り上がり、うちでやろうとしていることを大学もしょとされていて、来週月曜にメールでつながり「窓」というものを使って高大連携が始まりました。これは別に、間の組織を通してないわけです。いっぱい隙間はあるんですけども、正直、その信頼関係で埋まっているところがあると思っています。

ですから、何かしらの組織があることで可能性は高まるんですけども、最終的には人間関係だろうと思います。そうしたときに、「そんな感覚はおありでしょうか」については、おそらく高校の教員も、みんな感覚は多少持っていても、どこまでそこに時間を割けるか個人差があります。多分、それは大学も一緒ではないかと思います。



乾： ありがとうございます。高大連携で非常に大事な部分で、組織があつてもつながらないところはいっぱいあります。どんな人を育てたいのかというところの一致が、個人であれ、組織であれ、そのためには何をするか、目的と手段を明確にしていくとつながっていくのではないかと思います。高大の接続が、入試だったり、出張講義だけに留まらず、しっかりと地に足を着けた議論をした上でやるといいのではないかと思いますね。

(スライド26) 次に寺田先生へご質問です。「学びのイノベーションを進めるにあたり、現場教員のコンセンサスを取ることは必要なのか。それとも、個の教員の資質を信じて突き進むのか。個の強い教育現場ではコンセンサスを取ることが不可能なような感じがします」。なるほど、個人商店みたいなことはよく聞きますけれども。

寺田： これは、いい質問ですね。多分、高校で取り組んでおられる多くの先生方は、こういうことを感じているのではないかと思います。高校現場で探究が好きだと言うと、どうしても

変人扱いされたりする傾向がありますよね。そういう状況の中で、これが完全に正解かは分かりません。アメリカのものなので、日本でそれがそのまま通じるかどうかはあれなんですけれども、そういう研究をしたものがあります。

(スライド27) アメリカは心理学とか組織マネジメントの研究が強いので『The Human Side of School Change』という、学校を変革しようとしたときの人間の心の中が書かれた本があります。これは残念ながら和訳されていないので、英語で読んでいただくしかないんですけれども。この中に変革、改革をしようとすると1L3Cというのが必ず起きると言っています。これは中身の正当性に関わらず、学校の中でこの1L3Cは絶対に起きます。まず先生方は喪失感を感じて「今までやってきたことは何だったんだ」という気持ちになります。能力への脅威、つまり先生方の板書、あるいは生徒指導ではなくて、ファシリテーションなんですとなると、今までの能力はなんだったんだ、みたいな話になって、どうしたらいいのか分からなくなって、困惑をして、最終的に「おまえは校長派か、校長派じゃないのか」みたいな対立が起こります。これは、絶対に起こると言われています。

(スライド28) もしスライドが必要でしたら後でお渡ししますが、これが起こるという前提でどう解決していったらいいのかという解決策が、この中のコンフリクトのところをご覧いただくと、トリアージせよと書いてあります。トリアージというのは、医療用語ですよね。つまり、緊急の患者なのかそうではないのか仕分けをしろと言っています。トリアージをして、クリティカルマスを取れと言っています。クリティカルマスは、経営用語でいうと16%と言われたりするやつです。他の人たちが無視できないくらいのうねりにしろという話があります。最初に言ったように、否定的な人ほど乗ってくるときは乗ってくることがあります。そうはいっても「あと2年で定年だし」みたいな人も含めて、どこまで行っても乗っ

てこない人はいます。そういうケースのときもあるので、トリアージです。つまり、こいつは一緒にやってくれるという人を見つけていって、ある程度のマスまで持っていくきます。そうすると、マジョリティが付いてきたりするような格好になりますから、打算的はありますけれども、戦略的な視点で見ても、こういうことをやっていくことが大事なのかと思います。

乾： ありがとうございます。酒井先生はこのあたりがうまいから、いろいろ改革が進んでいるのですかね。酒井先生は結構鋭いことを言っているけれども、あまり憎めないというか、腹が立たないというか、腰が低くて上手にやっていますよね。自然にやっているから難しいかもしれないですけれども、このあたりの衝突を乗り越えるコツみたいなものはございますか。

酒井： コツは、僕が聞きたいんですけども。結局、組織にいるので、自分が学年主任であれば、当然、学年のことは責任持たなければいけないですが、その役割で権限を持っていることと、どうしようもないことがあると思うので、そこだけは意識はしているつもりではいます。

乾： (スライド29)なるほど。この次の問題が、これですね。あと4分くらいですが、次に行きます。酒井先生、先ほどの話とつながると思うんですけども「探究よりも詰め込み型学習の偏差値のほうが楽なキャリア教育なので、経験豊富な教員ほど抵抗が強いです。一緒に伴走するよりも指導するほうがローコスト・ハイリターンなので、教員の意識改革が進みません。本校は私学の進学校なので、学びの授業をどちらに振るかが直面している課題です」。これについてはいかがですか。なかなか難しいかもしれませんのが。

酒井： 多分、これはプロアの管理職をされた方の方がいいお答えをお持ちだと思います。私

は数学ですので、数学の授業の方がもちろん楽です。ちゃんと決まっていますからね。ただ、二項対立ではないのではないかとは思います。学びの事項をどちらに振るかについては、両方大事な気がしています。いわゆる進学実績という狭い範囲だけで考えたとしても、京都にある難関大学の合格者が多いと言われている学校は、よく見たら二軸で受からせているみたいなことがあります。学校としては両方をちゃんとやっていて、結果的に狭く入試で見ると、総合型と言われている特色と一般とで足すから多くなっているのです。どちらに振るかを言い出すと、ちょっと難しい議論になるのではないかと思います。学校改革で学校をゼロから作り直すのであれば、どちらに振るかという議論になる気はするんですけども、今、学校があつて、今すぐつぶれるわけでもない状況であれば、ゼロヒヤクではなくてバランスではないかと思います。フロアの方、補足をお願いしますという感じです。



乾： そうですよね。やはり、現実的なものもありますし、いきなり思い切って右から左にというわけにもいかないという、上手にバランスを取りながらということなのでしょうか。

(スライド30)では、こちらが最後になります。お二人へということでございました。「改革を推進するために、ミドルリーダーして何を意識して仕事をされていますか」。何を意識したらいいのかというところも含めて、リーダー的な立場、トップではないところも含めて、どういうことを意識されているのか、お願ひできま

しょうか。

寺田： 難しいですね。でも、とにかく、今の酒井先生の話とちょっとつながりますけれども、あまり白黒を付けないようにしようかなと思っています。教育現場というか、学校の先生方は二項対立、白黒が好きなんですよね。これが善で、これが悪だという「あいつは何も分かっていない」みたいな感じになりがちなんですけれども、そうすると、先ほどの話のように、それぞれ思いがあるから、クリティカルマスに行かなくなるんです。だから、クリティカルマスに持っていくと、ある程度、大きなうねりにしようとなります。私の中では探究やキャリアがすごく大事で、もちろん核になるという信念はありますけれども、それを「探究やキャリアをやっていないやつなんて、人でなしだ」みたいな話をし始めると大変なことになるので、そうではなくて玉虫色にします。「先生の言っていることも分かりますよ」とか言いつつ「でも、こんなふうに考えてみると、ちょっと面白いかもせんね」みたいな、酒井先生が上手そうなことを言いながらやっていくみたいなところですからね。

子どもたちの人生が大事なんですけれども、ミドルリーダーとしては職員の人生も大事だし、教員の人生も大事なので、それを全部否定したら、みんなやる気もなくなるでしょう。そうではなくて「先生方がやってきたことも大事だよ。良かったよ。でも、同じ目標でもこういう生き方もあるよね」というような話ができるようにするところを特に気を付けている感じです。

酒井： 自分は学年主任とか分掌部長という立場を経験しましたので、現場の中では上と下に挟まれるポジションかなと思います。何を意識していたかと、今、改めて考えていたんですけども、MustとWillとCanと3つの円があると思うんですけども。当然、やらなければいけないMustはあるんですが、Mustは意識しながらWillだけを見ようということは常に意識してい

た気がします。それは自分のWillだけではなくて、同じチームの先生方もそうなんですけれども、探究のカリキュラムをつくるなければいけないときに、それはキャリア教育を核とした、自分がやりたいことでもありましたし、重なった部分を形にしていきます。例えば、先ほども宣伝しましたけれども、校外研究会をやりますと言ったときに、仮に私も立場でしたいと思っても管理職からすると難しいと思います。なぜなら、金土と使って大変ではないですか。でも、そこに文部科学省の指定が入っていれば、やらなければいけないということがありますよね。

やらなければいけないとなったときの中身は、こちらで考えられますので、現場で発表者の方がいらっしゃったら、発表していただける場をつくるとか、面白い先生が来てくださったら、会いたい現場の先生と一緒にセッティングするとか、そういうのは楽しいですか。仙台三高の前校長先生が「教員なんか、どうせやってもやらなくても給料は一緒だから、楽しめなかつたら損だ」と言われたことがあります。あの先生は重責であったから楽しかっただけではないと分かりながら、そう言われていたので、その先生ほどの重責があるわけでもない自分も楽しもうと思ってやっている感じです。答えになっていますかね。

乾： ありがとうございます。今3時になりましたので、最後のお話をしますと、寺田先生からは対立しない智慧とは玉虫色というお話がありました。生徒、あるいは先生の今を認める、まずは肯定的に受け入れることが大事ですね。その言葉は、酒井先生のMust、Will、Canの、Canの部分をまず認めていくというところなのかなと思いました。そういうふうに認めた上で、Mustのことをやってね、ということを言いながらも、Willの力、意思の力、あるいは未来をつくる、ここを信じてやっていくという、この辺のところがうまくいけたら少しずつ前に進むのではないか

というふうに思いました。

このシームレスでボータレスな問い合わせまだ尽きませんが、この後の分科会、それから交流会でさらに探究していただけたらと思っております。これで指定討論を終わりたいと思います。ありがとうございました

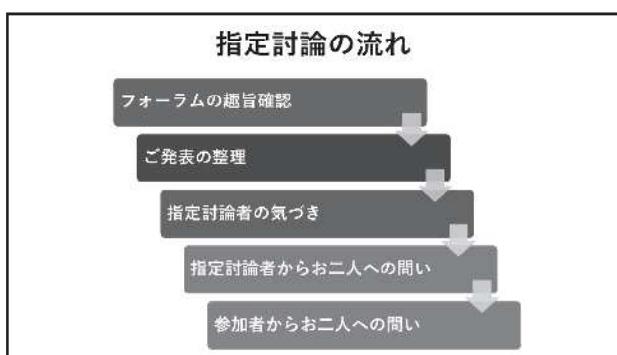
スライド 1



スライド 2

This slide contains a video thumbnail of Ken Miaki, a man in a suit, speaking. To the right is his profile information:  
研究領域・テーマ  
●キャリア心理学  
●キャリアデザインに関する研究  
●高校生の資質活動に関する研究  
主な委員会等  
●2019.3.24～  
京都府市民表記推進フォーラム委員（2024年度  
より退会）  
●2022.3.2～  
大学コンソーシアム京都京都高大連携基盤運  
営オフィスセンター  
●2021.12.1～  
京都府立新羽高等学校 学校運営奨励金 审査  
●2019.3.22～2020.3.3  
文部科学省「2019年度地域社会との価値による高  
等教育活動評価実験企画選定会議」コアル型  
企画評議会 企画者

スライド 3



スライド 4

The slide is titled '第22回高大連携教育フォーラムの趣旨' (Purpose of the 22nd Kōdai-Daiichi Collaboration Education Forum). It states:  
今回のフォーラムでは、探究をとおした「学び」が高等学校から  
大学、社会へと向かう一人一人のキャリア形成とどのようにつな  
がるのか（つなげるのか）、  
加えてこの「学び」の経験の往還（キャリア教育含む）を通じた  
よりよい学校づくり・社会づくりのあり方を探る。

スライド 5

The slide is titled '寺田先生のご講演' (Lecture by Mr. Saito). It lists several points:  
• 日本も含め世界に共通する教育の課題は、  
「①動機付け（入口）」と「②転移（出口）」  
• この2つに共通することは「学びの価値づけ」  
⇒生徒が自ら発見し、価値づけすることが大切  
• 探究的な学習もキャリア教育も「学びの価値を対話を通じて探す旅」  
⇒教育改革もトップダウンではなく、教員自らも発見し、価値づける  
ことが大切

スライド 6

The slide is titled '酒井先生のご講演' (Lecture by Mr. Sakai). It includes the following text:  
• テストの成績は世界トップレベルだが、生徒は将来の夢がない、社会  
の作り手だと思えない…  
⇒その要因は、「お客様（サービス受益者）」かつ「管理・指導による  
学習」モデルの生徒觀にある。  
• この生徒觀を変えるのは、学校での「出会い」・「原体験」と「キャ  
リア教育」  
⇒キャリア教育では、振り返りと対話によって、生徒自らが「マイ・  
テーマ」を見出すことが重要。 ×お客様的キャリア教育はNG  
⇒振り返りと対話により「マイ・ラーニング・ストーリー」や「Will」  
ができる。

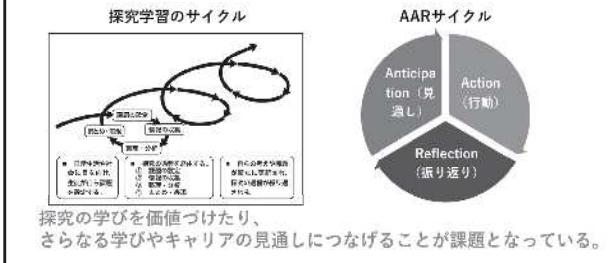
スライド 7

### お二人のご講演からの気づき①

酒井先生のご発表にあった「振り返りと対話」による「マイ・テーマ」、「マイ・ラーニング・ストーリー」づくりは、寺田先生の「学びの価値づけ」（「転移（出口）」と「動機付け（入口）」）の実践であるとも感じた。

スライド 8

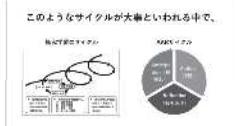
### このようなサイクルが大事といわれる中で、



スライド 9

### お二人への問い合わせ①

- ・探究の学びは、どうすれば価値づけされるのか？  
(生徒だけでなく、教員にも)



スライド 10



スライド 11



スライド 12



スライド 13

7. リンクルーム	<p>■ 設定</p> <p>○ リンクルームを起動するには、以下のように操作します。</p> <p>① リンクルームを起動するには、まず、モード切替スイッチを「モード」位置にします。 ② 選択用スイッチを「リンクルーム」位置にします。 ③ リンクルームを起動するには、モード切替スイッチを「モード」位置から「リンクルーム」位置へ戻すと、モード表示部に「LINK ROOM」が表示されます。</p> <p>■ 機能</p> <p>○ リンクルームを起動するには、モード切替スイッチを「モード」位置から「リンクルーム」位置へ戻すと、モード表示部に「LINK ROOM」が表示されます。</p> <p>○ リンクルームを起動するには、モード切替スイッチを「モード」位置から「リンクルーム」位置へ戻すと、モード表示部に「LINK ROOM」が表示されます。</p> <p>○ リンクルームを起動するには、モード切替スイッチを「モード」位置から「リンクルーム」位置へ戻すと、モード表示部に「LINK ROOM」が表示されます。</p>
8. オーブンドア	<p>■ 設定</p> <p>○ オーブンドアを起動するには、以下のように操作します。</p> <p>① オーブンドアを起動するには、モード切替スイッチを「モード」位置にします。 ② 選択用スイッチを「オーブンドア」位置にします。 ③ オーブンドアを起動するには、モード切替スイッチを「モード」位置から「オーブンドア」位置へ戻すと、モード表示部に「OVEN DOOR」が表示されます。</p> <p>■ 機能</p> <p>○ オーブンドアを起動するには、モード切替スイッチを「モード」位置から「オーブンドア」位置へ戻すと、モード表示部に「OVEN DOOR」が表示されます。</p> <p>○ オーブンドアを起動するには、モード切替スイッチを「モード」位置から「オーブンドア」位置へ戻すと、モード表示部に「OVEN DOOR」が表示されます。</p> <p>○ オーブンドアを起動するには、モード切替スイッチを「モード」位置から「オーブンドア」位置へ戻すと、モード表示部に「OVEN DOOR」が表示されます。</p>

スライド 14

ポイントはふりかえり  
たとえば2学期のチョコブロ、  
1回目のプロジェクト終了時の授業。

スライド 15

## 自己評価→他者との対話→自分と対話でふりかえる

スライド 16

<p>2) 対話 プロジェクトについての感想と自己紹介を話して、もらったコメント</p>
 <p>3) もう少し深く振り返る            - 今回のプロジェクトが上記のようになった理由は?            - どうすればもっといいプロジェクトになった?            - 他の人や先輩のプロジェクトを見て、自分も取り入れたいことは?</p> <p>4) 今回の経験を踏まえて次はどうしたい!と思うこと</p> <p>5) 次のテーマは? (思いつく限り書くこと)            (自分で書いた後で、他の人に提案してもらうこと)</p>

スライド 17

ふりかえりで探究サイクルを次のステージへ

探究的な学習

課題の設定

まとめ・表現 情報の収集 整理・分析

■ 日常生活や社会に目を向け、生徒が自ら課題を設定する。

■ 探究の過程を経験する。

① 課題の設定  
② 情報の収集  
③ 整理・分析  
④ まとめ表現

■ 自らの考えや問題が新たに更新され、探究の過程を繰り返される。

ふりかえり！

スライド 18

卒業生の声（大学3回生）

スライド 19

### お二人のご講演からの気づき②

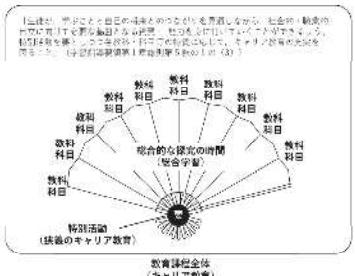


探究の成果報告会（発表会）を全校規模で実施する高校も増えてきた。

しかし、生徒が自己の生き方・在り方（キャリア）の探究成果をまとめ、報告する機会はあまり目にしない。

スライド 20

### キャリア教育は、扇の要と言われている

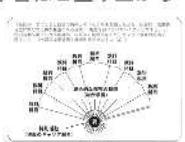


「伝統的・専門的な自己の生き方のための教育資源ながら、社会的・職業的・人間性等に関する多角的な知識、情操、態度等を身に付けていくことが目的である。」  
（学習指導要領「総合的な学習の時間」31頁）

スライド 21

### お二人への問い合わせ②

・学校での様々な学びの成果をまとめ、自己の生き方・在り方（キャリア）や学びを見通す機会としてのキャリア教育は、なぜ探究学習ほど盛り上がりがないのか？  
どうしたら実現できるのか？



スライド 22



スライド 23



古川理樹◎広島県立智恒高等学校1年。教育を受ける側の立場として学校づくりに参画。既存の公教育の校長たちや、現役の学生、未就学児たちと丁寧に対話しながら、小学校のあり方のアップデートをすべく奮闘中。

文=田中友梨 写真=ヤシ・ブース

この記事は「Forbes JAPAN 2024年6月号」に掲載されています。定期購読はこちら>>

スライド 24

### 参加者からお二人への問い合わせ①

【酒井先生へ】

・マイテーマの設定について。私は本校の2年次の探究において人文ゼミを担当しています。そこでは、設定するテーマが社会課題の解決や自分のキャリアに繋がらないものが多く、若地點が難しいという問題が毎年起こっています。個人的には生徒の興味関心を大切にしたいですし、全てを社会に繋げる必要は無いと考えているのですが、このような人文系のテーマ設定について、御校ではどのように実践されているのか、お伺いしたいです。

## スライド 25

### 参加者からお二人への問い合わせ②

【酒井先生へ】

- ・専大間で「教育の接続」を行なう場合、大学側にどのような体制があればよいですか？大学の研究・教育の情報発信、専大連携センター等の組織の設立などありますが、先生が一番重要なことは何でしょうか？

加えて、私は個人的に、大学と高校との間に「人間的な関係性に基づくネットワーク」の構築の必要性を感じていますが、ご多忙な高校の先生方には、そのような感覚はおありでしょうか？

## スライド 26

### 参加者からお二人への問い合わせ③

【寺田先生へ】

- ・学びのイノベーションを進めるにあたり、現場教員のコンセンサスをとることは必要なのか、それとも他の教員の資質を感じて突き進むのか。個が豊かな教育現場では、コンセンサスを取ることは不可能のように感じます。

## スライド 27

### 変革が引き起こす、教員の“1L3C”

#### Loss (喪失感)

- Challenge to Competence (能力への脅威)
- Confusion (困惑)
- Conflict (衝突)

(Boggs, R. (2001). The dynamics of school change: Reform, resistance, and the role of teachers in democratic dialogues.)

## スライド 28

### “1L3C”克服に向けた、組織マネジメントのポイント

	ポイント
前兆	▶ 「変革しないこと」のリスクの確認・共有 （「解決策」を議論する前に、学校が直面する「問題」について、まずは教職員間で合意し、次に原作者やOB等とも共有する） ▶ チャレンジのリスクを認識（心理的安全性の確保）
Loss (喪失感)	▶ これまでの取組や努力との連結性の確保・確認 ▶ 教員による執行監督の特徴の確保（無い過ぎない） ▶ 教職員1人1人の弱みと認識
Challenge to Competence (能力への脅威)	▶ 1人1人の実態に応じた、一貫性ある、組織的な能力開発と支援
Confusion (困惑)	▶ 責任と権限、高周波度プロセスの明確化 ▶ 变革のゴール・価値観と、リーダーの発言・行動の一貫性
Conflict (衝突)	▶ 「トリアージ」による「クリティカルマスク」の確保 ▶ 順切なプレッシャーと暴力の行使 ▶ 衝突の「緊張化」と、組織による解決

(Ishii, K. (2011). p. 56から引用) (42枚)

## スライド 29

### 参加者からお二人への問い合わせ④

【酒井先生へ】

- ・探究より詰め込み学習（偏差値偏重）のほうが楽なキャリア教育なので、経験豊富な教員ほど抵抗が強いです。一緒に伴走するより、指導する方がローコスト、ハイリターンなので、こちらも教員の意識改革が進みません。本校は私学の中堅進学校なので、学びの軸をどっちに振るか、直面している課題です。

## スライド 30

### 参加者からお二人への問い合わせ⑤

- ・改革を推進するために、ミドルリーダーとして何を意識して仕事をされていますか？